

支那史要

大明
部
省
地
定
清

上卷

191

222.01

I763s2
(t)(s)

003098-001-5

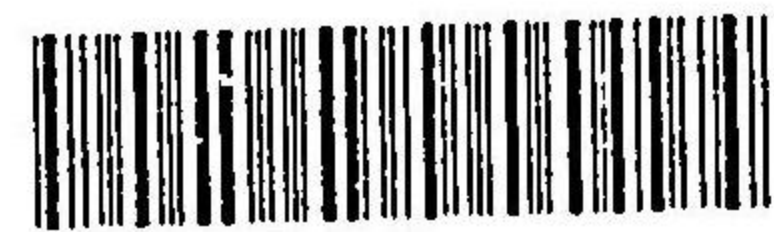
222.01-I763s2(t)(s)

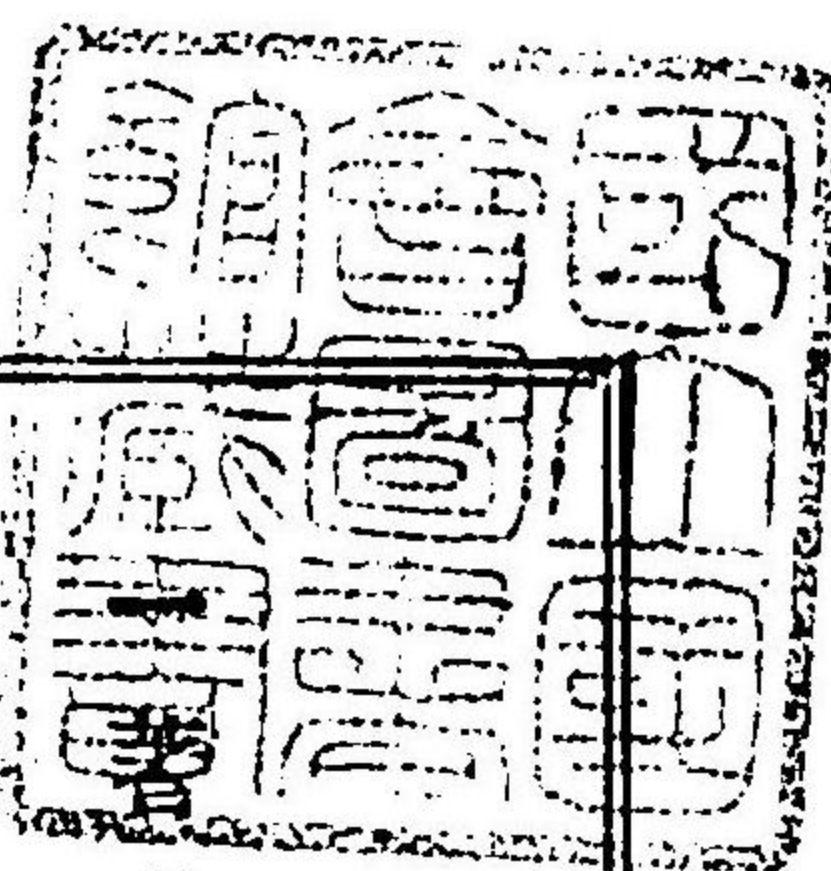
支那史要 附函付

市村 瓚次郎/著

M28

ACC-1112





222.01
I763.2
(+)(s)

凡 例

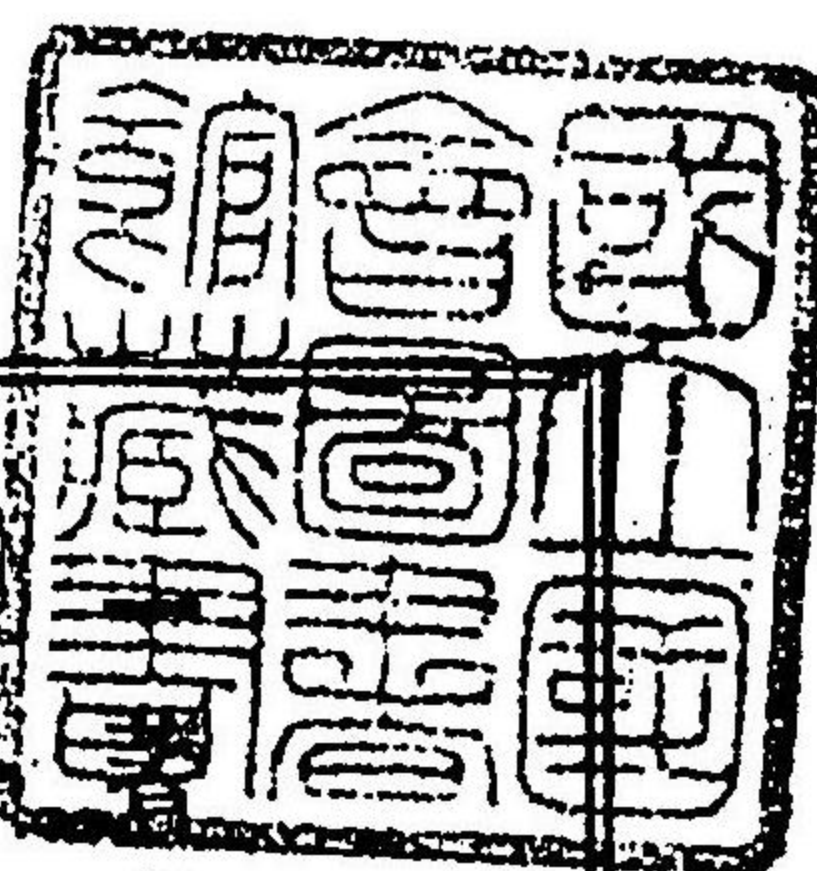
著者曩に支那史を編す篇章頗簡なりしと雖も初學に課するに於ての稍繁に近き所なきにあらず故に今また本書を著るに極めて簡略に従へりされと支那歴代の沿革興亡の大綱を知るにつきての遺漏なきを期す

一 本書の政治上の變遷を主眼となし其前後の關係に頗意を致したり但學術風俗の如きは政治上に關係ありし者のみを記す故に若し其要を知らむと欲する者の支那史を繙かるべし

一 本書の風俗器物等の圖を掲げずと雖も別に沿革地圖を附す希くの参照の便あらむ

一 本書の附録として卷首に支那歴代一覽表及び支那歴代帝

33160



222.01
176302
(+)(0)

凡例

著者墨に支那史を編す篇章頗簡なりと雖も初學に課するに於ての稍繁に近き所なきにあらず故に今また本書を著るに極めて簡略に従へりされと支那歴代の沿革興亡の大綱を知るにつきての遺漏なきを期す

一 本書の政治上の變遷を主眼となし其前後の關係に頗意を致したり但學術風俗の如きは政治上に關係ありし者のみを記す故に若し其要を知らむと欲する者の支那史を繙かるべし

一 本書の風俗器物等の圖を掲げずと雖も別に沿革地圖を附す希くは參照の便あらむ

一 本書の附録として卷首に支那歴代一覽表及び支那歴代帝

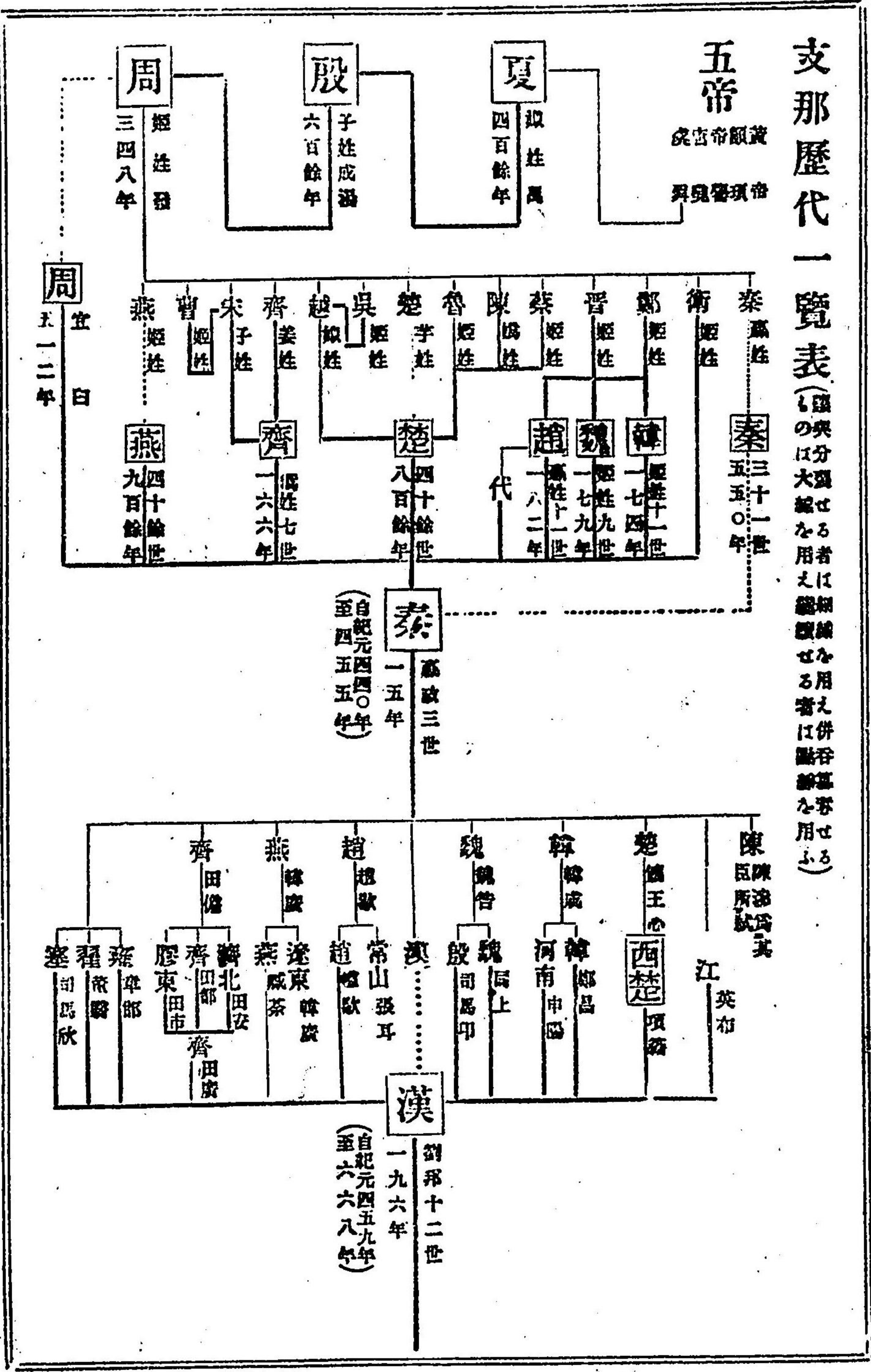
33160

系表、支那歴代帝都表を附す。讀者先づ其諸表を一閱せし其沿革に於て既し思半し過くる者あるべし。一本書し紀元と稱するは皆日本紀元をいふ若し参照の爲めは西洋紀元を引く時の紀元の上に必耶蘇の二字を冠す。一著者固より淺學寡聞なるが故し本書し誤謬の點なきを保せず。讀者若し指教の勞を賜はらひ幸甚し。

明治廿六年秋九月

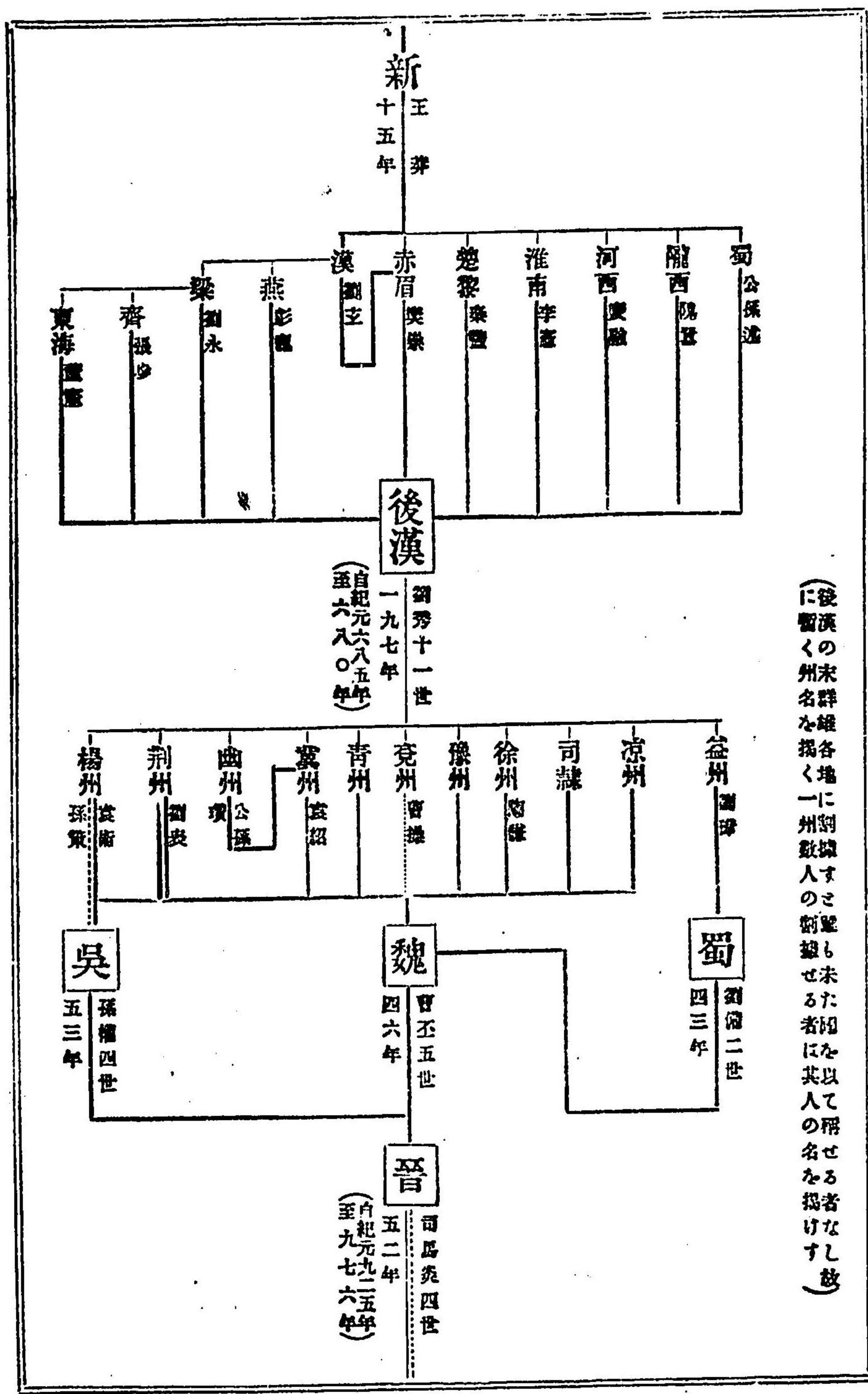
著者 ちるす

支那歴代一覽表 (國の分置せる者は細線を用え、編年せる者は併吞せる者には粗線を用ふ)

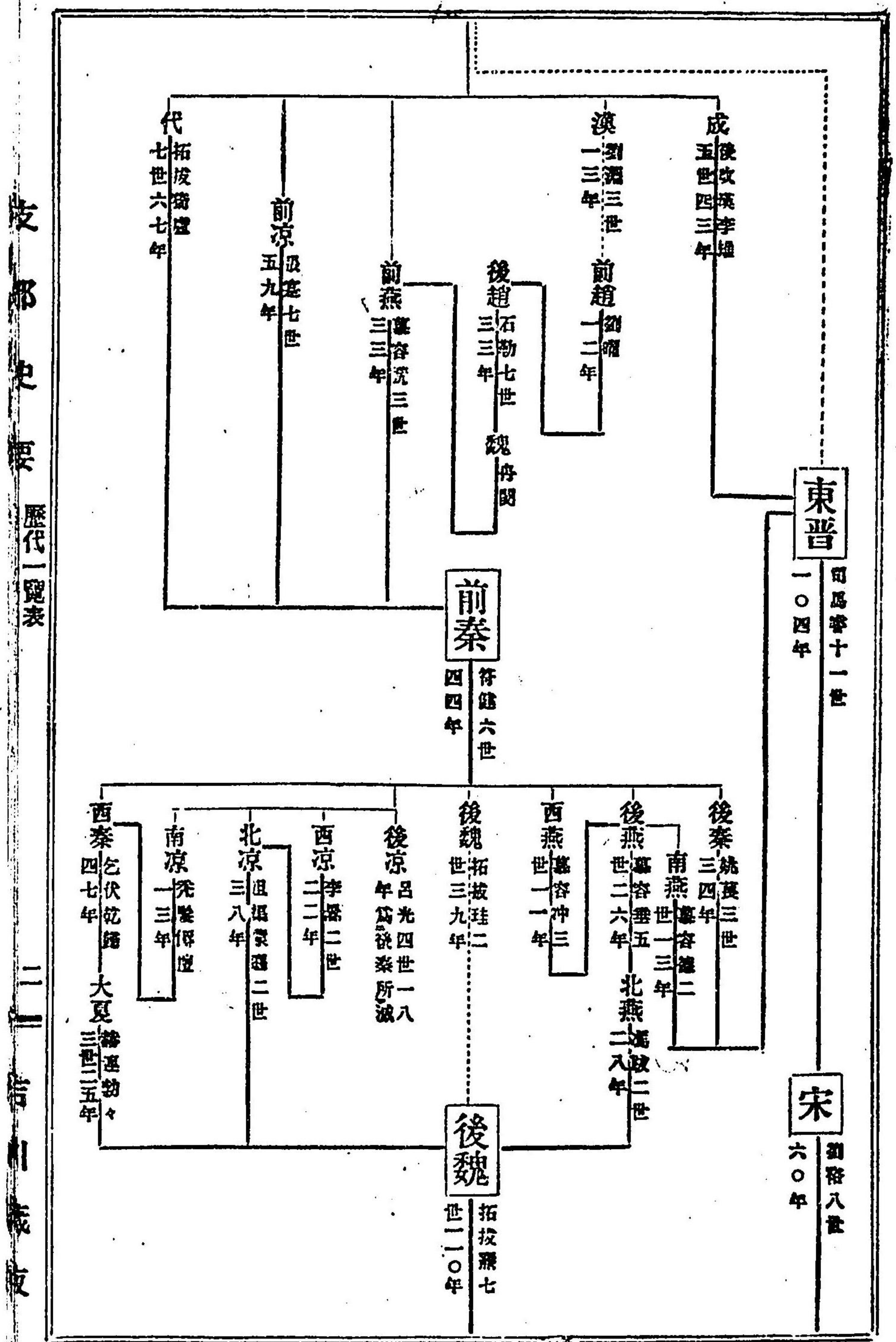


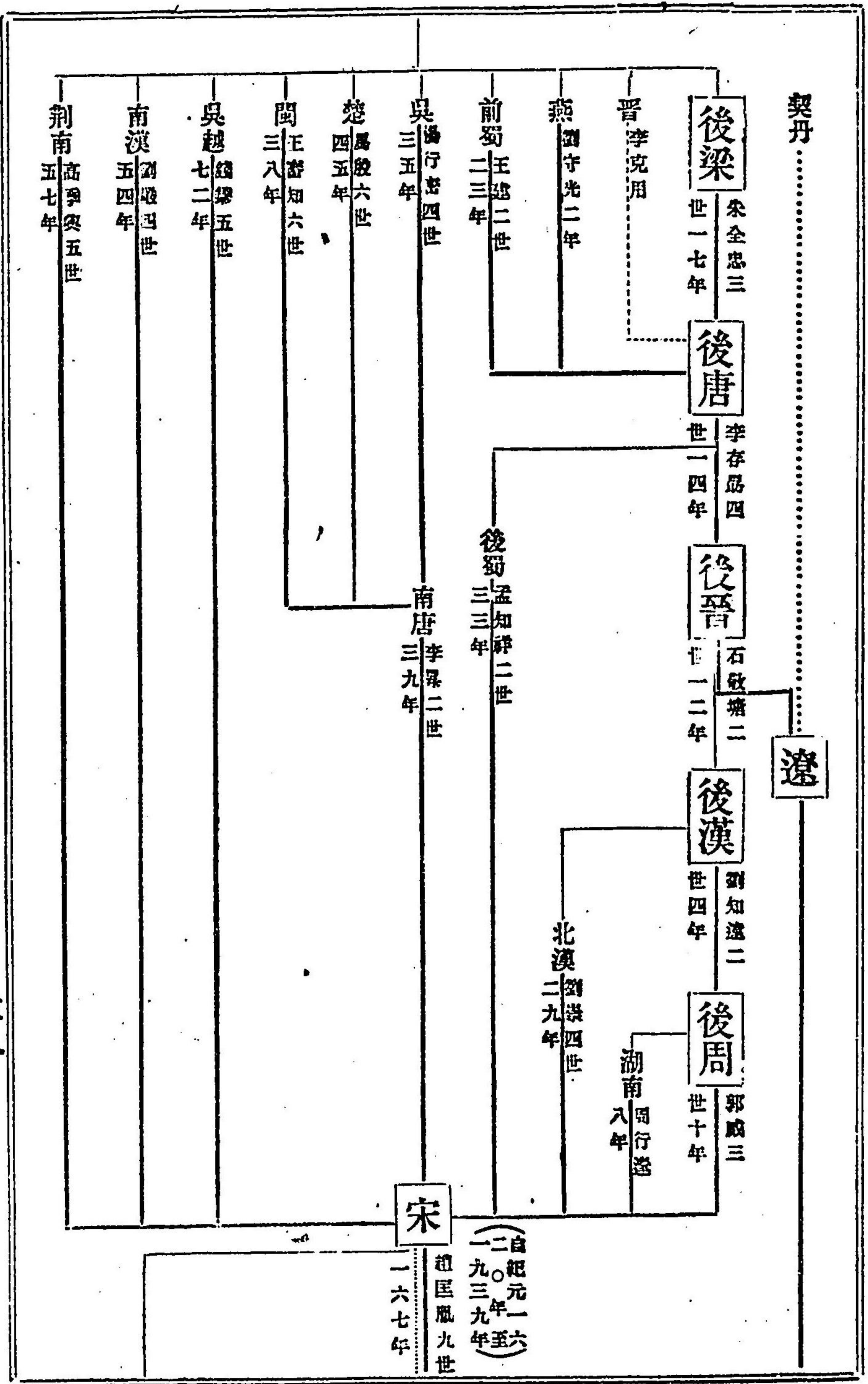
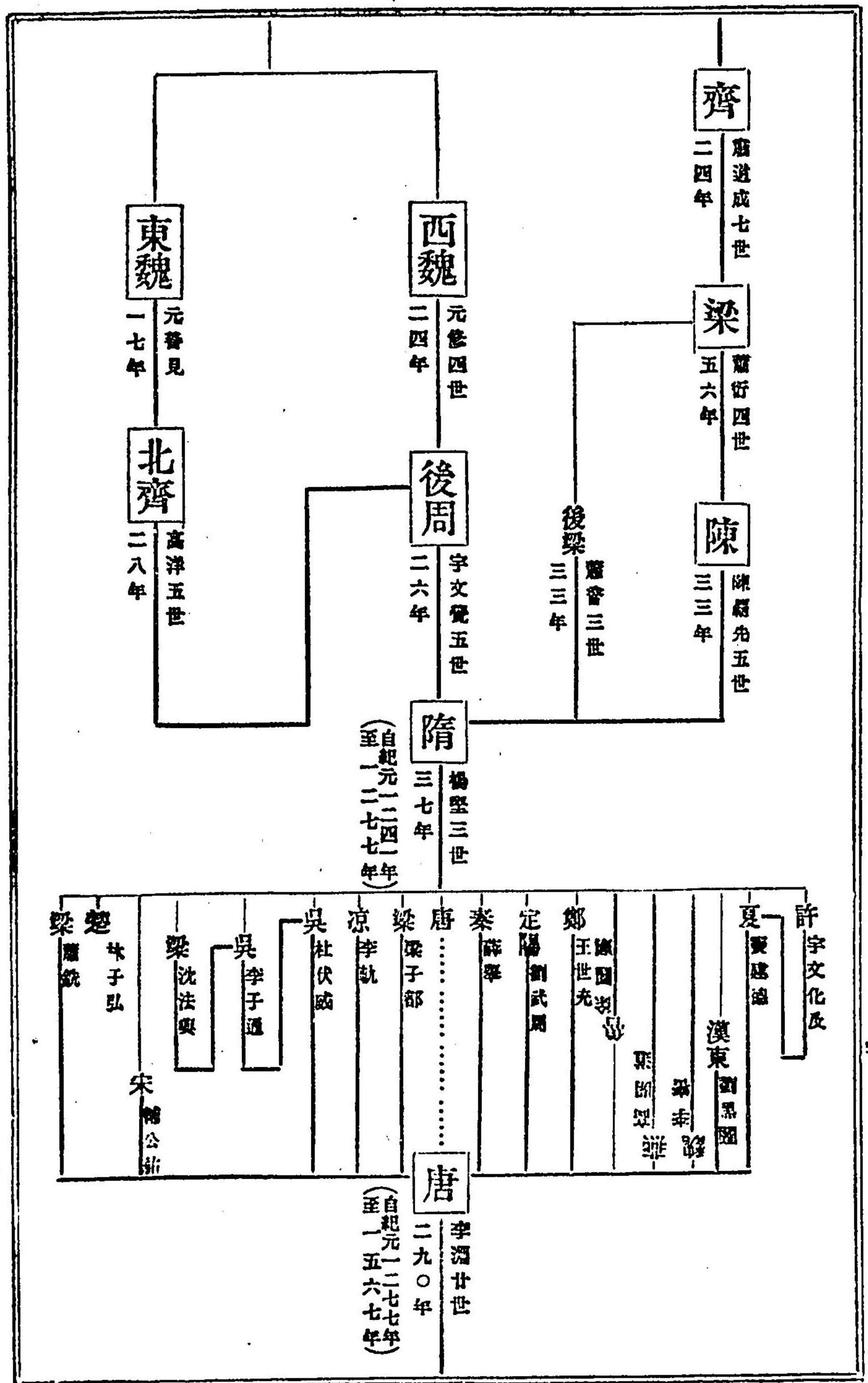
支那歴代一覽表

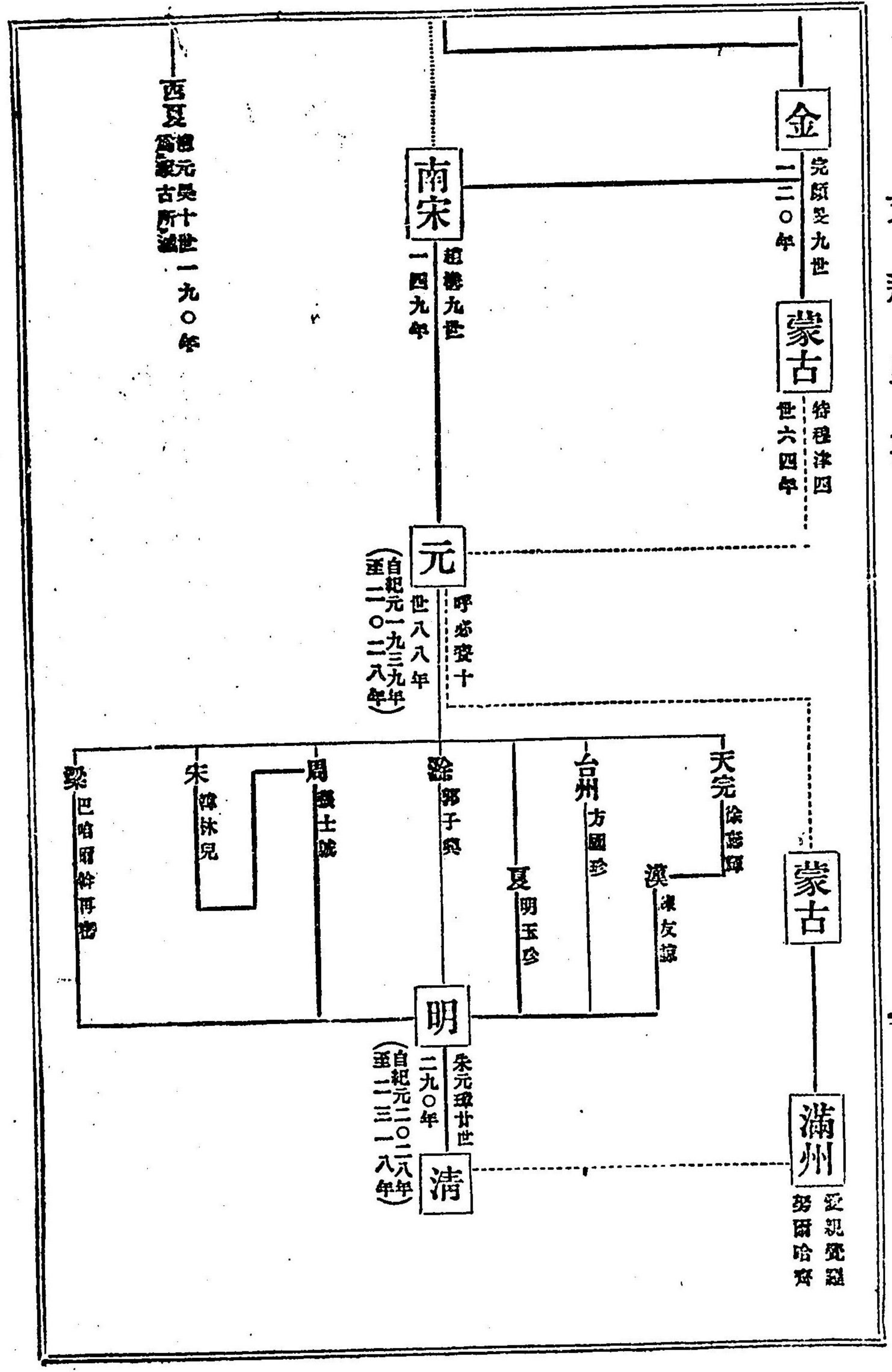
支那歴代一覽表



(後漢の末群雜各地に割據すま置も未だ固を以て稱せる者なし故に後漢の州名を掲ぐ一州數人の割據せる者には其人の名を掲げず)





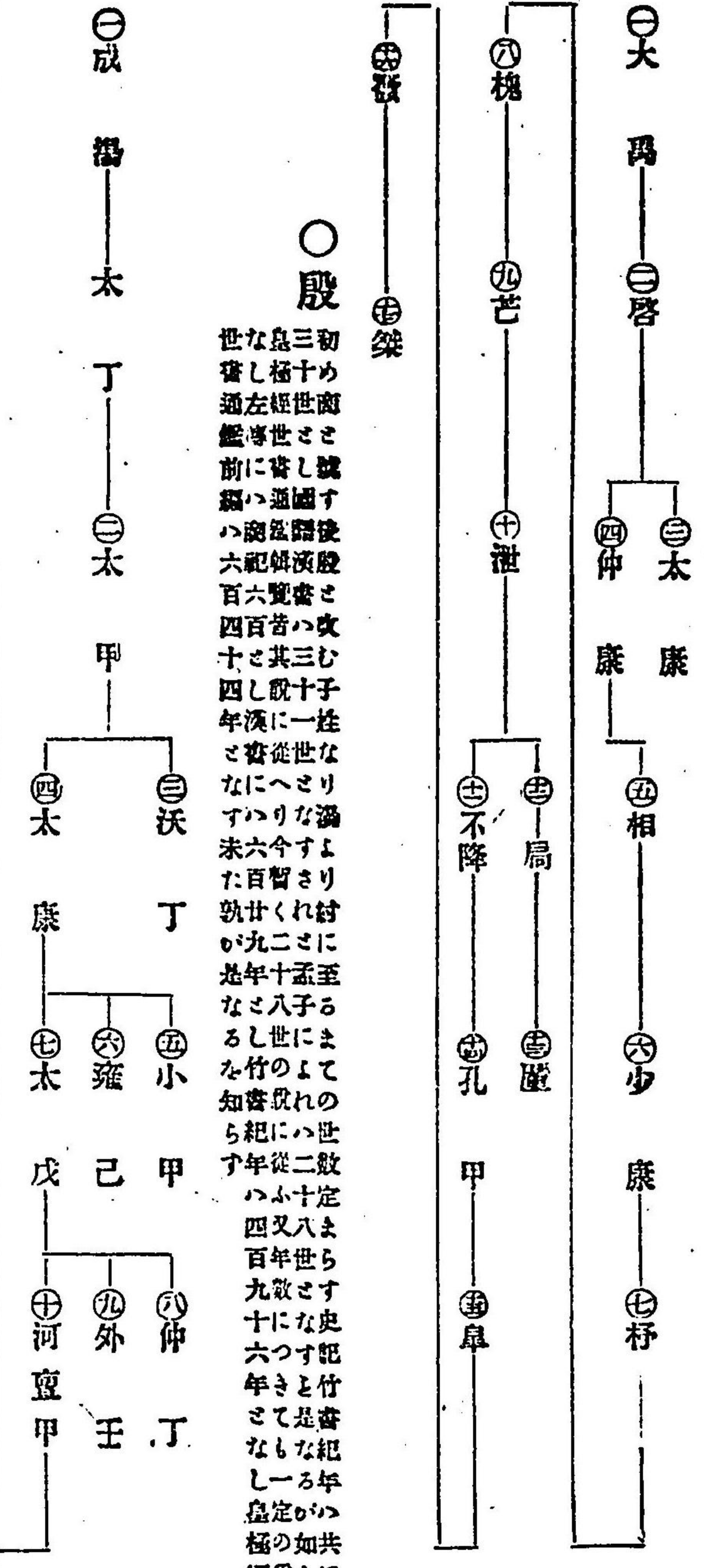


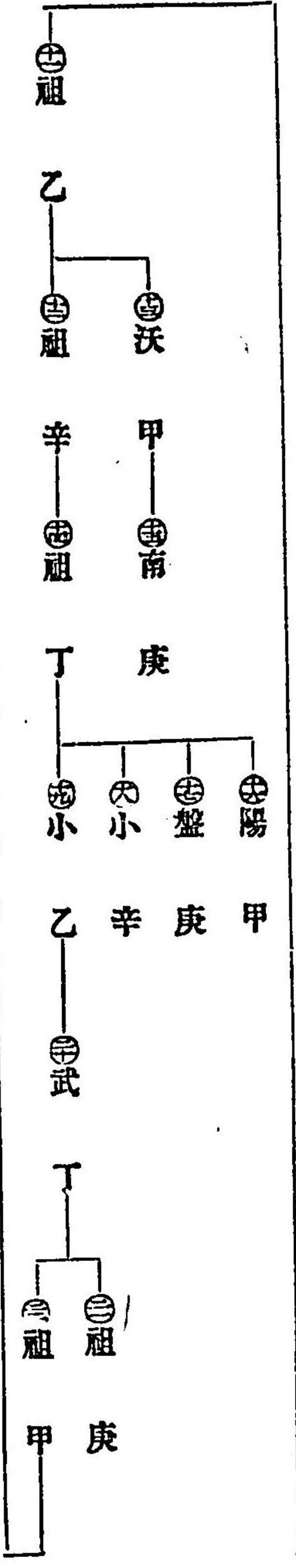
支那歷代帝系表

○黃帝 ○顓頊 ○帝嚳 ○帝堯 ○帝舜 ○帝禹

○夏 一姓なり禹より桀に至るまで十七世なり史記其年數を云はす竹書紀年ハ四百七十一年とし皇極經世書通鑑前編は四百五十八年とし通鑑紀覽は四百三十九年なり

○殷 初十の商と號す殷と號す文王の孫なり湯より桀に至るまで三十世なり史記其年數を云はす竹書紀年ハ六百二十七年とし皇極經世書通鑑前編は六百四十四年とし通鑑紀覽は六百四十七年なり





周の系図

祖 乙 — 沃甲 — 南庚 — 祖 丁 — 陽甲 — 盤庚 — 小辛 — 武丁 — 祖 甲

祖 乙 — 祖 辛 — 祖 丁 — 陽甲 — 盤庚 — 小辛 — 武丁 — 祖 甲

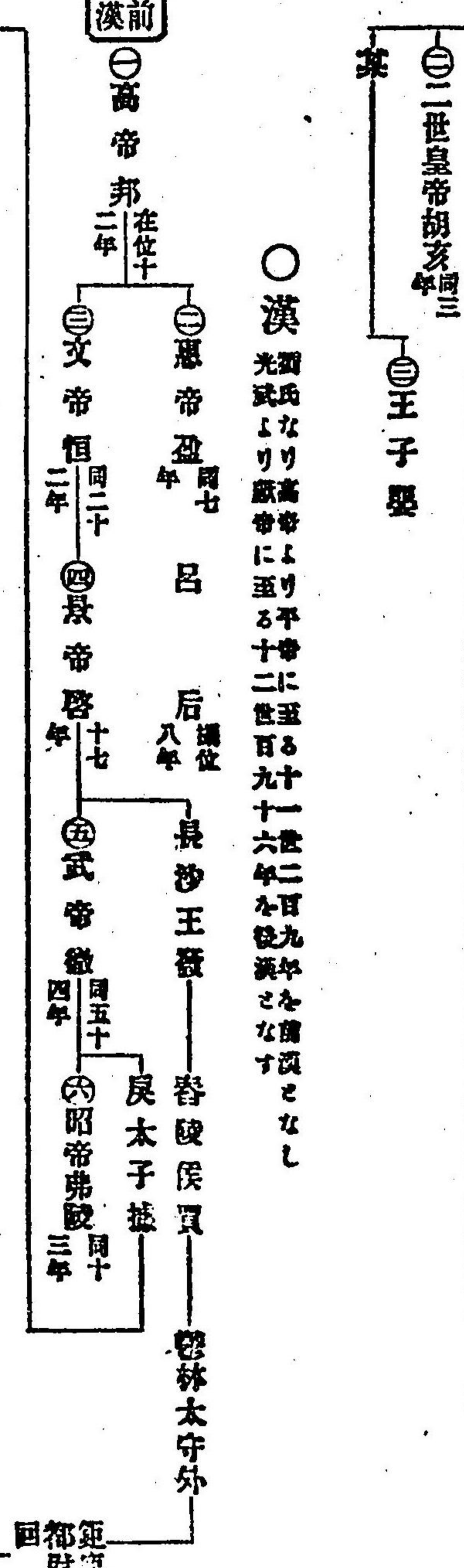
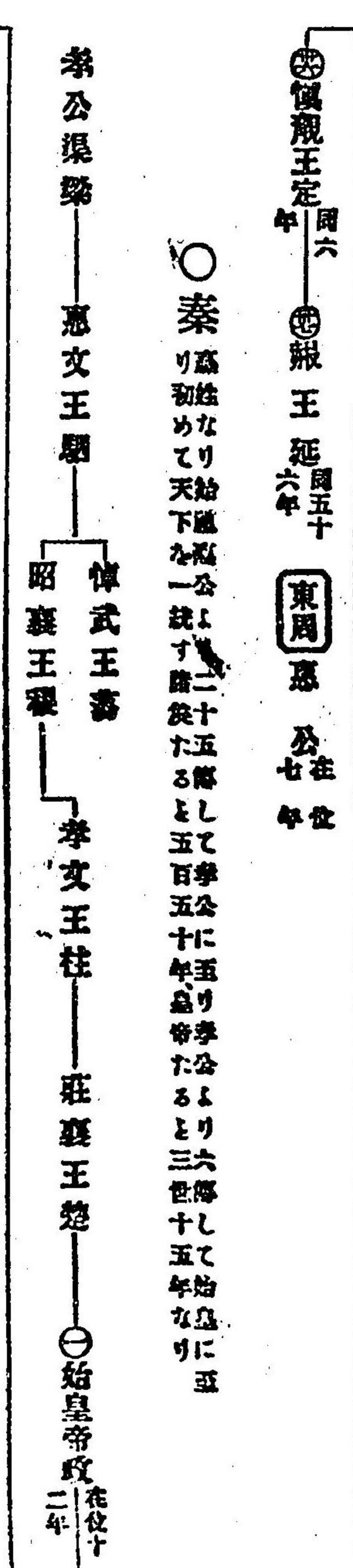
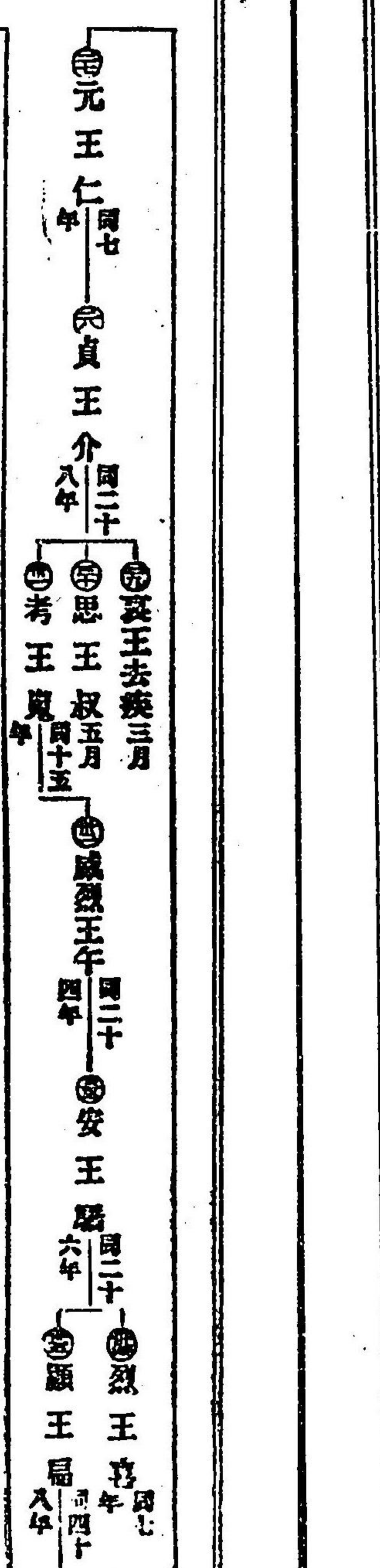
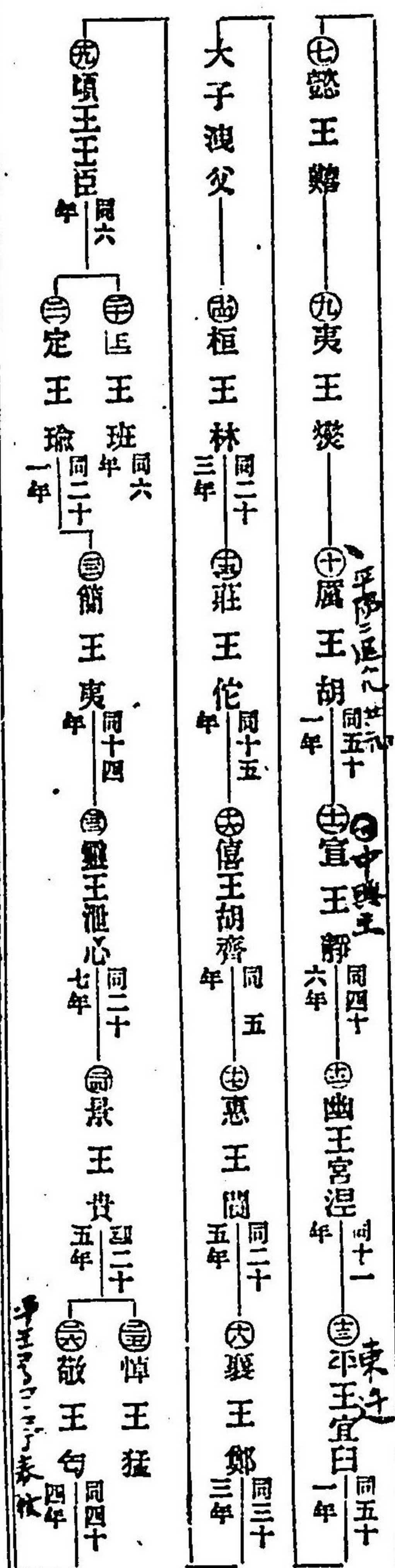
祖 乙 — 祖 辛 — 祖 丁 — 陽甲 — 盤庚 — 小辛 — 武丁 — 祖 甲

周の系図

祖 乙 — 沃甲 — 南庚 — 祖 丁 — 陽甲 — 盤庚 — 小辛 — 武丁 — 祖 甲

祖 乙 — 祖 辛 — 祖 丁 — 陽甲 — 盤庚 — 小辛 — 武丁 — 祖 甲

祖 乙 — 祖 辛 — 祖 丁 — 陽甲 — 盤庚 — 小辛 — 武丁 — 祖 甲

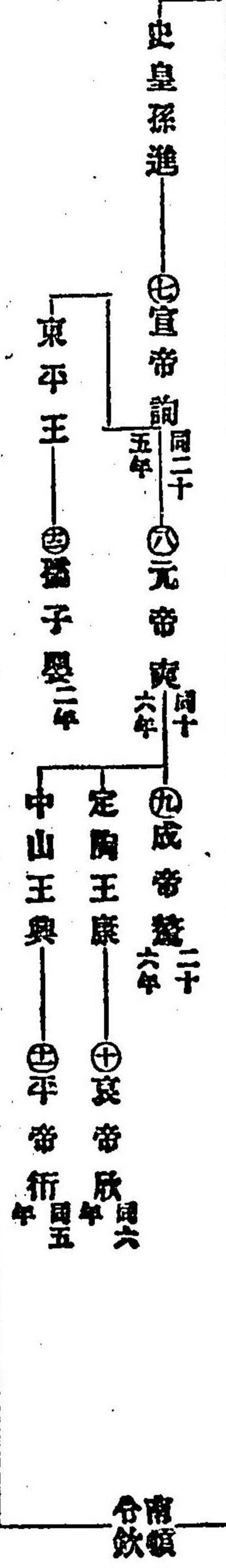


支那歴史要

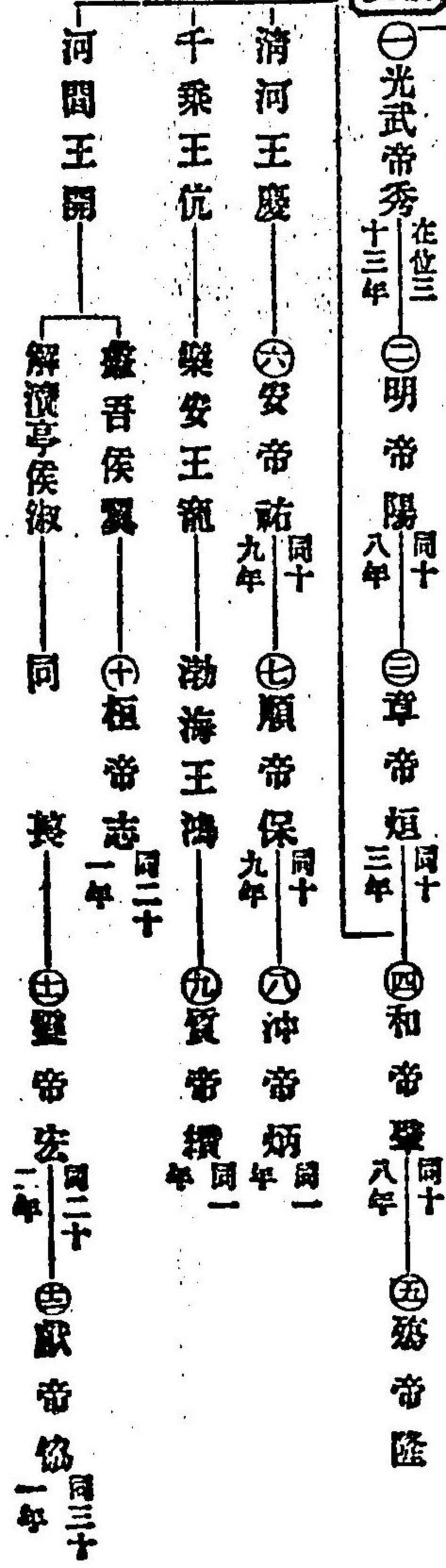
支那歴代帝系表

五

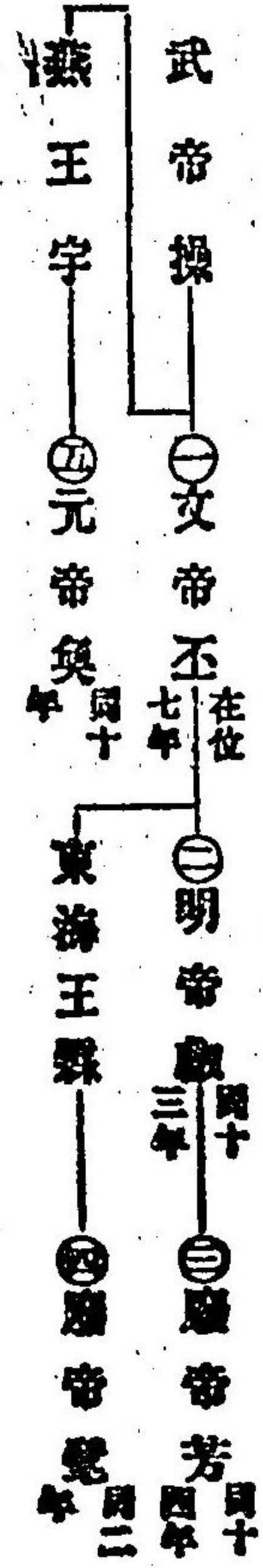
吉川藏版



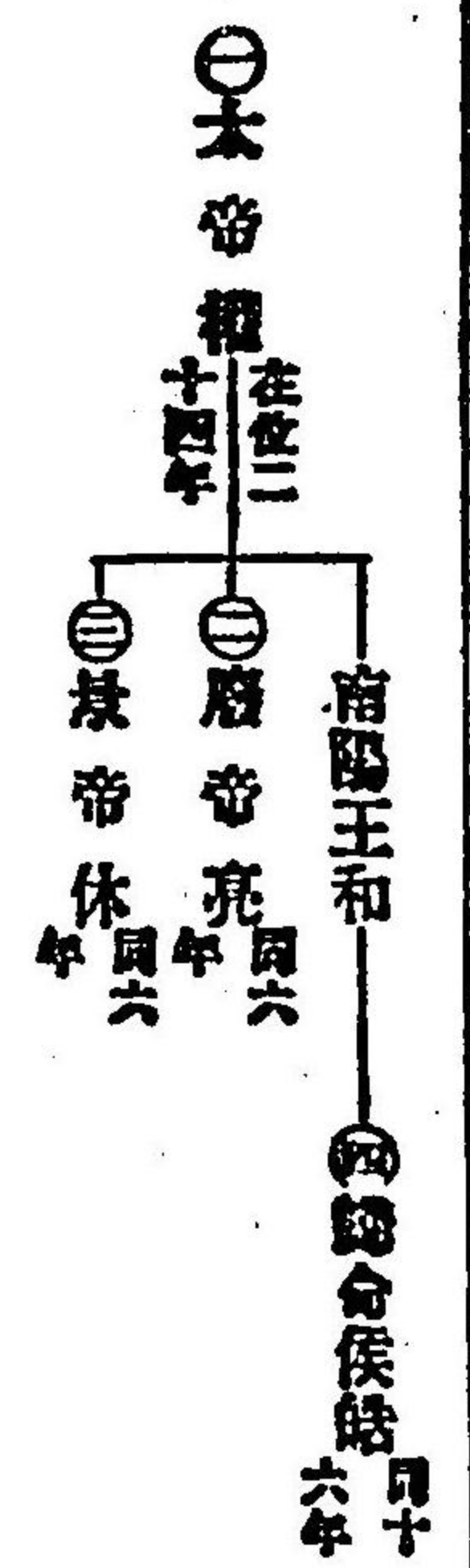
漢後



○魏 曹氏なり文帝より元帝に至るまで五世四十六年となす



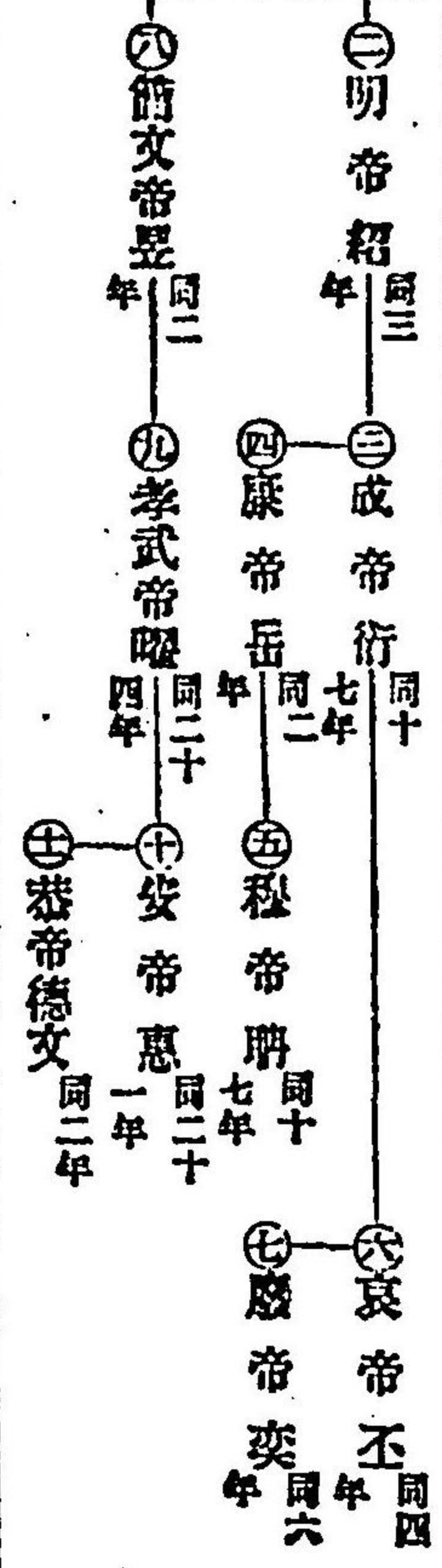
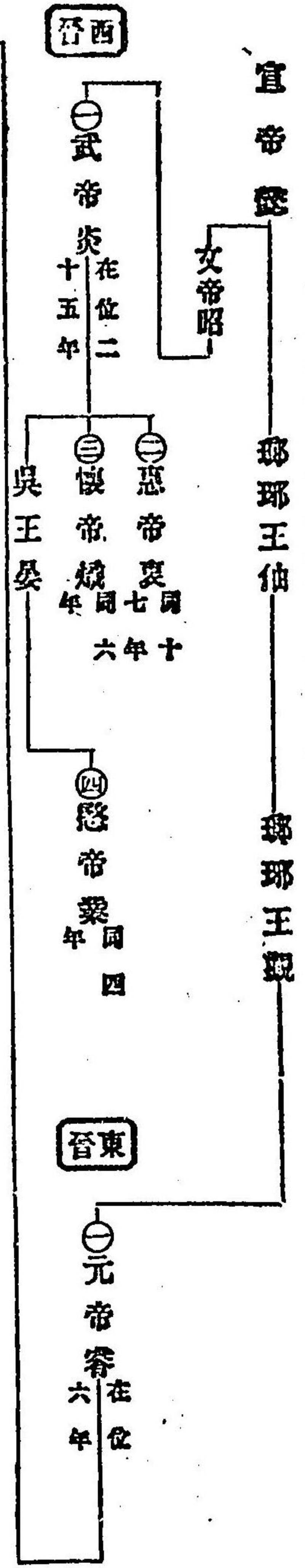
○吳 孫氏なり太帝より廢帝に至るまで四世五十二年となす



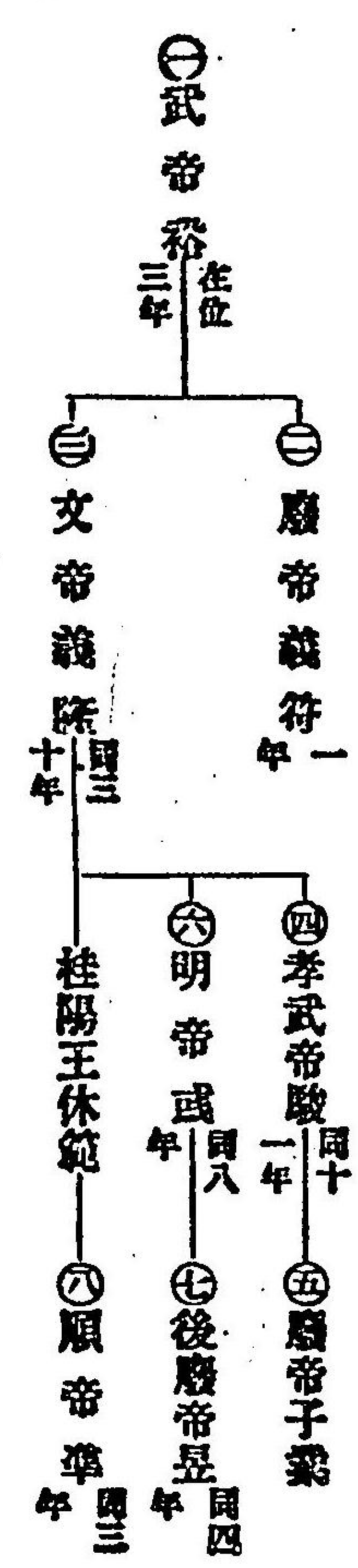
○蜀 劉氏なり二世四十二年にして亡す



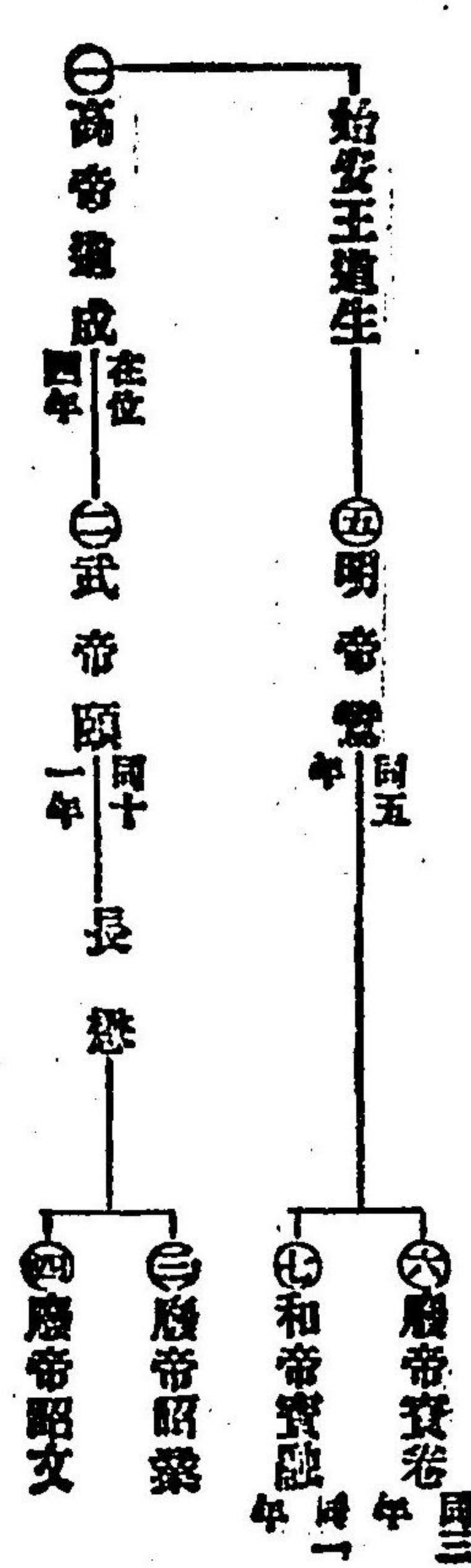
○晉 趙氏なり武帝より廢帝に至る四世五十二年を四世となし元帝より廢帝に至る十一世百四十四年を東晉となし東四併せて百五十六年なり



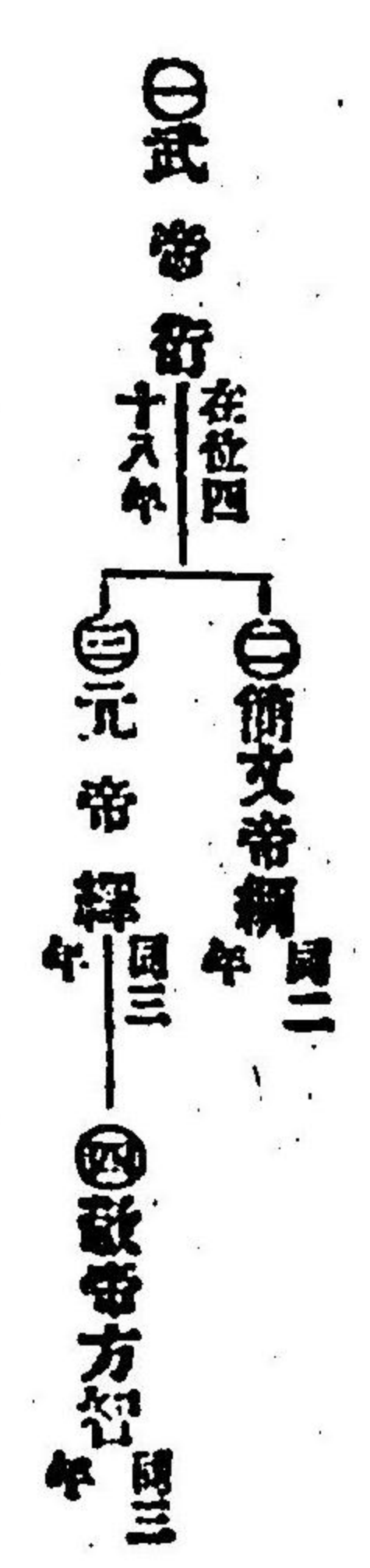
○宋 劉氏なり武帝より順帝に至るまで八世六十年とす



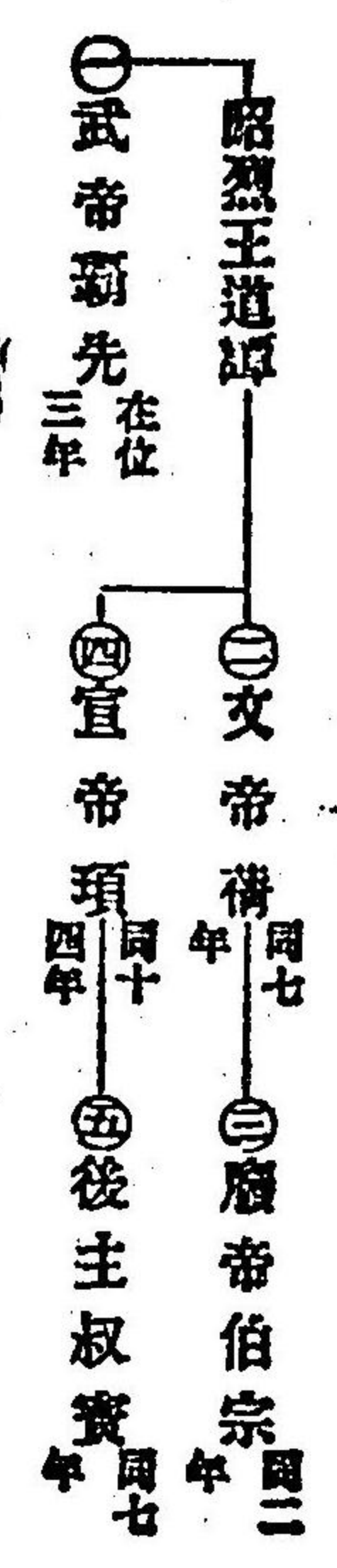
○齊 蕭氏なり高帝より廢帝に至るまで七世二十四年とす



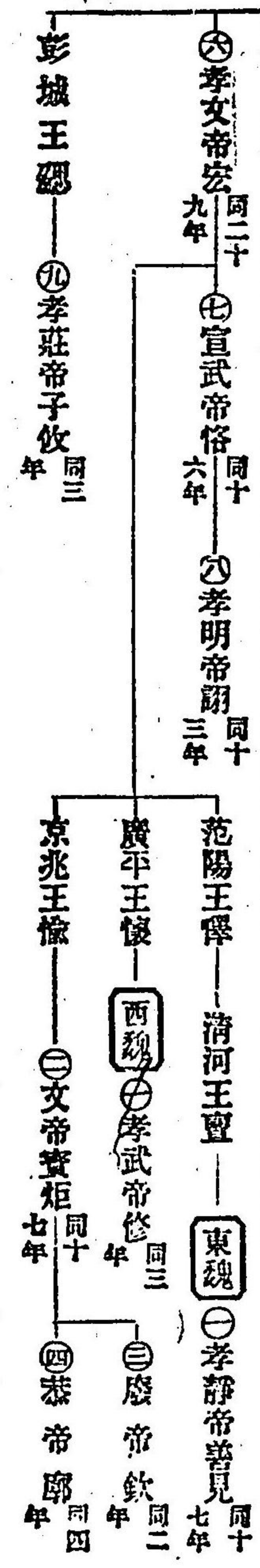
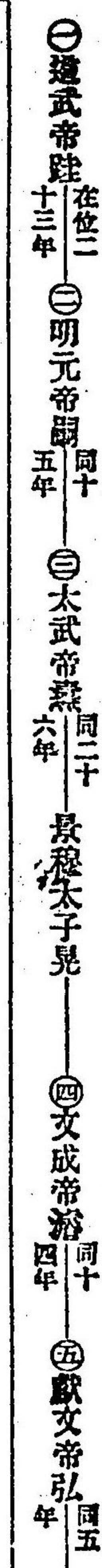
○梁 蕭氏なり武帝より廢帝に至るまで四世五十六年とす



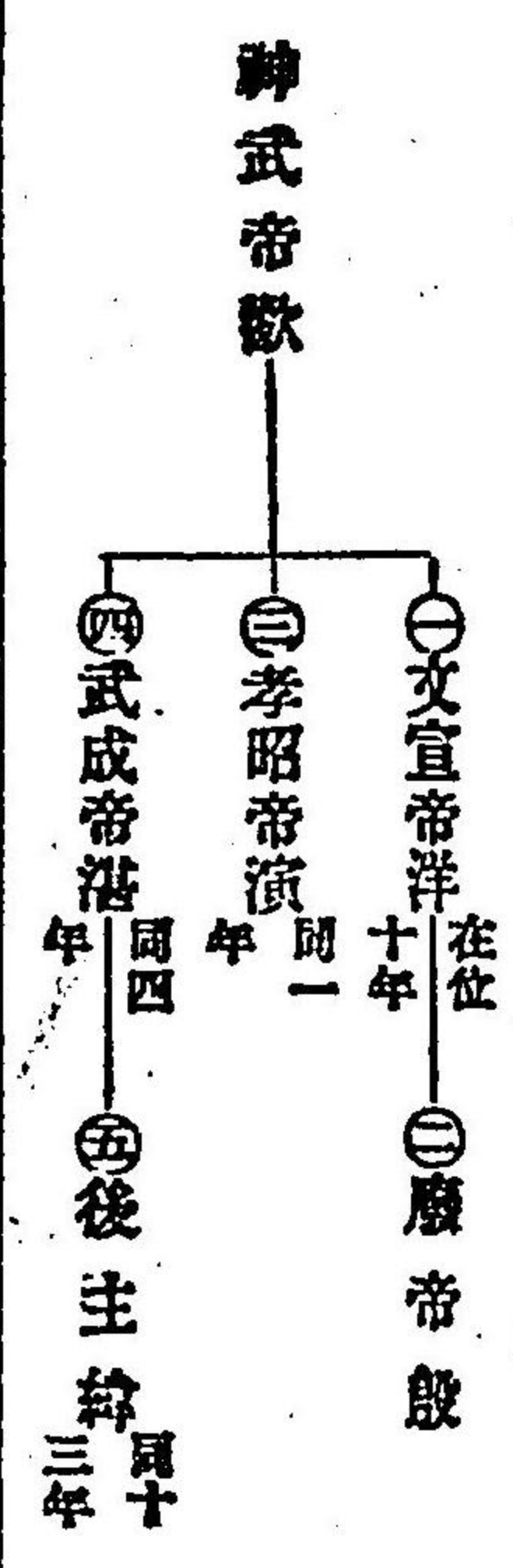
○陳 陳氏なり武帝より廢帝に至るまで五世三十三年とす



○魏 拓跋氏なり後元氏に改む武帝より廢帝に至るまで九世百四十五年とす



○北齊 高氏なり文宣帝より後主に至るまで五世二十八年とす



○後周 宇文氏なり孝愍帝より静帝に至るまで五世二十五年とす

○孝愍帝覺

文帝 恭

○明帝 毓 同四

○武帝 暹 同十

○宣帝 贊 同一

○靜帝 暕 同二

○隋 楊氏なり文帝より恭帝に至るまで三世三十七年とす

○文帝 堅 在位二 十四年

○煬帝 廣 同十

元徳太子 暕

○恭帝 侑 同一

○唐 李氏なり高祖より哀帝に至るまで二十世二百九十年とす 中興則天武后の國號を改めたるは十五年なり

○高祖 淵 在位 九年

○太宗 世民 同二十 四年

○高宗 治 同三十 四年

○中宗 哲 同四十 二年 地開則天氏領天下

○睿宗 旦 同三 年

○玄宗 隆基 同四十 五年

○肅宗 亨 同七 年

○代宗 豫 同十 八年

○德宗 适 同二十 一年

○順宗 曠 同八 月

○憲宗 純 同十 六年

○穆宗 恒 同四 年

○敬宗 湛 同三 年

○宣宗 忱 同十 四年

○文宗 昂 同十 五年

○武宗 炎 同七 年

○懿宗 漵 同十 四年

○僖宗 儼 同十 五年

○昭宗 晳 同十 五年

○昭宣帝 晳 同四 年

○梁 朱氏なり二世にして七年とす

○太祖 全忠 在位 六年

○末帝 瑋 同十 一年

○後唐 本性は朱氏にして四世十四年にして亡ぶ

太祖 克用

○莊宗 存勗 在位 三年

(養子) ○明宗 嗣源 同八 年

○廢帝 從珂 同三 年

○後晋 石氏なり二世にして二年とす

石敬瑭 高祖の兄

○高祖 敬瑭 在位 七年

○出帝 重貴 同四 年

○後漢 劉氏なり二世にして二年とす

○高祖知遠 在位一年 ○隱帝承祐 同三

○後周 郭氏なりして七世十年にして七世十

○太祖威 在位三年 ○世宗榮 同六 ○恭帝宗訓 同中

○宋 趙氏なり太祖より欽宗に至るまで九世百五十二年を南宋となす附北併せて三百二十年なり

宋北

○太祖匡胤 在位十一年

燕王德昭 冀王惟吉 廬陵侯守度 嘉國公世括 房國公令孫 脩武郎子亮

秦王德芳 英國公惟憲 新興侯從郁 華陰侯世將 東頭供奉令給

○太宗光義 同二十二年 ○眞宗恒 同二十五年 ○仁宗禎 同四十四年

○太宗光義 同二十二年

高恭靖王元汾 濮安懿王允讓 英宗曙 同四十四年 神宗頊 同十一年

○神宗頊 同十一年

○哲宗煦 同十一年

○徽宗佶 同二十五年

○高宗構 同三十一年

○欽宗桓 同一年

○孝宗璣 同二十七年

○光宗惇 同五年

○恭宗曁 同二年

○廢帝 同二年

○高宗 同三十一年

○高宗構 同三十一年

○欽宗桓 同一年

○孝宗璣 同二十七年

○光宗惇 同五年

○恭宗曁 同二年

○廢帝 同二年

○高宗 同三十一年

○高宗構 同三十一年

○欽宗桓 同一年

○孝宗璣 同二十七年

○光宗惇 同五年

○恭宗曁 同二年

○廢帝 同二年

○高宗 同三十一年

○高宗構 同三十一年

○欽宗桓 同一年

○孝宗璣 同二十七年

○光宗惇 同五年

○恭宗曁 同二年

○廢帝 同二年

○高宗 同三十一年

○高宗構 同三十一年

○欽宗桓 同一年

○孝宗璣 同二十七年

○光宗惇 同五年

○恭宗曁 同二年

○廢帝 同二年

○高宗 同三十一年

○高宗構 同三十一年

○欽宗桓 同一年

○孝宗璣 同二十七年

○光宗惇 同五年

○恭宗曁 同二年

○廢帝 同二年

○高宗 同三十一年

○高宗構 同三十一年

○欽宗桓 同一年

○孝宗璣 同二十七年

○光宗惇 同五年

○恭宗曁 同二年

○廢帝 同二年

○高宗 同三十一年

○高宗構 同三十一年

○欽宗桓 同一年

○孝宗璣 同二十七年

○光宗惇 同五年

○恭宗曁 同二年

○廢帝 同二年

○高宗 同三十一年

○高宗構 同三十一年

○欽宗桓 同一年

○孝宗璣 同二十七年

○光宗惇 同五年

○恭宗曁 同二年

○廢帝 同二年

○高宗 同三十一年

○高宗構 同三十一年

○欽宗桓 同一年

○孝宗璣 同二十七年

○光宗惇 同五年

○恭宗曁 同二年

○廢帝 同二年

○高宗 同三十一年

○高宗構 同三十一年

○欽宗桓 同一年

○孝宗璣 同二十七年

○光宗惇 同五年

○恭宗曁 同二年

○廢帝 同二年

○高宗 同三十一年

○高宗構 同三十一年

○欽宗桓 同一年

○孝宗璣 同二十七年

○光宗惇 同五年

○恭宗曁 同二年

○廢帝 同二年

○高宗 同三十一年

○高宗構 同三十一年

○欽宗桓 同一年

○孝宗璣 同二十七年

○光宗惇 同五年

○恭宗曁 同二年

○廢帝 同二年

○高宗 同三十一年

○高宗構 同三十一年

○欽宗桓 同一年

○孝宗璣 同二十七年

○光宗惇 同五年

○恭宗曁 同二年

○廢帝 同二年

○高宗 同三十一年

○高宗構 同三十一年

○欽宗桓 同一年

○孝宗璣 同二十七年

○光宗惇 同五年

○恭宗曁 同二年

○廢帝 同二年

○高宗 同三十一年

○高宗構 同三十一年

○欽宗桓 同一年

○孝宗璣 同二十七年

○光宗惇 同五年

○恭宗曁 同二年

○廢帝 同二年

○高宗 同三十一年

○高宗構 同三十一年

○欽宗桓 同一年

○孝宗璣 同二十七年

○光宗惇 同五年

○恭宗曁 同二年

○廢帝 同二年

○高宗 同三十一年

○高宗構 同三十一年

○欽宗桓 同一年

○孝宗璣 同二十七年

○光宗惇 同五年

○恭宗曁 同二年

○廢帝 同二年

○高宗 同三十一年

○高宗構 同三十一年

○欽宗桓 同一年

○孝宗璣 同二十七年

○光宗惇 同五年

○恭宗曁 同二年

○廢帝 同二年

○高宗 同三十一年

○高宗構 同三十一年

○欽宗桓 同一年

○孝宗璣 同二十七年

○光宗惇 同五年

○恭宗曁 同二年

○廢帝 同二年

○高宗 同三十一年

○高宗構 同三十一年

○欽宗桓 同一年

○孝宗璣 同二十七年

○光宗惇 同五年

○恭宗曁 同二年

○廢帝 同二年

○高宗 同三十一年

○高宗構 同三十一年

○欽宗桓 同一年

○孝宗璣 同二十七年

○光宗惇 同五年

○恭宗曁 同二年

○廢帝 同二年

○高宗 同三十一年

○高宗構 同三十一年

○欽宗桓 同一年

○孝宗璣 同二十七年

○光宗惇 同五年

○恭宗曁 同二年

○廢帝 同二年

○高宗 同三十一年

○高宗構 同三十一年

○欽宗桓 同一年

○孝宗璣 同二十七年

○光宗惇 同五年

○恭宗曁 同二年

○廢帝 同二年

○高宗 同三十一年

○高宗構 同三十一年

○欽宗桓 同一年

○孝宗璣 同二十七年

○光宗惇 同五年

○恭宗曁 同二年

○廢帝 同二年

○高宗 同三十一年

○高宗構 同三十一年

○欽宗桓 同一年

○孝宗璣 同二十七年

○光宗惇 同五年

○恭宗曁 同二年

○廢帝 同二年

○高宗 同三十一年

○高宗構 同三十一年

○欽宗桓 同一年

○孝宗璣 同二十七年

○光宗惇 同五年

○恭宗曁 同二年

○廢帝 同二年

○高宗 同三十一年

支那史要 支那歷代帝系表

九二 吉川

○金 初め女眞と號し又女眞と號す完顔氏なり太祖より宣宗に至るまで九世百二十年なり

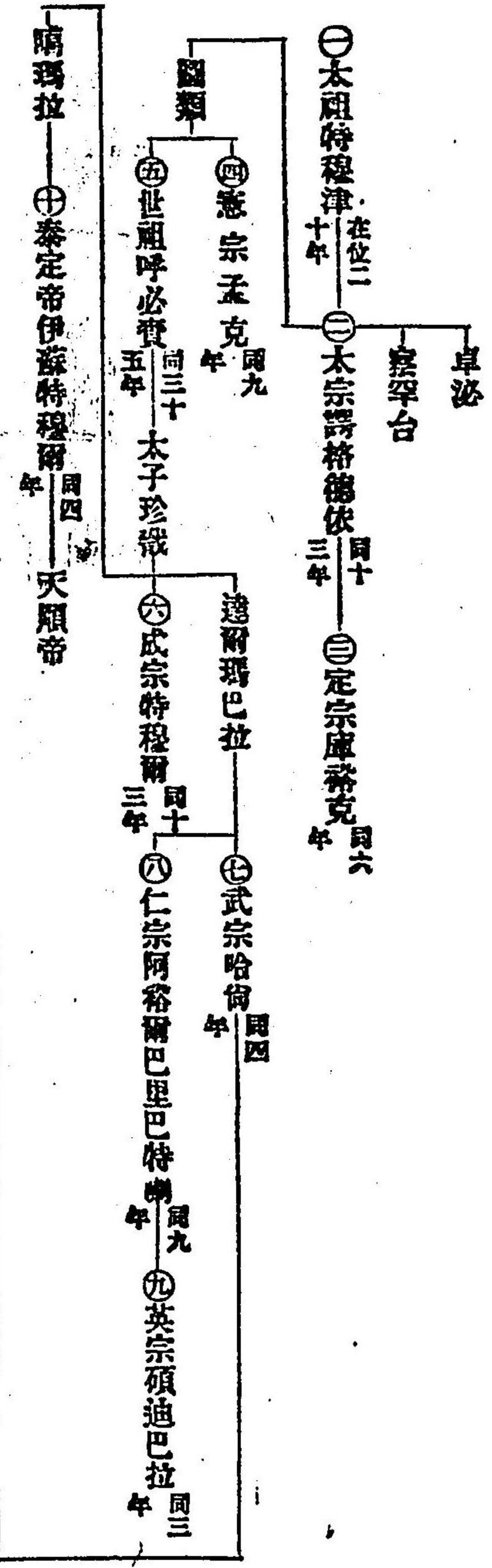
○遼 初め契丹と號す耶律氏なり太祖より天祚帝に至るまで九世二百九年なり

○太祖安巴堅 在位十一年 ○太宗德光 同二十二年 ○四祖宗舒 同八年 ○東丹王圖欲 同四年 ○世宗烏雲 同四年 ○景宗賢 同十四年 ○聖宗隆緒 同八年 ○興宗宗眞 同二十四年 ○道宗洪基 同四十六年 ○昭懷太子浚 ○天祚帝延禧 同二十二年

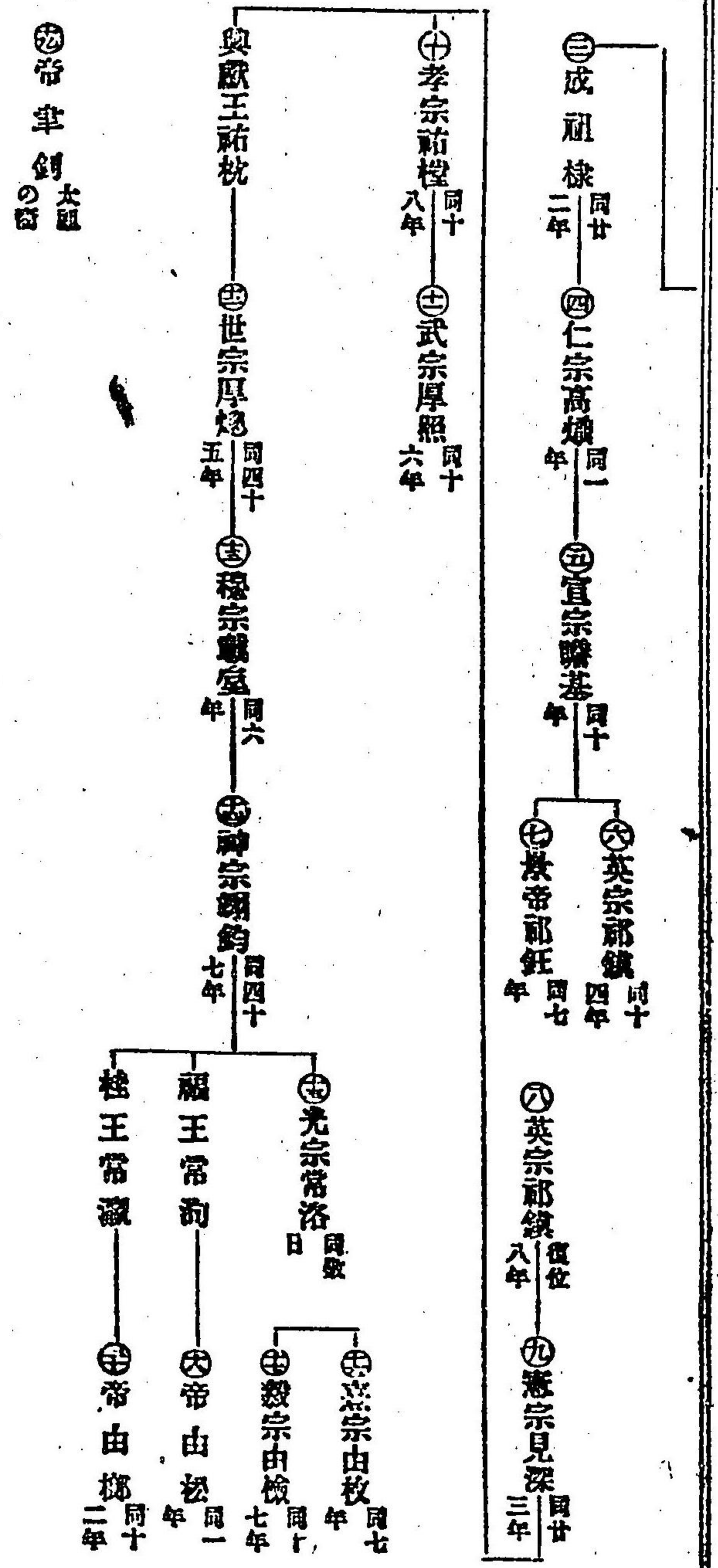
○太祖長 在位八年 ○太宗晟 同十二年 ○宗峻 同十四年 ○熙宗亶 同十四年 ○宗幹 同十四年 ○廢帝亮 同二十二年 ○宣孝太子允恭 ○章宗璟 同十九年 ○宗輔 同十二年 ○世宗雍 同二十九年 ○廢帝允濟 同五年 ○宣宗珣 同十九年 ○哀宗守緒 同十一年

— 雅師公國越師太贈 — 件伯公國益師太贈 — 脩武郎子亮

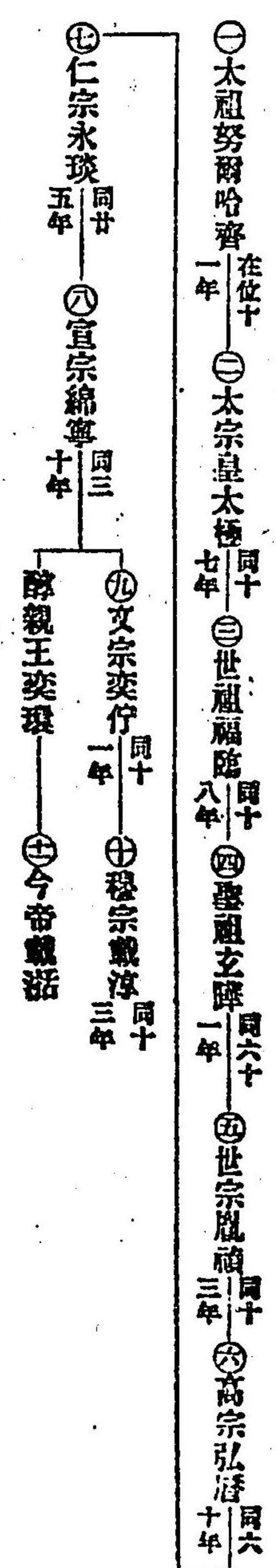
○元 部特氏なり太祖より五傳して世祖に至り初めて海内を統一す後九傳して順帝に至り漢北に支那に君臨せしと八十八年なり



○明 朱氏なり太祖より世宗に至るまで十七世二百七十七年にして全く清朝に滅されたり



○清 愛親覺羅氏なり太祖即位より今帝の光緒十



支那歴代帝系表

支那歷代帝都表

| 國名 | 建都者及 | 都名 | 今 | 名 | 建設年代 | 永續年月 |
|----|------|----|-------|---|---------|------|
| 殷 | 盤庚 | 殷 | 河南衛輝縣 | 同 | 同 | 同 |
| 周 | 武乙 | 朝歌 | 河南淇縣 | 同 | 同 | 同 |
| 同 | 武王 | 鎬 | 陝西西安府 | 同 | 紀元前四六二年 | 三四八年 |
| 同 | 平王 | 洛邑 | 河南洛陽縣 | 同 | 紀元前一一〇年 | 五一九年 |
| 秦 | 始皇 | 咸陽 | 陝西咸陽縣 | 同 | 紀元四四〇年 | 一五年 |
| 前漢 | 高祖 | 長安 | 陝西西安府 | 同 | 紀元四五九年 | 二〇九年 |
| 新 | 王莽 | 長安 | 前注 | 同 | 紀元六六八年 | 一五年 |
| 後漢 | 光武 | 洛陽 | 河南洛陽縣 | 同 | 紀元六八五年 | 一九七年 |
| 魏 | 文帝 | 洛陽 | 前注 | 同 | 紀元八〇年 | 四六年 |
| 蜀 | 昭烈 | 成都 | 四川成都府 | 同 | 紀元八一年 | 四三年 |
| 吳 | 太帝 | 建業 | 江蘇府 | 同 | 紀元八九年 | 五一年 |
| 西晉 | 武帝 | 洛陽 | 前注 | 同 | 紀元二五年 | 四八年 |
| 同 | 愍帝 | 長安 | 前注 | 同 | 紀元七三年 | 四年 |
| 東晉 | 元帝 | 建康 | 江蘇府 | 同 | 紀元七七年 | 一〇四年 |
| 宋 | 武帝 | 同前 | 同前 | 同 | 紀元一〇八年 | 五九年 |

| 國名 | 建都者及 | 都名 | 今 | 名 | 建設年代 | 永續年月 |
|-----|------|----|---------|----|------|------|
| 黃帝 | 涿鹿 | 涿鹿 | 直隸省宣化府保 | 未詳 | 未詳 | 未詳 |
| 顓頊 | 帝邱 | 帝邱 | 直隸省大名府 | 同 | 同 | 同 |
| 帝嚳 | 亳 | 亳 | 河南歸德府 | 同 | 同 | 同 |
| 帝堯 | 平陽 | 平陽 | 山西平陽府 | 同 | 同 | 同 |
| 帝舜 | 蒲坂 | 蒲坂 | 山西永濟縣 | 同 | 同 | 同 |
| 大禹 | 安邑 | 安邑 | 山西安邑縣 | 同 | 同 | 同 |
| 帝相 | 商邱 | 商邱 | 河南商邱縣 | 同 | 同 | 同 |
| 成湯 | 亳 | 亳 | 河南商邱縣 | 同 | 同 | 同 |
| 仲丁 | 囂 | 囂 | 河南開封府 | 同 | 同 | 同 |
| 河實甲 | 相 | 相 | 河南開封府 | 同 | 同 | 同 |
| 祖乙 | 耿 | 耿 | 山西澤州府 | 同 | 同 | 同 |
| 同 | 邢 | 邢 | 直隸省邢臺府 | 同 | 同 | 同 |

| | | | | | |
|----|----|----|--------|-----------|------|
| 齊 | 高帝 | 建康 | 江蘇府 | 建元元年一三九年 | 二七年 |
| 梁 | 武帝 | 同前 | 同前 | 天監元年一六二年 | 五三年 |
| 同 | 元帝 | 江陵 | 湖北名州 | 承聖元年一一二年 | 三年 |
| 陳 | 武帝 | 建康 | 前に注す | 永定元年一二一七年 | 三三年 |
| 後魏 | 道武 | 平城 | 山西名大同 | 登國元年一〇四六年 | 一〇七年 |
| 同 | 孝文 | 洛陽 | 前に注す | 太和元一七五三年 | 四一年 |
| 東魏 | 孝靜 | 鄴 | 河南名彰德 | 天平元一九四年 | 一七年 |
| 西魏 | 孝武 | 長安 | 前に注す | 永熙元一一九四年 | 二四年 |
| 北齊 | 文宣 | 鄴 | 前に注す | 天保元一二一〇年 | 二八年 |
| 後周 | 孝愍 | 長安 | 前に注す | 紀元一二一七年 | 二六年 |
| 隋 | 文帝 | 同前 | 同前 | 開皇元一二四一年 | 三七年 |
| 唐 | 高祖 | 同前 | 同前 | 武德元一二七七年 | 二八七年 |
| 同 | 昭宗 | 洛陽 | 前に注す | 天祐元一五六三年 | 四年 |
| 後梁 | 太祖 | 汴 | 河南名開封府 | 開平元一五六七年 | 一七年 |
| 後唐 | 莊宗 | 洛陽 | 前に注す | 龍德元一五八一年 | 一四年 |

| | | | | | |
|----|----|----|--------|----------|------|
| 後晉 | 高祖 | 汴 | 前に注す | 天福元一五九六年 | 一二年 |
| 後漢 | 高祖 | 開封 | 汴に同じ | 開運元一六〇六年 | 四年 |
| 後周 | 太祖 | 同前 | 同前 | 廣順元一六一〇年 | 一〇年 |
| 宋 | 太祖 | 同前 | 同前 | 建隆元一六二〇年 | 一六七年 |
| 同 | 高宗 | 臨安 | 杭州府 | 建炎元一七八九年 | 一四五年 |
| 夏 | 景宗 | 興慶 | 甘肅府 | 天授元一七九八年 | 一八九年 |
| 遼 | 太祖 | 臨潢 | 内蒙古巴林北 | 神冊元一五七八年 | 未詳 |
| 金 | 太祖 | 會寧 | 江の東色 | 天德元一七七五年 | 三八年 |
| 同 | 海陵 | 中都 | 前に注す | 正統元一八一三年 | 六二年 |
| 同 | 宣宗 | 開封 | 前に注す | 貞祐元一八七四年 | 二〇年 |
| 元 | 世祖 | 大都 | 前に注す | 中統元一九二〇年 | 一〇八年 |
| 明 | 太祖 | 應天 | 江蘇府 | 洪武元二〇二八年 | 五三年 |
| 同 | 成祖 | 順天 | 前に注す | 永樂元一九〇八年 | 二二四年 |
| 清 | 太祖 | 瀋陽 | 遼寧府 | 天命元二二八五年 | 一九年 |
| 同 | 世祖 | 順天 | 前に注す | 順治元二三〇四年 | 二四九年 |

支那史要上卷目錄

首篇 總論

第一篇 古代史

第一章 開闢の傳説及び堯舜の治世

第二章 夏殷の興亡

第三章 周室の盛衰

第一節 周室の起原及び武王周公の政治

第二節 周初の制度禮樂

第三節 成康以後の治亂及び周室の東遷

第四節 春秋の形勢及び覇者の興起

第五節 晋楚の争衡

第六節 吳越の交戦及び陪臣の専横

第七節 戦國の形勢

第八節 合従連衡

第二篇 上世史

第九節 周室及び六國の滅亡

第一章 秦漢三國の治亂

- 第一節 始皇の政治
- 第二節 群雄の蜂起及び秦室の滅亡
- 第三節 漢楚の分争
- 第四節 高祖の治世及び呂氏の専横
- 第五節 文帝の治世及び七國の叛亂
- 第六節 武帝の雄圖及び其失政
- 第七節 霍光の攝政及び宣帝の治世
- 第八節 宦官外戚の専恣及び王莽の篡立
- 第九節 王莽の敗滅及び光武の中興
- 第十節 外蕃の叛服及び班超の偉功
- 第十一節 外戚及び宦官の跋扈

第二章 兩晋南北朝の分合

- 第十二節 海内の争亂及び三國の分立
- 第十三節 三國の和戰及び諸葛亮の經略
- 第十四節 司馬氏の専恣及び三國の滅亡
- 第一節 晋初の形勢及び八王の亂
- 第二節 劉淵の興起及び西晋の滅亡
- 第三節 東晋の中興及び王敦蘇峻の亂
- 第四節 西北諸國の形勢及び桓温の功業
- 第五節 前秦の隆盛及び秦晋の交戰
- 第六節 北方の分裂及び東晋の衰亂
- 第七節 劉裕の興起及び後魏の統一
- 第八節 宋魏の交戰及び蕭道成の篡立
- 第九節 孝文の政治及び魏齊の交戰
- 第十節 蕭衍の建國及び後魏の分裂

第十一節 侯景の叛亂及び陳霸先の興起
第十二節 齊周の興亡及び南北の統一

支那史要上卷目録終

支那史要上卷

首篇 總論



常陸 市村瓊次郎著

支那の境域

境内の區劃

亞細亞大陸の東部に位し廣漠なる土地を占めて一大帝國を成せる者を支那となす其境域の東は朝鮮及び黄海に接し南は支那海に沿ひて安南暹羅緬甸印度に連り西は印度及び土耳其斯坦に抵り北は悉比利亞に界す面積大約八十五萬餘方里あり(東經七十三度に起り百三十六度に止まり西經十八度に起り百三十六度に止まり)境内を分ちて五區となす東南を支那本部となし直隸山東山西陝西甘肅河南江蘇浙江安徽江西福建廣東廣西湖南湖北四川貴州雲南臺灣の十九省あり東北を滿洲となし盛京吉林黑龍江の三省あり西北を蒙古とち戈壁の沙漠を以て内外蒙古の別をなす西方を新疆となし天山南路と天山北路とに分ちしが近來新疆の一省を置く西南を西藏とち前藏と後藏とに分ちたり

山脈

かく境域の廣漠なるは隨ひて山脈の如きと實は數千里は起伏連亘す彼の亞細亞の脊髓と稱する崑崙山脈の西藏と新疆との間を劃し蜿蜒として東は走り支那本部と蒙古との間を過ぎて祈連山となり賀蘭山となり遂は興安嶺とありて黑龍江上は達す其支脈は分れて二となり一は四川甘肅兩省の界より河南湖北安徽諸省は連亘す一は雲南貴州兩省より廣西湖南廣東江西福建諸省の間は起伏し遂は海に入りて舟山の群島となる是れを其山脈の最大なる者とあすかく山脈の大なるに隨ひて水流の如きも亦甚多く且大なる者あり黃河の源を巴顏喀喇山下に發し幾回の曲折をなし一千餘里を走り山東省に至りて海に入り揚子江の源を噶爾布乃日山に發し東流すること一千二百餘里江蘇省に至りて海に入る是れを其水流の最大なる者となす此の水流と山脈との實は支那境域の廣漠なるを證するに足る者なりされは地勢の如き地味の如き氣候の如きも亦地方によりて同トからず既に地勢を異にし地味を異にし氣候を異にする

水脈

境域の沿革

が故に開化の遲速人民の多少も亦地方によりて同しからず且其境内に住する人種の如きも其種類甚多しされと支那の境域は古より此の如く廣漠なりしはあらず時し伸縮あり世し消長あり今其大略を述ふべし

太古の境域

太古の境域は詳ならず想ふは黃帝のときしは揚子江の南戈壁沙漠の北は全く化外の地なりしが夏禹の洪水を治めたる後しは揚子江の南はも及びたるが如しされと周の世し至りては其南は繞し揚子江を跨り北は今の長城に達し東は海に至り西は甘肅に抵りしは過さず然るは春秋より戰國の世は際し併呑攘奪の事行はれ諸侯各地を拓き民を殖するを勉め秦は西南の國を平け楚は南方の土を取り燕は東北の地を廣め趙は北方の地を拓きたり故は秦の六國を滅すは方り其版圖は自ら廣大はなれり是れを支那境域擴張の第一期となす其後漢の武帝は至り四方の諸國を征し南は安南は至り西は土耳其斯坦は至り北は蒙古は至り東は朝鮮は至り是れを支那境

境域擴張の第一期

同第二期

同第三期

同第四期

同第五期

域擴張の第二期となす其後伸縮常なかりきと雖も後漢に至りて班超西域を平け中央亞細亞の地方を領したり是れを支那境域擴張の第三期となす然るは漢室漸く亂れて威令遠きは及ばず支那本部の地の三分して魏吳蜀となり晉また一統の業をなしたりしが幾もなくして各種の人種北方より起り各土地を分有し晋の統一殘喘を江南に保ちたり尋て南北朝となり支那境域の南北は分れて消長定らず然るは隋南北を統一して版圖を擴めたりしが唐の太宗に至りて更に突厥を破り西域を服し其境域の中央亞細亞より悉比利亞の地方に及へり是れを支那境域擴張の第四期となす爾後海内争亂相つきて起り遂は五代十國の勢をなし境域頗縮小す宋の世に至りては契丹西夏女真等の關係ありしが故に歴史の關する境域の頗廣大なりとす元の初めは亞細亞の大半を併呑し歐羅巴の東部を蠶食し後遂は支那本部を略有す是れを支那境域擴張の第五期となす明に至りて其版圖の殆支那本部に止まり西北は猶元の遺族の領する所なりしが清朝に至りて復今日の境域を有するに至りしなり是を支那境域擴張の第六期となす蓋境域の伸縮と人種の盛衰との互に關係を有するか故に更に人種の沿革を述へむとす

同第六期

人種の沿革

商人種と漢人種との關係

漢人種と蒙古人種との關係

りしが清朝に至りて復今日の境域を有するに至りしなり是を支那境域擴張の第六期となす蓋境域の伸縮と人種の盛衰との互に關係を有するか故に更に人種の沿革を述へむとす

支那の歴史に關する人種の主なる者を苗人種漢人種蒙古人種滿洲人種回人種とす此の人種の行爲は即四千餘年の歴史を造れる者なり苗人種は今日雲南貴州の地方に居りて陋俗に安すと雖も太古は揚子江と黄河との間に棲息したるが如し然るは漢人種の西北より來りて繁殖するに及び漸く南方に驅逐せられたるあり漢人種の既は苗人種を斥けて支那本部に勢力を占めたりしが夏殷を経て周に至り初めて蒙古人種との關係を生じたり故に其中世は獵狃と稱する種族を攘ひしとありしが春秋の際に至りてはまた蒙古人種の支那本部に來りて雜居をかゝり侵略を試みたるとあり戰國の際に匈奴と稱する種族北邊に寇し漸く暴掠を逞くす秦の海内を一統するに及び萬里の長城を築きて其種族の侵寇を防ぎしが漢の初め

漢人種の全盛

各人種の争亂

漢人種の全盛

漢人種と各人種との關係

一 至りて復入寇す依て婚姻を結び玉帛を贈りて和をなせり然るも武帝の時一 至り漢人種の勢甚盛しして四境を開拓し蒙古人種を沙漠の外一 斥けたり後功を絶域一 立て名を竹帛一 垂れたる者多かりき然るに三國より西晋一 至り漢人種の衰亂一 乘り蒙古人種(匈奴)滿洲人種(鮮卑)西域人種(吐蕃)の如き一 支那内地一 侵入し攘奪争闘を事とし漢人種をして江南の地方一 國をなさしめたり南北朝一 至り北朝の多く滿洲人種を以て立ち南朝の漢人種を以て成りしが隋の海内を一統する一 及びて漢人種の勢また強く唐の太宗の時一 至りて一 土耳格人種(突厥)を破り西域の種族を服し扶餘人種を征し大に版圖を擴張し漢人種の聲威を絶域一 振へりされと盛者常一 盛ある者一 ありず唐の中世一 至りて蒙古人種一 天寶の亂をかゝ大に漢人種を困めたり且西藏人種(吐蕃)回回人種(回鹘)れ如きも亦屢來侵する一 至りて唐末一 至りて一 沙陀と稱する蒙古人種勢力を恣し一 五代一 至りて後唐の國を建て後晋後漢の如きも亦其人種より興れり且此の時より契

滿洲人種と各人種との關係

蒙古人種の全盛

滿洲人種の全盛

丹と稱する滿洲人種の侵寇あり宋の太祖の如き一 漢人種より起りて稍其勢力を復したれとまた唐の太宗の如き一 能はず其後西夏と稱する唐古特人種と契丹との漸く強く宋の毎年此の二國一 對して歳幣を贈り後女真と稱する滿洲人種起りて契丹を滅したれと宋も亦一旦其滅す所となれり爾後滿洲人種の勢頗盛なりしが成吉思汗蒙古人種より起りて亞細亞の大半を併呑し歐羅巴の東部を蹂躪し遂に唐古特人種を滅し滿洲人種を攻めたり爾後其子孫一 宋と約して女真(金)を滅したりしが忽また宋と隙を生じ世祖の時宋を滅して支那本部を併呑す是れ實に外國人種の支那を一統したる始めにして蒙古人種最盛の時なりとす然るに後百餘年一 して明の太祖漢人種より起り蒙古人種を斥けて國を立てたりしが其後世一 至り外國人種との關係常一 絶えず北方の蒙古人種の侵略を蒙り東南の日本入種の攻撃を受けて大に困難を極めたり今の清朝の滿洲人種より起りて遂に明を滅して漢人種を服従し又蒙古人種回回人種を征

漢人種の將

服し一大帝國を立て、今日に至り然るは中間漢人種との争あり
又西北よりハ魯國の蠶食を受け東南よりハ英佛の侵寇を蒙りしと
あり故に自今の支那境内の人種の競争は止らずまさは世界に於け
る各人種との競争をなすに至るべし是れ亦古今の世變を觀るべき
なり

人民の繁殖

苗人種と漢人種との衝突

三皇の傳説

五帝の名

第一篇 古代史(開闢より堯舜の治世)

第一章 開闢の傳説及び堯舜の治世

支那本部は人民の棲息したるは既に五千年前あり黄河と楊子江
との間の苗人種の占領し歸したりしが如し然るは漢人種の西北よ
り來りて黄河の沿岸に繁殖するに及び初めて兩人種の衝突を生じ
たりしが漢人種の智識體力の優れたるは次第に苗人種を驅逐し
て各地に蔓延するに至り

人民既に繁殖すれば固より首領たる者ありて統御をなさざる可か
らず是れ支那の開闢に三皇の名ある所以ありされど三皇の名は古
來一定の説なし或は天皇氏、地皇氏、人皇氏と稱し或は伏羲、神農、黃帝
と稱し、或は燧人、庖犧、神農と稱す且其何れの人種に屬するや明から
ず蓋開闢の事多くの傳説にして載籍の考ふべき者なけれはあり

三皇に次きて五帝の名あり黃帝、顓頊、帝嚳、帝堯、帝舜とす(或は堯帝を除
けたり)是より後の事跡に至りては稍考ふべき所あり且其人種は漢人

黃帝の事業

種一屬するを知るかり黃帝ハ姓を公孫名を軒轅と稱し神農氏の衰へたるを見て兵を起し神農氏を阪泉の野一破り又蚩尤といへる諸侯を涿鹿(直隸省宣化府保安州府)一擒し遂一地を略して東ハ海一抵り西ハ空峒(甘肅省蘭州府)一至り南ハ楊子江一抵り北ハ釜山(直隸省宣化府保安州府)一至りて海内を統一し涿鹿一都せりと云ふ黃帝崩して後ハ顓頊(黃帝の孫)帝嚳(黃帝の曾孫)相つきて立ち顓頊ハ帝丘(直隸省大名府開州)一都し帝嚳ハ亳(河南省亳縣)一都す後帝嚳崩して其子放勳立つ是を帝堯と云ふ帝堯ハ虞舜を田野の中より擧げて相となし遂一其位を禪れり是を帝舜と云ふ帝舜ハ蒲坂(山西省平陽府解州府)一都したり堯舜の時一ハ屢苗人種を征討驅逐して全く太平の基を開き政治文物の觀るべき者ある一至れり

政府の世

政府一ハ司空(水土を掌る) 司徒(教を掌る) 秩宗(禮を掌る) 士(刑を掌る) 共工(百工を掌る) 納言(命を掌る) 后稷(百穀を掌る) 虞(山澤を掌る) 典樂(音樂を掌る) 等の諸官ありて各事を分掌し禹契伯夷皋陶垂龍奔益夔の諸子皆其官一あり地方一ハ黃帝以來の

諸侯の世

洪水の世

諸侯各地一存在したりしが四岳十二牧の制を設け天子ハ五歲毎一巡狩して諸侯を方岳の下に會し制度律令を頒ち諸侯ハ一歲毎一朝覲して貢賦を修めたり又刑罰一ハ墨劓剕宮大辟の五刑あり五刑を宥めて流放一處するを流刑となし別一贖刑鞭刑扑刑等を設けたりかく政府の組織整ひ諸侯の制度備はり刑罰の法則定まりしを見れば當時社會の既一進歩せるを知るべきなり

禹の治水及び攝政

されど堯の時一起れる大洪水一ハ大一困難を極めたるか如し初め堯ハ一命して洪水を治めしめし久して功を見ず依て舜が位を攝する時一方り鯀の子禹を擧げて其任一當らしむ禹四載(禹の治水)一乘りて海内を巡り能く治平の功を奏したりしかハ舜其功を嘉みし諸政を總理せしめたり後舜崩して禹遂一其禪を受けたり是れを夏の始祖となす時我が紀元前大約千五百餘年一あり

禹の即位及び政治

第二章 夏殷の興亡(大約紀元前千五百餘年一四百六十二年一に至る)
禹ハ姓を姒名を文命と稱し都を安邑(山西省解州府)一定めて國を夏と稱す禹

后羿寒泥の亂

既₁洪水を治めて艱苦を嘗めたりしかの奢侈を去り儉素を主とし
 宮室を卑くし飲食を非くし人民休養を勉めたり禹崩して其子啓立
 つ曾て堯舜の位を其臣に禪りしが茲₁至りてまた其子に傳へたり
 帝啓崩して子太康立つ太康盤遊を好み洛水の表に畋して久しく反
 らざりしかの有窮の後羿之を河に拒き其弟仲康を立て、諸政を專
 るす後仲康崩して子相立ち都を商邱(河南開封府)に移したりしが羿遂
 る自立して帝位に上りり既₁して其嬖臣寒泥また羿を追ひて自立
 し帝相を弑す帝相の后の有仍國君の女なり時₁姪身なりしかの竊
 る有仍(山東曹州府)に走りて少康を生む少康長して舊臣靡と共に寒泥
 を滅し遂₁禹の舊蹟に復せり蓋帝相の位を失ひしより此₁至るま
 て四十餘年なりと云ふ少康の子王杼の時₁至り三壽の國(山東曹州府)を
 征し夏の勢稍盛なりしが後十一傳して帝履癸₁至り履癸貪虐₁
 して勇力あり世號して桀と云ふ有施氏の女末喜を寵し宮室を作り
 園池を營み日夜酒色に耽りしかの人民大に怨望して背く者ある₁

少康の中興

桀の暴虐

成湯の興

夏の滅亡

殷の五帝五帝

至り
 時₁諸侯₁成湯と云ふ者あり姓を子名を天乙と云ふ伊尹を用ひて
 相とあし大に仁政を施して民心を收め遂₁兵を起して葛を攻め昆
 吾を滅し凡十一征して殆全國の諸侯を服し夏₁入りて其兵を破り
 桀を南巢(河南南陽府)に放ち遂₁帝位に即きて亳(河南亳縣)に都し國を商
 と號す夏凡十七世四百餘年₁して亡ひぬ
 成湯の後凡五たび興りて五たび衰へたり湯の孫太甲暴戾₁して祖
 父の遺法に違ひて伊尹依て三年の間太甲を桐宮に置く太甲よく其
 過を悔いたりしかの伊尹また奉して亳に復す是より太甲徳を修め
 政を勉めしかは諸侯悉歸し百姓安寧かりき(一)太甲より四傳して雍
 巳の時₁至り紀綱漸く紊れて諸侯また至らず(二)其弟太戊の立つ₁
 及び伊陟巫咸臣扈等の諸賢を用ひて相とあす海内太平₁して諸侯
 また來り從へり(三)更₁三傳して河亶甲の時₁至りてまた衰へたり
 しが(四)祖乙の位₁即きて巫賢を相とあす₁及び紀綱また振へり(五)

夏殷の興亡

七

討の盛

殷の盛

後陽甲の時、至り諸子相争ひて海内大に亂れ諸侯至らざる者ありしが、(三)其弟盤庚都を殷(河南衛河間)遷し國號を殷と改め先王の政を修めたりしか、諸侯また來朝せり、(四)盤庚崩して其弟小辛立ちしが殷室また振(五)す、小辛より再傳して武丁に至り甘盤傳説の諸賢を用ひて政を治めしか、殷室また興れり、(五)又五傳して武乙に至り都を朝歌(河南衛河間)遷し淫佚し耽りしか、殷室また衰へて竟に振ふ能はず、(五)陵遲して帝辛の時、至れり帝辛名を受と稱し猛勇にして智辨あり世號して紂と云ふ有蘇氏の女妲己を寵し賦税を重くと刑辟を酷し庭池園臺を作りて長夜の飲をなす庶兄微子大臣箕子比干(五)を諫むれど聽かず遂に比干を殺し箕子を囚ふ時、周の武王の勢甚盛しして諸侯を率ゐて來り征す紂依て武王と牧野(河南衛河間)の戦ひて敗績し遂に寶玉を抱きて自ら焚死したり殷凡二十八世六百餘年として亡ひぬ

夏の初より殷の終に至るまで殆千餘年を経たりと雖も事跡の記す

夏殷の盛

べき者甚少なし蓋職籍の備らざるを以てなりされと其間に社會の進歩發達したるは疑ふ可からず封建の制ハ夏殷共古に因り爵(五)等(五)を設けたり職官ハ夏に三公九卿二十七大夫八十一元士の諸官あり殷に二相六太(太宰太史太卜太祝)五官(司徒司空司馬司士)六府(甸甸甸甸甸甸)六工(甸甸甸甸甸甸)の諸官ありさと稱す田制ハ夏の時、田五十畝を一人に授け貢法と稱して十分の一の税を取り殷の時、井田の制より田を九區に分ち一區七十畝として中を公田となし外を私田とせし八家各私田を受けて共に公田を耕し其收穫を税となす是を助法と云ふかく法度頗整へたりと雖も夏殷の國風は忠と質とを尙ひたるにより文學の如きは發達の跡少なし然るに周に至りては大に文を尙ひたるが故に獨法度の整備せるのみならず文學の如きも亦大に觀るべき者あり

第三章 周室の盛衰(紀元前四百六十二年より紀元前四百四十年に至る)

第一節 周室の起原及び武王周公の政治

周の始祖の姓を姫名を奔と稱し帝堯の時一后稷の官となり部

周の始祖の姓を姫名を奔と稱し帝堯の時一后稷の官となり部(陝西)封せられしが後不窋と云ふ者戎狄の間一走れり不窋の後太王(即古公亶)一遷り初めて國を周と號し王業の基を開きたりと相傳ふ太王三

子あり長を太伯といひ次を虞仲といひ季を季歷と云ふ太伯虞仲共

一荆蠻一入りて還らざりしか一季歷遂一太王の後を承けたり季歷死して子昌立つ是を文王と云ふ文王殷紂の世一際仁政を施して諸侯人民を懷け散宜生太公望大顛閎夭等の諸賢を用ひて犬戎を征し蜜須(甘肅平涼)を伐ち崇(陝西郿)を破り都を豐(上)一定めたりかく其

勢盛なりしも敢て殷を伐たざりき文王薨して子發立つ是を武王と

云ふ時一殷紂の暴虐益甚く天下の人心盡く離れたりしか一武王西方の諸侯を率ゐて東征し紂を破りて殷を滅し遂一海内を一統す時一我が紀元前四百六十二年なり(即西紀元前)抑周の殷一勝らたる一徒一武王の英武一して紂の昏虐一因れるの

武王既一殷を滅し召公奭一命して箕子の囚を釋き畢公高一命して

武王既一殷を滅し召公奭一命して箕子の囚を釋き畢公高一命して百姓の罪を宥し財貨を散し粟米を發し務めて人心を安撫し遂一兵を罷めて豐一歸り(後都す)古聖王の子孫を各地一封し又諸功臣を封し太公望を齊(山東青州)周公旦を魯(山東魯州)召公奭を燕(遼東)一畢公高を畢(陝西西華)一叔鮮を管(河南管州)一叔度を蔡(河南新蔡)一封したり且紂の子武庚を殷一封して殷民の心を和け管叔蔡叔をして

監察をなさしめたり然る一武王在位纒一二年一して崩し(在位の年)

監察をなさしめたり然る一武王在位纒一二年一して崩し(在位の年)子成王誦位一即きしが年尙幼なりしか一周公の叔父の

周室の起原及び武王周の政治

周公の攝政

管叔の反亂

周公の制度
制定

親を以て輔相とあり諸政を攝行せり
 凡位高く地迫れる者ハ常ニ他人の猜忌を免かれずされハ周公の地
 位ハ遂ニ一大禍亂の基となれりその管叔蔡叔が周公ハ成王ニ不利
 なる計を抱くと稱シ武庚を奉じて兵を擧げたるニあり周公依て自
 ら東征シ三年ニして禍亂を平け武庚を誅シ管叔を殺シ蔡叔を放ち
 て師を班したりされと周公ハ猶殷の後を絶たず村の庶兄なる微子
 啓の尙存せるを以て之を宋ニ封シぬ蓋殷民の叛服常なきを以て其
 心を和けむとするニあり又周の都ハ西方ニ偏シ天下を治むるニ便
 ならざるを以て洛邑河南開封ニ營みて東都となシ東西兩京を建て、海
 内を制せり是より周公ハ大ニ制度禮樂を明シ召公と共に心を同
 くして成王を助け遂ニ天下太平の基を開きたり今左ニ其制度禮樂
 の一斑を記す亦周初の規模を見るニ足るべし

第二節 周初の制度禮樂

周初の制度禮樂ハ夏殷ニ折衷したる者ありと雖も亦周公の創意ニ

職官

封建

出でたる者なきニあらざ職官の組織ハ天地春夏秋冬の六官ニ分ち
 天官ハ冢宰を長となシ天下の行政を總べ内外の出納と官中の事務
 とを掌り地官ハ大司徒を長となシ地方の行政教育及び農商の事務
 を掌り春官ハ太宗伯を長となシ祭祀及び朝聘會同の禮式を掌り夏
 官ハ大司馬を長となシ兵馬出征及び輿地境域の事を掌り秋官ハ大
 司寇を長となシ刑法禁令及び外國交際の記事を掌り冬官ハ大司空を
 長となシ土木工作の事を掌り又六官の外ニ三公太師太保太宰三孤少師少保少宰
 の官あれと行政の事務ハ關せる所なし

封建の制ハ爵を分ちて公侯伯子男の五等となシ土を分ちて百里公
 七十里侯五十里伯の三等となしたり（公は土を百里に分ち侯は七十里を分ち伯は五十里を分ち子男は各百里を分ちたる如く周官に）
 武王の時より周公の政を攝するニ至り大ニ諸侯を封じたりしも多
 く其同姓なりしハ王室の藩屏となさむが爲めなり殊ニ其配置の如
 きハ頗注意の至れるを見るべし韓河南鄭河南畢河南ハ西方ニありて西都を守
 り雍陝西毛陝西單陝西原陝西虞陝西虢陝西の諸國ハ黄河を挾みて東都を圍み魯山東鄭河南曹山東滕山東を東面

の扞蔽とし燕晋邢霍を北方の守禦とあり蔡息隋唐を南面の屏障となし西面の周の本國あるを以て別は防禦の諸侯を置かざりき當時諸侯の數の詳からずと雖も舊來の諸侯と周に至りて新に封したる諸侯を併せて三百に由てざるべし(或は八百國と稱し或は千八百國と稱する者固えたる諸侯の數百六十餘に過ぎざれば周初より併吞ありし者を見ず其當に過ぎざるべし是れ三百に由てざるべしと云ふ所以なり)

| | |
|---|---|
| 八 | 家 |
| 一 | 井 |
| 九 | 百 |
| 一 | 畝 |

田制の殷の制よりて九百畝を一井となし(中百畝を公田となし外)八家よりて一井の田を受け一家よりて一百畝を受くるなり受授の期は年二十よりて受け六十よりて還す次子の餘夫と稱して二十五畝の田を受くるなり(田百畝を受く)是れ人民をして貧富の懸隔なく各其堵に安せしむるより最適したる法なるべし税法の田地より公田の收穫を税となす是れを粟米の征と云ふ又人民を夫役に使ふてあり是れを力役の征と云ふ又絹布を年貢に取るてあり是れを布縷の征と云ふ其他山澤の征漆林の征等あれと煩碎過重の弊なかりしが如し兵制の田制に基ける者よりて方里を井(一)とあり四井を邑(三)とな

し四邑を丘(五)とあり四丘を甸(三)とあり甸より戎馬四匹兵車一乘牛十二頭甲士三人歩卒七十二人と輜重を運する者二十五人を出す而して五人を伍となし伍五を兩(三)とあり兩四を卒(五)となし卒五を旅(五)とあり旅五を師(五)となし師五を軍(五)となし軍將の命卿を用ひ師帥の中大夫を用ひ旅帥の下大夫を用ひ卒長と上士を用ひ兩司馬の中士を用ひ伍長の蓋下士以下を用ひたるなるべし

禮

刑法の太古の如く五刑の名あり又刑髡辜肆等の刑あれど幼弱の者老耄の者の設命罪を犯すも其罪を罪せず又讞らすして罪を犯し、者過失よりて罪を犯し者及び遺忘して罪を犯し、者皆宥恕減刑の例よりり凡刑を施行するより市に於てすと雖も王族及び有爵者の市に於てせず又婦人も朝市に於て刑を施さず其他士大夫と老弱とは徒刑に服するてあからしめしが如きは皆其寛厚の意を見るべきなり

學制

學制ハ大學を辟雍或ハ成均と稱シ王の世子群后の世子卿大夫元士の適子及ハ國內俊選の士の學ぶ所とカシ小學ハ州(五百)一序あり黨(五百)一庠あり普通人民の學ぶ所とカセリ諸侯の國ハ大學小學を設け大學を泮宮と稱す禮樂射御書數ハ當時の教科なりシも就中禮樂ハ最心を用ひたるが如シ

禮法

婚禮ハ納采問名納吉納徵請期親迎の六禮あり冠禮ハ一日をトシ冠を加ふる儀あり鄉飲酒禮ハ三年毎一郷の人を集めて酒宴を開キ長幼の序を明シ祭祀の禮ハ宗廟社稷ハ對して敬を盡シ喪葬の禮ハ貴賤親疏ハりて葬月の別あり喪期の異あり極めて精密なる者とス音樂ハ大夏大獲雲門咸池大韶大武等の目あり樂器ハ金石絲竹匏土革木の八音に分チ大司樂小司樂等の官ありて舞樂の事を掌れりかく禮樂よく備り法度よく整へるに至りてハ人心を制シ天下を治むるハ於て効力あかるべからざるあり

第三節 成康以後の治世及び周室の東遷

成康の亂

周公の制度禮樂は周初一ありてハ大一効力ありとすされハ武庚管蔡の亂ありシ後淮夷徐戎の叛ありシも幾もなくして平定シ海内安寧なり成王崩して子康王立つ成康之際四十餘年刑を用ひさりさと云ふ亦其太平無事の狀を知るハ足れり是れ皆周公の制度禮樂を設けたる結果なりと謂ふべしされト是より後は周室も亦稍衰へ康王の子昭王位を嗣くハ及び諸侯漸く恣なり王遂ハ南巡して弒せられたり昭王の子穆王の立つハ及び初めハ頗政治ハ勉めしが晩年ハ至り大ハ驕恣の念を生ト八駿ハ乗りて海内を周遊シ且祭公謀父の諫を聽かずして大戎を征せしより大ハ諸侯の心を失へり穆王より五傳して厲王の時ハ至り暴政を行ひしかハ國人相共ハ背きて王を彘山西晉州ハ逐ふ是ハ於て宰相相共ハ政治を行ふト十四年ハ亘れり是を共和と云ふ厲王遂ハ彘ハて崩せしかハ其太子靜を迎立す是を宣王と云ふ宣王仲山甫尹吉甫方叔召虎の徒を用ひ北獫狁を伐チ南荆蠻淮夷徐戎を征シ大ハ王業を回復せり故ハ後世稱して中興の主と

厲王の亂

宣王の中興

宣王の中興

幽王の亂

周室の衰微

かを然るゝ晩年、及ひ亦漸く政事、怠り姜戎と戦ひて大に破られたり。宣王の子幽王の立つゝ及ひ褒姒を寵して子伯服を生み、姜后と太子宜臼とを廢し、褒姒を皇后となし、伯服を太子となし、姜后の父申侯大に怒り、西夷犬戎を誘ひて幽王を弑し、更に舊太子宜臼を立つ。是を平王と云ふ。平王の時に至り、王室益弱く、戎狄益強きを以て、西都に居る能はず、遂に久く住み馴れし都を去りて、東都に遷れり。是を周室の東遷と云ふ。蓋武王即位より、此に至るまで三百五十二年にして、我紀元前百十年あり。(紀元前七七〇年)

是の時に方りては周公の建てたる職官の名は依然として存じられ、と實際に其職を行ふ能はざる者あり、其他の諸制度の如きも亦多くは行はれず、彼の同姓を封じて王室の藩屏となしたるゝ親姻の絶えざる間、効力ありしも年を経るゝ久しきゝ至りては同姓も他姓と同く絶えて、藩屏の効なきのみならず、或は弓を王室に引く者さへあり、異姓の諸侯も亦王室の衰へしに乘り漸く同姓の諸侯と共に併呑攘

制度の敗壞

禮樂の衰微

王室の亂

奪をあすゝ至り三等の制、茲に破れて遂に尾大不振の勢をさせり。田制の如きも封建の變遷と經濟の情況とによりて自然に敗壞し、(田制の時は待たず)隨ひて税法も亦整はず。國によりて各其輕重を異し、軍制の如きは田制を破り、戦争を事とし、諸侯の土地漸く大なるゝ至りては亦自然に改らざるを得ず。刑法の如き學制の如きも亦多少の變革あり、且禮樂も亦末節に陥り、擊脆曲拳のみを以て禮となし、歌舞音曲のみを以て樂とあし、上下の別を立て、心性の和を謀る所以に、至りては顧みる者少なかりき。是れ實に春秋の世を現出せる所以なり。春秋とは平王四十九年より、敬王三十九年、至る二百四十二年の間を云ふあり。(紀元前六六十二年より紀元前八十二年に至る)

第四節 春秋の形勢及び覇者の興起

制度禮樂の壞れたる結果は直ち春秋の世に顯はれたり。彼の王室の狀を見るゝ桓王の時、は鄭の入寇あり、莊王の時、は周公黑肩の亂あり、惠王の時、は王子頹の亂あり、襄王の時、は王子帶の亂あり、

諸侯の臣

戎狄の内侵

覇者の興起

殆寧日あかりしが如し彼の諸侯の状を見るに君を弑し父を弑せる者は鄭、衛、晉、魯、宋、齊、楚の諸國に跡を絶たず(支那史第一節第二四章第一節)又彼の大は小を滅し強は弱を併すに方り多くの諸侯或は滅され或は削られ齊、楚、晉、秦、魯、衛、宋、燕、鄭、曹、陳、蔡の十二國のみ列國の交際をかゝり周公の藩屏として封じたる同姓の諸侯は多く其影あきま至れりかく國內の紛亂に乗じて戎狄は内地に侵入し白狄、赤狄は西北地方に割據し山戎諸種は東北地方に雜居し河南の地方にも戎狄の住せる者ありさかる、時に當りて自然の大勢に任せたらむには實に窮極する所を知らざるべし故に其大勢を防ぎて濟民の業をなさむとする者出づ是を覇者と云ふ覇者は齊の桓公に始まり管仲の經營に成れり管仲は周公の次くべき經綸家なり故に其事業頗觀るべき者多し其桓公を扶けて覇業をなさむとするに方り先づ國內を治えて富強を謀れ齊は海岸の國なるを以て魚鹽の税をとり又鐵の税をとりて其國帑を富まし周公の意に則りて兵制を更革し兵を農に寓する組

存國の諸侯管仲の経略

織をなして其兵を強くし遂に諸侯を匡さむとし北杏(山東省濰州府)の會をなして宋の亂を平け柯(山東省濮州府)の會をなして魯の侵地を返す是より諸侯漸く齊を信せり後單伯と共に宋公、衛侯、鄭伯を鄆(山東省濮州府)に會して始めて覇とされり時に山戎は燕を困め狄は衛を滅ぶ邢を破りしは管仲桓公を扶けて山戎を驅逐し燕伯に命じて貢を周に納れしは又狄を追ひて邢を威儀(直隸省順德府)に遷し衛を楚丘(河南省滑縣)に復せり又諸侯を率ゐて楚を伐ち其貢を周に納れざるを責め遂に楚と召陵(河南省許州府)にて盟をなせりかく管仲の周室に眷々たるは當時王室は衰へたりと雖も其名は猶天下の人心を收め諸侯を服するに足れはなり其葵丘(河南省歸德府)の會の如きは最盛大を極め諸侯と共に五條の約をなせり(初命に曰く誅不孝無弑子無以妾爲妻再命に曰く尊賢勿貶士必得無殺大夫五命に曰く無曲防無過稱無有封而不賞)孔子曰く管仲桓公を扶け諸侯を九合し天下を一匡す其仁に如かむや其仁に如らむやと又曰く管仲なかりせば我れ其れ髪を被り衽を左にせむと嗚呼管仲も亦人傑と謂ふべし然るに後幾

管仲及び齊桓の死

もかくして管仲死し桓公また心を國事に用ゐず小人を任じ淫樂を
事としけれを齊の霸業漸く衰へ桓公死して後五公子の亂あり遂に
覇者の遺業を舉げて晋の文公に譲るに至れり

晋文の覇業

晋の文公は獻公の子なり驪姫の亂によりて出亡し諸國に流落せる
と十九年にしてまた國に入りて君となれり文公桓公につきて覇業
を成さむと欲し狐偃趙衰の諸賢を用て國政を修め周の王子帶の亂
を平けて襄王を王宮に復しまた宋の楚に圍まれたるを救ひて楚を
城濮(山東省濮州)に破り諸侯を率ゐて襄王に踐土(河南省開封府開封縣)に朝し相共に
盟ひて曰く皆王室を獎けて相害するをなからむと是に於て遂に其
志を成したりき

覇者の効果

覇者は古より齊桓晋文を以て稱首となす蓋其心術は姑く置き周公
の制度敗頽の後より出て王室をかりて諸侯を従へ併呑攘奪の禍を防
ぎ人民をして幾何くか安堵するを得せしめしは稱せざるべからず
然れど覇者の業は名譽の地とあり英傑の名心を動かさし其私欲を充

秦穆の覇業

すよ過ぎざるに至れり

文公の時に西戎に覇たりし者を秦の穆公となす秦は嬴姓にして其
先襄公周の平王の難を救ひしを以て諸侯となれり其後秦の勢は漸
く強く穆公に至りて百里奚蹇叔を用ひて國政を修め晋を破りて河
西の地を得由余の謀を用ひて戎を伐ち地を開くと千里遂に西戎に
覇たり他日秦の天下を一統する基は既に茲に兆せりと云ふべし又
桓公の死後に方り宋の襄公は中國に覇たらむと欲して遂けざりき

第五節 晋楚の争衡

楚の興起

晋は文公の死後猶覇業の緒を承け永く北方盟主たり此の時南方の
盟主となりて晋と衡を中原に争ひたる者を楚となす楚は芋姓にし
て其先熊通と云ふ者周の夷王の時に僭して王と稱す是を武王と云
ふ其後文王成王穆王相つきて立ち近傍の諸侯を併せ國勢漸く強く
莊王に至りて始めて覇となれり
莊王父祖の業をつぎ庸を滅し宋を伐ち陸渾の戎を討ち遂に洛水の

楚莊の覇業

上に至り兵を周の境上に觀す蓋周室を蔑視したるなり又衆舒を平
 け吳越と盟をなし陳の亂を討して其國を縣にし(後また楚)又鄭を圍み
 たり時に晋の景公位にあり鄭は其與國なるを以て荀林父を遣はし
 て之を救ふ莊王晋軍と鄭(河南開封府)に戦ひて其兵を破れり後また兵を
 出して宋を圍みしかは宋急を晋に告く晋宋を救ふ能はず宋遂に楚
 と成をなせり既にして莊王薨じ子の共王立つ晋の景公卻克を遣は
 し魯衛曹の諸國の兵と共に齊を伐つ共王は嬰齊を遣はし蔡許の兵
 を卒るて魯を伐ちて齊を救ふ魯遂に成を請ひしが晋を畏れて竊に
 盟をなせり楚又鄭を伐ちしに晋兵を出して之を救ふかく晋楚與國
 を率るて衡を争ふと止まさりしが景公薨じて厲公の立つに及び宋
 の華元晋楚の大夫に善きを以て兩國の調和を謀り宋に於て兩國を
 會し盟をなせり(且辭に曰く凡晉楚無用加兵好惡同之同地而無敵故凶患若有害楚則晉伐之在晋亦
 如之矣實往來道路無難其不協而對不庭有如此盟則神靈之佑其帥無克詐也)
 既にして晋の秦を伐ちて其兵を麻隊に破りしが楚もまた盟を破り
 て晋の與國鄭衛を侵す鄭遂に楚に従ふ晋依て鄭を伐ち楚の援兵と

晋楚の争

晋楚調和の會

晋楚の争は在

鄆陵(河南開封府)に戦ひて大に其軍を破れり幾何もなくして晋の厲公
 弑せられて悼公立つ悼公聰明にして國政を修め韓厥を遣はし諸侯
 の師を率るて鄭を伐ち遂に虎牢に城く是より後晋楚共に其與國の
 叛服によりて屢鋒を交へたり悼公薨じて平公立ち楚も亦共王薨じ
 て康王位にあり時に諸侯弭兵の會を宋に開くに至れり
 初め宋の向戌晋の趙武と楚の屈建とに善きを以て諸侯の兵を弭め
 ひと欲し晋楚に往きて其許諾を受け又齊秦に告げしに二國も亦賛
 成の意を表したりかく四大國の承諾を得たりしかは小國に告げて
 會を宋に開くるとかれり期に至れば趙武屈建を始めとし魯の叔孫
 豹齊の慶封鄭の良霄邾滕の君陳衛蔡曹許の大夫皆來り會し共に血
 をすゝりて誓をなせり然れと弭兵の効なかりき既にして楚の康王
 薨じ邾敖位に即きしが王子圍之を弑して自立す是を靈王と云ふ靈
 王諸侯を申に會し遂に吳を伐ち賴を滅し鄭を取り弟棄疾を遣はし
 て陳蔡を滅し又徐を圍みしが棄疾王に叛きて自立す是を平王と云

諸侯弭兵の會

晉楚の國號

齊楚晉秦の國號をなしたる原因

ふ平王の子昭王に至り楚と吳の閭閻に蹂躪せられたり晉ハ他國の侵害を受けさりしも臣下の權を專にする者あるに至れり春秋の際晉楚齊秦の霸業をかち勢力を得たるも亦地形の便によらざるはあらず晉ハ北にあり楚と南にあり齊は東にあり秦ハ西にあり皆一方に向ひて衡を中原に争ふを得たればなり宋の霸業をなし得ざるハ襄公の罪のみならず地形四戰の國なるを以てあり殊に晉楚の最も強大にして永く南北の盟主たりし所以のものは左に掲けたる兩國の滅したる國名を見は思半に過ぐる者あるべし

晉の滅したる國名

魏、耿、霍、魏、虞、肥、鼓、焦、楊、韓、赤狄、路氏、甲氏、留吁、鐸辰、偃陽、陸渾、

楚の滅したる國名

權申、鄧、息、莒、黃、夔、江、六、庸、蕭、賴、陳、蔡、唐、頓、胡、舒、蓼、舒庸、舒鳩、蠻氏、

第六節 吳越の交戰及び陪臣の專横

吳と周と同姓にして太伯の後と稱す壽夢の時に至りて國勢始めて

吳の興起

吳越の交戰

越吳を滅す

強く遂に上國に通せり壽夢死して王僚立ちしが閭閻之を弑して自立し楚の亡臣伍子胥を用ゐて楚を伐ち大に之を破り東征して痺廬に至り西伐して巴蜀に至り威上國の間に振ひたりしが遂に越王勾踐と戦ひて死しぬ當時吳と越と世讐にして勾踐の父允常は閭閻を破られたりしを以て勾踐遂に其辱を雪きたるなり閭閻の子夫差また父の仇を復せむと欲し薪に臥し膽を嘗むるも三年にして遂に越を破り勾踐を會稽に圍むしが其身を屈して成を請ふに及びて其請を許せり勾踐依て范蠡文種を用ひ國を富まし兵を練りて報復を計れり後夫差の勢日に盛にして上國と衡を争ひ黃池の會なし、かハ勾踐其虚に乗じて吳に入り夫差を破りて之を滅し遂に淮水を渡り諸侯を徐州に會し貢を周に致し淮上の地を楚に與へ吳の侵地を宋に歸し泗上の地を魯に與へ江淮の間に横行せしむ敢て止むる者なかりき然るに勾踐の後數世に至りて楚に破られたりかく諸侯の地を開き土を擴め一大邦國となるに及び其間に陪臣專

陪臣專橫の弊

陪臣專橫の原

齊の田氏

横のこゝと生じたるは實に春秋時代に於ける一の通弊なり願ふに當時の諸侯は既に久しく名爵を世襲し富貴に生長したりしかば自ら國政を聽くが如き固より難しまして邦國の廣大なるに及びては益容易からず是れ臣下に政を委せる所以なり臣下も亦世世政に任ざるに方りて其權力の盛に赴くは自然の勢なり故に秦楚の如き新國と滕薛の如き小國とは陪臣專橫の弊を見るを少くと雖も舊且大なる國に至りては然らざる彼の宋の公族魯の三桓齊の田氏晋の六卿の如きを見て知るべし宋に公族の亂ありと雖も幸にして國を滅すに至らず魯に三桓の横ありと雖も幸にして國を失ふに雖らず然れと齊と晋とは遂に陪臣の爲めに其國を奪はるゝに至れり

齊の田氏の先は陳より齊に來りし者なりしが景公の時田乞と云ふ者大夫となり小斗を以て賦税を收め大斗を以て米粟を施し大に民心を收めて其勢益強く景公の薨するに及びて其子を追ひ其大夫を殺し別に悼公を立て、政を專にせり後簡公の時田恒諸大夫及び公

晋の六卿

族を殺し又其君を弑し平公を立て、權を擅にす宣公の時田盤政を爲し兄弟宗人を以て齊邑の大夫となし晋の韓魏趙氏と使を通し共に主家を篡するを計れり

晋の六卿は范中行知趙魏韓の六氏なり晋は昭公の時に至り公室漸く衰へて六卿漸く強かりしが頃公の時に其勢益盛なり定公の時范吉射中行偃共に亂をなす方り荀躒韓不佞魏哆趙無恤と共に范中行の地を分つ定公大に怒り齊魯に告げて四氏を伐たむとす四氏依て公を齊に逐へり其後知瑤（知伯の孫にして）の勢最強く哀公を立て、其政を專にし地を韓魏の二氏より取り又趙氏に求めしが無恤應せざり知瑤依て韓魏の兵と共に趙を攻めしが趙無恤反て韓魏と通し共に知瑤の軍を破り之を滅して其地を分つ是より三氏の勢甚盛にして益晋室を蔑にせり

春秋の末に方りては諸侯の數益少くなりまた覇者の業を謀る者を見せ且王室は益衰へ陵遲して威烈王の時に至れり王の二十三年晋

晉齊の大夫を
諸侯とす

の大夫魏斯(晉の弟伯)趙籍(魯の弟伯)韓虔(不孫の)を封じて諸侯となす時に
我が紀元二百五十八年にして(四〇三年前)是より後を戦國の世とな
す安王の時又齊の大夫田和(田の孫)を封じて諸侯となす後韓魏趙の三
氏は晉を滅し田氏は齊を併せたりき

第七節 戦國の形勢

戦國に至りては王室の勢益衰へて振はき諸侯の力は益大にして各
獨立國の觀あり秦楚齊燕韓魏趙を七雄國と稱し宋魯衛鄭は纔に其
間に介立し滕薛曹杞の如きは有れども無きが如し蓋戦國に於て勢
力を得たる諸侯は多く新國なり彼の新に封せられたる齊韓魏趙は
論なし秦楚の如きも周初封建の諸侯にあらき唯燕ハ舊國なれと春
秋の際には上國と關係少なりさかく新國の勢を得て宋魯衛鄭の
如き舊國の力を失ひしハ亦時勢の變なりとす
さて楚ハ曾て吳に破られしハ亦再國勢を回復し宣王の時に至りて
ハ南方一帶の地に據り廣大の土を有し衆多の民を擁し隱然勢力を

戰國の七雄

諸侯の形勢

諸侯の上に有せり燕も亦東北二帯の地に據り南面して諸侯と相争
へり齊は東方の地に據り山海の利を有す威王能く國內を治め宣王
魏を馬陵に破りて其勢益盛なり趙韓魏は晉の舊地に據りしかは世
に三晉と稱す地勢天下の中を占めて土地開け人民衆かりしかは邦
域の小なるに比すれを大に勢力を有せり此の諸國の外に在りて最
大勢力を有すに至りたる者を秦となす蓋秦の勢力を有するに至り
たるは地形の便によれりと雖も亦孝公の賢と商鞅の力とに因らす
むはあらき

秦の孝公立つ

初め秦は穆公の時に西戎に覇たりしと雖も其西方に僻在し風俗習
慣自ら中原諸侯と異なりしかは諸侯ハ目するに夷狄を以てし頗輕
侮の待遇をあたしたり故に孝公の立つに及びて大に發憤し富國強兵
の計をなさむとし天下の士を招く時に衛に商鞅と云ふ者あり其招
きに應じて秦に入り孝公に仕へて富強の計をなせり鞅の政策は管
仲と大に其趣を異にす是れ亦時勢の變已むを得ざる者あるなり鞅

商鞅の政治

は農を以て國を富ますの本となし耕織を業とし多く粟帛を致すものは其役を免す然れと工商を事とし或は怠りて貧なる者の收斂となす井田の阡陌を破りて地力を盡す計をなし人民の力に任せて耕作せしめ敢て制限を設けず又戸數を増す計をなし人民二男以上ありて分家せざる者は其賦を倍課し且秦の地は廣くして人少なく晋の地は狭くして人多きを以て三晋の民の移住開墾を必ず計れり鞅は又法を以て國を治むるの要となし人民の什伍を設け姦を告ぐる者は敵を斬りし者と賞を同くし姦を匿す者の敵に降りし者と罰を同くし軍功ある者の爵を授け私闘をなす者は刑を加ふ宗室も軍功なき時は宗屬の籍に入るを得ず功ある者は田宅臣妾の顯榮を享くと雖も功なきものも芬華なるを得ずかくて十年を経て國富み民強く國內善く治まれり孝公薨して惠文王立ち商鞅は殺されたりと雖も秦の富強は實に其力によれり以上の諸國の互に攻争を事とし攘奪を業とし海内殆寧日なし稱して戰國と云ふも故なきよあらず

其結果

學術の興起

然れどかく政治社會のみ戰國の状況ありしにあらず學術社會も亦戰國の状況ありしあり
 周初に在りて文を尙び學校を重したる効果は春秋の時代に至りて大に顯れ諸家の學術隆然として起れり且列國交際は人智發達の原素となりしを疑なし儒家は孔子の仁を説きしより多くの弟子の各地に散處して其説を擴めたり戰國の時に至りては孟子の如きもの出て、孔子を祖述し仁義を唱ふ然るに墨家は墨翟を祖とし兼愛の説を主張し楊家は楊朱を祖とし爲我の説を唱道し道家は老子を宗とし無爲自然を闡揚し法家は申不害等の唱へたる所名家は公孫龍等の主とする所各其見る所を正とし其聞ける所を是とし互に辯難攻撃をなせり其他鄒衍鄒爽の陰陽說孫吳の兵法論鬼谷子の縱横學皆別に家をなす而して鬼谷子の門より蘇秦張儀の如き人物輩出して合從連衡の計をなせり

第八節 合從連衡

蘇秦合從策を
説く

蘇秦は洛陽の人なり曾て秦に赴きて惠文王(孝公)に天下を併する策を説きしに用ひられき窮困して家に歸り更に思を縦横の策に凝らし六國をして秦に當らしめむとの計を抱きたり依て先づ燕に赴きて文公に趙と從親をべき所以を説きて其賛けを得更に趙に赴きて肅侯に説きて曰く今諸侯の地は秦に五倍し諸侯の卒は秦に十倍せり之を合せて西に向はゞ秦強しと雖も之を破るゝ難からず今日の計は趙燕韓魏齊楚を一にして秦に當るに如かずと肅侯大に悦びて厚く蘇秦に資し韓魏齊楚に如きて之を説かしむ蘇秦韓に如き魏に如き齊楚に如きて六國合從して秦に當るべき所以を説きしに諸國皆其辭理に服して其説を容れたり是に於て六國の合從初めて成り蘇秦は從約の長となり六國の相印を帶ひて趙に歸報せり時に周の顯王三十六年にして我が紀元三百二十八年なり(即紀元前)抑蘇秦の六國合從の大策を成し得たる所以は實に當時の形勢に適したるを以てなり何とされば秦は孝公が商鞅を用ひて富強の策を

從約成る

從約の成りたる原因

畫してより常に東面して諸侯を併せむとの大望を抱きたるが如し而して當時諸侯各自の國力は固より秦に當るに足らず趙韓魏の如きは秦と境壤を接せしかば常に削奪の患を免かれず其他の諸侯も亦秦の強くして懼るべきを認めざるはあかりさかゝる時に際し巧妙の辯を以て合從の利を説く其説の行はれしは怪しむに足らざるなり然れとかく土地を異にし風習を殊にする六國が永く合從を遂げ得むとは甚難し且秦を六國合從の成りしを見て大に懼れ其約を破らむと勉めたりさて合從の成りし翌年に秦の策士公孫衍齊魏を欺きて趙を伐たしむ趙の肅侯よりて蘇秦を責めしに蘇秦曰く燕をして齊に報せしめむと遂に趙を去りて燕に往きしが合從の約は遂に全く破れたり後幾もかくして秦遂に張儀を以て相となせり張儀は魏人にして蘇秦と同門生なり蘇秦の合從をなせる時張儀を激して秦に入らしめたりしを遂に秦の客卿となり又其相とされり張儀魏を伐ち韓を破り秦の勢頗盛なりしかを楚趙魏韓燕の五國ま

從約破る

張儀秦の相となる

秦巴蜀を取

た合従して秦を伐ちたり然るに秦は其連合の兵を破り又大に韓を破りしかは秦の威は諸侯の間に振へり是より先きに張儀は出て、魏の相となりしが是に至りて魏王は説きて曰く今兄弟父母を同くするも尙錢財を争ひて相殺傷する事あり然るを反覆なる蘇秦の餘謀を待みて六國の從親を謀るは難し臣大王の爲めに計るに秦に事ふるに如かすと魏王其説を是とし張儀を遣はして成を秦に乞ふ秦また張儀を相となせり時に巴蜀相攻めて急を秦に告ぐ秦方に韓の寇あり張儀は先づ韓を伐たむとす然るに惠文王は司馬錯の説を用ひて巴蜀を取り是れ實に秦の府庫を取りしに同く國力益富強に赴きたり既にして齊を伐たむとしたりしが齊と楚との從親を憂ふ張儀依て楚に使し懷王を欺きて齊と絶たせめたり懷王秦の約を行はざるに及びて欺かれたるを知り大に怒りて秦を伐ちしが反て漢中の地を失へり後秦武關（陝西商州）の外の地を以て楚の黔中の地（蜀の常道、涪州、永寧の諸郡）に易へむとを望みしに懷王曰く張儀を得は黔中

張儀連衡を説く

連衡成る

連衡破る

の地を獻せむと張儀依て自ら請ひて楚に赴き詭計を行ひて死を免かれ遂に懷王に説きて曰く合従をなす者は群羊を驅りて猛虎を攻むるに異ならず且秦の楚を攻めむ時には危難三月の内にあれと楚の諸侯の救を待つは半歳の外にあり然るに弱國の救を待みて強秦の禍を買ふは大王の爲に取らざる所なり大王宜く秦と約して兄弟の國とあるべしと懷王其説を容れたり張儀依て韓に往きて韓の秦に事へさる時の害を説き韓王をして秦に事へしめ遂に齊に往き趙燕に往き皆其秦に事へされは有害あるを説きしかは三國も亦皆其説に従へり是に於て六國秦に事ふることかれり是を連衡と云ふ時に周の赧王四年にして我が紀元三百五十年あり（即紀元前）然るに秦の惠文王薨して子の武王立ち張儀秦を去りしかは六國また秦に背き合従をおそに至れり

蘇秦張儀の合従連衡をなし、より公孫衍、蘇厲、周最、樓緩の徒出て、亦縱横の術を逞くせり諸侯も亦或は合従をなし或は連衡をな

し常に一定の國是なかりしも秦の着々として富強の術を講ト併呑の計をなしたりき

第九節 周室及び六國の滅亡

周室の分治

諸侯の權力の益強大あるに隨ひて王室は益微弱となり赧王に至りて東周西周各治を分ち愈其微弱を加へたり而して諸侯の間は互に交戦を事とし國力の疲弊を顧みず彼の強敵なる秦に對して連合の兵を向けざりしが如きは遺憾の至りなり

諸國相攻む

燕には王噲子之の亂ありて齊の湣王の蹂躪する所となり楚の屢秦を代ちて土地を失ひ趙には武靈王出て、稍土地を北方に拓きしが遂に其終を善くせき廉頗、藺相如の力よりて纔に其國を保つを得たり宋には康王あり滕を滅し齊楚魏の地をとりしが齊の湣王に滅されたり然るも齊も亦燕の樂毅を遣はして來侵するに及び湣王は楚將に弑せられ國土は燕兵に蹂躪されたりしが幾もかくして田單の力によりて回復するを得たりかく諸侯は互に交戦を事とし春秋

以來の諸侯は漸く跡を絶ち魯越は楚に滅され鄭は韓に滅され衛は猶存せしも勢力を有せず燕楚齊趙韓魏の六國は頗盛なりしも亦秦の勢には及はざりき

秦の勢力を強

秦は武王既に薨して昭襄王位にあり白起を用ひて將とあす起最將畧に富み屢韓魏を伐ちて其城を取り又兵を出して楚を伐ち郢（湖北會州府）を拔き夷陵（湖北宜昌）を燒きしかは楚の頃襄王都を陳（河南陳州府）に移すに至り後屢兵を率ゐて諸侯を困め最後に韓を攻め遂に趙を長平に破り趙軍四十萬人を坑す秦の威天下を震動せり韓趙地を割きて和を講す既にして又趙を伐つ時に趙に平原君あり魏に信陵君あり楚に春申君あり（魏の先王春申君あり）共に客を養ふと三千人、義俠を以て天下に聞ゆ秦の趙を伐つに及びて平原君救を楚に求む春申君依て兵を率ゐて赴き援け信陵君も亦來り會す遂に秦軍を邯鄲（直隸省邯鄲）の下に破れり時に范雎秦の相たりしが白起と善うらき起を讒して遂に死を賜へり秦はかく内名將を失ひ外諸侯も破られたりしも舊

秦周を滅す

來の國力は毫も衰へず又韓を伐ち趙を攻めたりしかは周の赧王大に恐れ諸侯に命じて秦を伐たしむ秦依て周に寇し盡く其地を取り遂に西周を滅せり後七年を経て東周の君諸侯と共に秦を伐たむを謀りしむを秦また兵を出して之を攻め遂に東周を滅せり蓋武王より三十八世八百七十四年にして亡びぬ時に我の紀元四百十二年なり(耶蘇紀元前二四九年)抑周室の衰弱を極めたるに關はらば彼の攘奪争鬪の中に立ちて猶能く八百餘年の命脈を保ち得たる所以のものは地狭く人少く其地を得るも利とならず反て天下の攻撃を受くるに過ぎざるに因れりと雖も亦其虚位の自ら諸侯と異なるが爲めなり蓋周公の禮制は既に破れたりと雖も猶其一線の力は周室を攘奪争鬪の間に保ちしなるべし

周室の存立したる原因

周室既に亡びたる後は全く七雄の競争して興廢を判つの期となり秦は昭襄王より兩傳して莊襄王に至り呂不韋を以て相となす莊

秦王政立つ

襄王卒して子政立ちしが年纔に十三なりしかば呂不韋尙政を執り毎年兵を出して諸侯の地を蠶食せりかく秦の勢は益懼るべきを以て楚趙魏韓衛の五國合從して秦を伐ち函谷關(河南省陝州縣)に至りしる皆秦の兵に破られたり是より秦の勢益強く内史勝韓を滅し王翦趙を滅し遂に燕と界を接するに至れり燕の太子丹荆軻を遣はして秦王を刺さむと謀りしが事成らず秦王依て大に怒りて燕を伐ちしかば燕遂に太子丹を斬りて秦に獻す既にして王賁魏を滅し王翦楚を滅し六國の中存せるのは秦一最遠き齊燕と趙の亡後に其族の立てたる代の國のみなり然るに王賁又兵を率ゐて燕を滅し代を滅し其勢に乗つて齊を滅したり是に於て秦王政初めて天下を一統し自ら始皇帝と稱す蓋東周の亡びしより此に至るまで二十九年にして我が紀元四百四十年なり(耶蘇紀元前二二一年)

秦六國を滅す

第貳篇

上世史

(秦の六國を一統せしむる時に至り)

第一章

秦漢三國の治亂

(紀元四百四十年に至り)

第一節

始皇の政治

秦の六國を併せたる原因

郡縣制度を立つ

秦の天下を併せたる所以は實に地形の便に因れりと雖も亦孝公以來の政策を變せずして富國強兵の術を講卜たるに因らずむはあらずさて其天下を併せし後は版圖俄に廣大となりしかは如何にして海内を統治すべきやは當路者の第一に講すべき所なり丞相王綰等は封建の制度によりて天下を治めむを乞へりされど李斯の議により遂に郡縣の制となり海内を分ちて三十餘郡となり郡毎に守尉監を置きたり是れ其制度のよく海内を制し得べしと信卜たればなり蓋郡縣の政治を行ひ得たる所以は偶然にあらず戰國の際諸侯の土地廣大なるに隨ひ其境内には自ら郡縣の制を建てたる者あり封建の風は漸く消耗に歸したりきされば始皇の天下を併せたるに及ひ郡縣の制をとりしは其國內に行はれし者を擴張したるに過ぎ

兵を鎮し富
を移す

匈奴を防ぎ南
越を略す

學者新政を論
す

す是れ其容易し施し得たる所以なり又始皇は民間の兵器を收めて
鐘鐻金人となし諸郡の富豪を咸陽(陝西省西安府咸陽縣)に移し屢海内を巡狩し
たるが如きは皆天下の亂を慮りてあるべしされど方士の説を信じ
て仙人を求めたるが如きは迷へるの甚しき者あり彼の臨洮より遼
東に至る間に萬里の長城を築きて匈奴を防ぎ又南越を略し五十萬
の民を發して五嶺を守らしめたるが如きは反て人民の怨を買へし
に過ぎず是より賦歛愈重く法令漸酷にして人民其堵み安せず皆亂
を思ふに至れり
初め戰國の時より學術甚盛にして儒墨名法の諸家輩出して辨難を
なしけるが儒家の説最よく行はれ自餘の各派亦共し存在す故し始
皇の時よは其學者の遺れる者少なりならず然るに其學者は始皇の新
政を見て悦はず各其學べる所を是を以て政府を非難する者多かり
しかは遂に始皇をして猛烈なる處置を爲さしむるに至れり當時李
斯の言に曰く今の諸生は古を學びて今を師とせず當世を誹議し人

書を焚く

儒を坑す

朝廷の尊嚴を
毀す

民を惑亂す苟も新令の下りし時は各其學によりて是非をなす故に
種樹醫藥卜筮の書を除くの外人民私有の書を焚かむと始皇の果斷
なる遂に其説を實行せりされど書を焚きしのみにては未だ全く誹
議の口を閉つるに足らず猶諸生の誹議を試むる者ありしかは始皇
は遂に咸陽ある諸生四百六十餘人を坑殺したり是れ亦人民の怨を
招くの基なりき
始皇既に天下を一統したる上は七國分立の時と異なれば極めて朝
廷の尊嚴を裝はむと欲し其方法を勉めたるが如しされは即位の始
めに皇帝と稱し自ら朕と稱し令を詔と稱したるか如き皆其術にあ
らざるのなれ彼の七十萬人を役して阿房宮を造り壯大宏麗を極め
たる所以のものも亦帝居の尊さを示さむが爲なるべしかく始皇は
勉めて七國分立の時と其趣きを異にせむを勉めたりと雖も其政
治の方針に至りては七國分立の時と同く慘酷にして毫も寛大ある
所なかりしは實に惜むべき所とす

始皇崩す

始皇晩年に少子胡亥丞相李斯宦官趙高等を随へて出遊し病に罹りて崩す趙高李斯と謀りて喪を秘し詐りて詔と稱し胡亥を立て、太子となし長子扶蘇と大將蒙恬とに死を賜ひ咸陽に還りて喪を發せり始皇帝と稱してより十二年にして崩し少子胡亥立つ是を二世皇帝と云ふ(紀元四)

第二節 群雄の蜂起及び秦室の滅亡

始皇の政治は實に天下の人心を失へり六國の遺民をして舊國を思ふの情を生せしめたり然れど猶蜂起する者なかりしは其六國を併せたる餘威の天下を壓するに足れはなり然るに始皇の長逝は實に秦室の威を減し禍亂の機を増すに至れりかゝる時に際しては設令聰明英毅の君と雖も猶治に難をまして二世の如き暗愚庸劣なる者に於てをや且趙高は二世の暗愚に乗じて權を專にし多く苛法を作りて皇族大臣を戮せしかは更に秦室孤立の勢を加へたり是の時に先づ難を創めたる者を陳勝吳廣となす二人は詐はりて公

始皇崩去の影

二世の暗愚

陳勝吳廣兵を起す

項梁劉邦兵を起す

群雄蜂起の原

子扶蘇楚將項燕と稱せしかは諸郡争ひて之に應ず勝自立して楚王となり吳廣及び武臣周市周文等を遣はして各地を徇へしむかくて武臣は趙の地に至りて趙王と稱し其將韓廣は燕の地を徇へて燕王と稱し齊の田儻田横は齊の地に據て齊王と稱し周市は魏の地に至り魏の公子咎を迎へて魏王と稱す既にして吳廣陳勝皆其下に殺され武臣も亦其下に殺されたりしらは其將張耳陳餘は趙歇を立て、趙王となす是より先き楚の項梁は其姪項籍と共に兵を吳中に起せり籍字を羽と稱し豪雄にして才器あり兵を起し、時年方に二十四なり沛人劉邦も亦兵を沛(江蘇沛縣)に起す邦字を季と稱す豁達にして大度あり蕭何曹參等と共に起りて諸侯に應せり嗚呼始皇の死してより未だ幾何からずして天下また四分五裂し再戰國の如き形勢を生じたり是れ其原因あかるべからず願ふに春秋以來支那の分裂せる久し始皇よく一統の業をなせりと雖も人心猶未だ一統せず加ふるに始皇の暴政と二世の暗愚とを以てし且郡縣の制度は群雄の

項籍の北上

蜂起に便利を與へたるが如し蓋始皇の政治は中央に權力を集めて地方の勢力を殺きたるを以て郡守縣令の如きは其力甚微弱なり故に群雄の蜂起するに方りて制禦するの力なき項籍の會稽の守を斬り劉邦の沛の令を殺したるが如きを見て知るべきなり
さて群雄の中にも項梁項籍の勢は最強く吳中の壯士八千人を率ゐて楊子江を渡りて北上す其勢草木も靡く許なり劉邦等皆其麾下に屬す時に居巢の人に范増と云ふものあり年七十なりしが常に好みて奇計を畫す往きて項梁に説きて曰く陳勝の事を創めて遂に破れたるは楚の後を立てずして自ら立ちたればあり足下能く楚の後を立て諸侯を指揮せば天下は定むるに足らずと項梁依て楚の懷王の孫心を立て、懷王と稱す蓋民心に従へるなり
秦室の諸侯蜂起して各地の騷擾頗甚しきを以て章邯を將となし大兵を將ゐて東征せしむ章邯遂に周文を破り進みて魏を伐ちしかは魏王救を齊楚に求む齊王田儋楚將と共に魏を救ひしが利あらず田

秦軍東征す

項籍軍を破

儋周市魏王咎皆敗死す依て田市齊王となり魏豹魏王となれり章邯また項梁を破殺し進みて趙王歇を鉅鹿(直隸鉅鹿縣)に圍み其勢甚盛なり楚の懷王宋義を上將とあし項籍を次將とあして趙を救はしめ又劉邦を遣はして秦を伐たしむ宋義途に止まりて進まざりしかは籍遂に義を斬りて其兵を領し進みて章邯と鉅鹿の下に戦ひ大に秦軍を破り章邯及び其二將を下し遂に上將軍とあれり是れ實に籍の威名を得る始めなりき

趙高二世を弑す

劉邦秦を降す

秦室にては趙高李斯と隙あり竊に斯を譖して其三族を夷け自ら丞相となりて政を専らにせ既にして秦軍の屢破らるゝを以て二世の怒らむを恐れて遂に之を弑し公子嬰を立て、帝となす嬰位に即きて趙高を族殺せりされと秦室の事また爲すべからず劉邦の軍は既に嶢關(陝西高陵縣)を破り遂に霸水の上に至りしかば嬰遂に出で降り秦始皇の帝と稱してより十五年にして亡ひぬ時に我が紀元四百五十五年なり(西紀元前)

第三節 漢楚の分争

項籍關中に入

劉邦既に秦王を降し還りて霸上に軍し兵を遣はして函谷關を守ら
しむ時に項籍既に秦軍を降し河北の地を定め諸侯の兵を率ゐて來
り關門の守あるを見て大に怒り之を攻め破り進みて鴻門(陝西省西平縣)
に陣す范增項籍に告げて曰く沛公山東に在りし時色を漁し財を貪
りしが今關中に入りては財物を取らず婦女を幸せず是れ其志小に
あらざるなり急に伐ちて失ふ勿れと且日を期して將に劉邦を伐た
むとを實に是れ一髮千鈞を引くの勢と云ふべし然るに翌日劉邦鴻
門に來りて關を守りしを謝し事纒に平くを得たり時に項籍の力
は劉邦を制するに足りしも咸陽を屠り宮殿を焚き子嬰を殺し始皇
の塚を發し遂に關中を去りて東に歸り他日其天下を失ふの期は
實に茲に兆せるあり

鴻門の會

項籍の東歸

項籍既に東に歸り陽に懷王を尊びて義帝となし自立して西楚の覇
王となり彭城(江蘇省徐州府銅山縣)に都を後遂に義帝を放弑し又其功將を封し

項籍將を封

劉邦關中を略

燕王韓廣を移して遼東王となし(郡名)齊王田市を移して膠東王(郡名)
となし臧荼を燕王に(郡名)田都を齊王に(郡名)司馬卬を殷王に(郡名)
張耳を常山王に(郡名)英布を九江王に(郡名)封し其他封したる者亦
多かり又秦の降將三人を關中に封し劉邦を漢中(陝西中府)に封し初め懷
王諸將と約して曰く先づ關中に入る者は其地に王とせむと然るに
項籍劉邦を關中に封せさりしかは邦怒りて籍を攻めむとしたりし
が蕭何の諫によりて漢中に至り何を丞相となし韓信を大將となし
張良を帷幕の臣となす是を漢の三傑と云ふ既にして劉邦韓信の策
を用ひ兵を出して關中の地を略し進みて項籍を攻めむとす時に齊
の田榮王に封せられざるを怒り齊王田都を擊破して齊王となれり
陳餘も亦王となるを得ざるを以て田榮と兵を併せて常山王張耳を
破り尋て趙王歇に立てられて代王となれりかく東北の地は騷亂起
りしかは項籍自ら兵を率ゐて東征し齊を破りて田榮を殺し尙其子
田廣及び田橫と齊の地に戦へり是の時劉邦は進みて魏王豹を下し

劉邦東征す

項籍劉邦を破す

漢軍北地を下す

殷王司馬卬を虜にし進みて洛陽に至り項籍の義帝を放弑したる罪を鳴る時に彭越魏の地を收めて漢に歸る劉邦遂に項籍の虚に乗じて彭城に入り置酒高會して備を設けず項籍劉邦が諸侯の兵五十萬を率ゐて來り伐つと聞き自ら精兵三萬を率ゐて齊より引き還り漢軍を睢水の上に伐ちて大に之を破れり諸侯依てまた漢に背きて楚と與り劉邦走りて滎陽(河南府滎陽縣)に至れば諸敗軍稍集り蕭何も亦關中の老弱を發して來り援けしかは漢軍また振ふを得たり既にして魏王豹漢に背きしかは劉邦韓信を遣はして北征せしむ韓信遂に魏を破りて豹を虜にし又張耳と共に趙を伐ちて大に其軍を破り陳餘を斬り趙王歇を擒しす信又辨士を遣はし燕王臧荼を説きて漢に從はしむ隨何も亦九江王英布を説きて漢に歸せしめたり是より漢の勢は益盛なりき時に項籍劉邦を滎陽に圍みしが反間を信じて范增の計を用ひき増遂に去りて死しぬ邦城を逃れ出て、成臯(河南府開封府)軍す項籍又成臯を取りしかは邦逃れて黄河を渡り韓信

漢楚の對峙

項籍の敗死

高祖長安に都す

郡縣封藩を並ひ行ふ

張耳の軍を奪領し耳をして趙を守り信をして齊を伐たしめまた成臯を取り項籍と廣武(河南府開封府)に相持す是の時より方りて韓信齊を破りて田廣を走らし進みて楚を伐たむとす且項籍は助少なく食ふ乏し是れ實に漢に敵し難きなり依て天下を二分せむを約し兵を罷めて歸らむとしたりしが劉邦其約に背きて追撃し項籍を垓下(安徽鳳陽府)に圍みしに籍圍を潰し烏江(安徽和县州府)の上に至り遂に自殺しぬ是に於て劉邦帝位に即く是を漢の高祖皇帝と云ふ(五九四年)

第四節 高祖の治世及び呂氏の專横

高祖既に項籍を平け洛陽に都したりしが更に長安(陝西西安府)に移れり蓋長安は關中の地にして地形天下に雄あるを以てなり高祖秦の孤立して亡びたるを以て頗心を周秦制度の折衷に注きたるが如しされば封建郡縣の制度を並ひ行ひ國王と郡守と各地に交錯せり其制によれば皇子の封せられたるものを諸侯王とあし異姓の封せられたる者を徹侯となす諸侯王の如きは其國に太傅あり丞相あり御史大

夫ありて大略漢の朝廷と異らず大なる者は七十餘城を有し小なる者も五十餘城を有したり然れど其初めに方りては異姓の王たるものも亦少なからず韓信は楚王となり彭越は梁王となり英布は淮南王となり其他異姓として王たる者猶兩三人あり是れ漢家創業の功臣なれば勢已むを得ざるなりされど高祖の忌み懼れたるは此の諸王に如くはなかるべし是れ實に功臣誅除の禍の起れる所以なり高祖即位の後幾もなくして韓信の反謀を告ぐる者ありしかば帝陳平の計を以て信を捕へて淮陰侯に降す信の其地位を失ひたるは其謀反の基となれり後代の相國陳稀の反して代王となり高祖の出征するに及び韓信内より事を舉げむとしたりしが呂后其謀を知り蕭何と謀り信を捕へて三族を夷す高祖陳稀を破りて歸りしにまた彭越の反を告ぐる者あり依て越を掩捕して庶人となし遂に其三族を夷せしかく韓信は死し彭越は殺さるゝに及び英布も亦禍の及はむことを懼れて兵を舉げたりしが高祖親征して之を平けたり其他の異

會臣の謀す

姓の諸王は漸く跡を絶ち餘は同姓の諸王となれり即ち高祖の兄劉喜は代にあり弟劉交は楚にあり従兄劉賈は荆にあり子劉肥は齊に劉長は淮南に劉如意は趙に劉建は燕に姪劉濞は吳にありかくて白馬を刑して盟ひて曰く劉氏はあらずして王たる者あれば天下共之を伐て是れ同姓を封建にいたる所以を知るべし高祖又叔孫通を用ひて禮儀を起し陸賈を用ひて詩書を説かしめたるか如きは前に前朝と異なる所とすされど外國との關係に至りては高祖も亦頗る困みたるが如し彼の匈奴は一旦秦の威に懼れて北方に退きしが高祖の時また南侵するに至れり高祖親征して平城(山西大同)にて圍を受け纔に禍を免かれしも爾後其屢來寇せるを以て和親を結むと婚姻を通じ繒帛を贈りしかく和親を結びたれど後代に至るまで境上を寇するを止まざりし高祖崩して太子盈立つ是を孝惠皇帝と云ふ(紀元前六四年)惠帝の時呂后皇太后となり蕭何曹參相つぎて相となり海内頗る治ま

同姓の諸王

匈奴の侵襲及び和親

呂后の専政

呂后を王す

れり後王陵陳平並び相となり周勃太尉となりしが太后の權力は漸く強く遂に呂氏の禍をなすに至れり惠帝在位七年にして崩じたりしかは太后宮人の子を立て、自ら政を攬り遂に呂氏の諸族を王となさむとし大臣は可否を訪ひけるに獨王陵の不可と云ふのみなりしかは遂に高祖白馬の盟に背き兄の子呂台を呂王となし呂祿を趙王となし呂台死せし後また呂産を呂王となし其他呂氏の封せられたる者多かりき嗚呼高祖の死より未久しからずして漢家の制度は一婦人の爲め破られたり劉氏の諸王豈に心に平ならむや是れ實に呂劉衝突の原因とはかりにけり

太后少帝を幽殺しまた宮人の子を立て、政を專し呂氏の諸族も亦勢を恣にせり劉氏の諸王の益面白からず思ひけるが太后の猶積威を有せるを以て心ならずも恨を吞みて控へたりしが如し然るに幾何もなくして太后崩じぬ是れ即ち禍亂破裂の期と云ふべしされは呂氏の諸族は先して亂をなさむと謀れりかゝる程に齊王襄(元子)

呂后の死

齊王兵を起す

周勃呂氏を平す

封爵の効果

文帝の仁儉

は遂に諸呂征討の名を以て兵を起したり相國呂産大將軍灌嬰をして齊を伐たしめたりしが嬰反りて齊と連和して進まさりき時、京師は南軍北軍あり南軍は衛尉に屬して宮城を守り北軍は中尉に屬して京城を衛るなり今此の兩軍は呂氏の手歸して太尉周勃兵を司とるを得ず陳平周勃と謀り北軍の將呂祿を詐めて其軍を奪ふ周勃遂に其兵を率ゐて呂氏を討ち盡く禍亂を平けたり齊王も亦禍亂の定まれるを以て國にかへり灌嬰も亦引き還せり是れ周勃の功なりと雖も亦劉氏の諸王の外援ありしによらずむはあらず然らば高祖同姓を封ふたるの効果は是に至りて顯れたりと云ふべし諸大臣遂に代王恒を迎立す是を孝文皇帝と云ふ(元子)

第五節 文帝の治世及び七國の叛亂

文帝賢明の徳あり其施政は仁儉を主とせり蓋高祖秦の後を受けて前世の苛法を除きたれど戦争屢起り人民の創痍盡く癒えざりしかば今その仁儉を主とせるは最も當時に適せる者と云ふべし彼の肉

刑を除く

刑を除き田租を免したるが如きは最著名なる者とす蓋肉刑は古來より行はれ來りし者にして當時猶黥劓刑の類ありしが黥は髡削して城旦舂となし劓は笞三百となし劓は笞五百となす(右註を別らるべきは後大に笞數を減したりし)是れ實に支那刑法沿革の期にして遂に後世の法となれり又井田の破れしより兼併の弊起り貧人は富人の田を佃作せらるに過ぎざりしかは高祖の時十五分の一を税とせり然るに文帝に至りて屢田租を除きたるにあり後景帝の時三十分の一となれり又貢獻を止め振窮養老の禮を定め自ら奉するを極めて節儉にして宮苑車服も増益せざりしが如きは實に仁儉の美德なり然れと諸侯王は姻族の關係漸く遠くなり加ふるに從來の積威ありしかは文帝の寛厚に因りて益驕侈に陥り濟北王興居の反あり淮南王長の謀反あり事皆平らぎたりしも吳王濞の如きは頗跋扈して漢の法に循はき楚齊の諸國も亦強僭するに至れり是れ實に當時の識者の憂ふべき所なるべしされは彼の年少の才人賈誼の如きは慧眼も是

田租を除く

諸侯の關係

時弊を觀破し一篇の治安策を上れり(紀元前)

賈誼の治安策

賈誼の治安策は唯諸侯強僭の弊のみを論じたるにあらざり雖も痛哭すべき者として第一に諸侯の患を論じたり其略に曰く天下の治安を欲すれば衆く諸侯を建て、其力を少くするに如かき力少なければ使ふに義を以てし易く國小なれば邪心なく海内の勢をして身の臂を使ひ臂の指を使ふが如くならしめれば制從せざるはなしと又曰く天下の勢は方に大瘡を病めり一脛の大なるを殆腰の如く一指の大なるを殆股の如く平居屈伸すべからず今時を失ひて治めされは必癩疾とならむと依て其救治の法として諸侯の地を分ちて其子弟に分つべきを以てしたり然るに文帝は盡く其言を用ひざりしに齊王襄の薨するに及び齊を分ちて六國とせし其諸弟將閭を齊王に志を濟北王に賢を菑川王に雄長を膠東王に印を膠西王に辟光を濟南王に封じたりかく齊の國土は分れたれと吳楚の諸國は依然たりき文帝在位二十三年にして崩じ太子啓立つ是を孝景皇帝と云ふ

景帝の即位

晁錯の削藩論

七國の亂

諸侯の削藩

景帝太子たりし時より晁錯を愛せしかを位に即きて御史大夫とあす錯も亦諸侯の患を除かむとせり依て景帝は説きて曰く吳王天下の亡人を集めて亂をかさむとす今其地を削らは必反せむ然れと削らざるも亦反せむ削らざる時は反するを遅くして其禍大ならむ削る時は反するを速にして其禍小ならむと遂に景帝は勸めて趙楚膠西の地を削り又吳の地を削りしが吳王遂に兵を擧げて反す膠西膠東菑川濟南楚趙の諸國も亦共し兵を擧げ晁錯を誅せむとするを名となす唯齊梁濟北の諸國は其亂に與せざりき景帝周亞夫を太尉とあし諸將を率ゐて東征せしむ會袁盎景帝は説きて曰く錯を斬らば諸叛自ら平かむと帝依て錯を殺して吳王を諭しし吳王詔を奉せず既にして亞夫洛陽に至りて吳楚の軍を破り遂に盡く諸叛を平けたり(紀元前五)是より景帝は諸侯の力を削らむと欲し其王を裁抑して其百官を減し朝廷より命じたる相をして其國を治めしめたり爾後諸侯は益削弱せられ纔に數縣を有する者あるに至り是れ封建制

度の變遷と云ふべし

吳楚の亂後は海内事なくよく文帝の施政の方針に從ひて節儉を尙びしかを國家益殷富にして財貨堆積し太倉の粟紅腐して食ふべからざるに至りりとを景帝在位十七年にして崩し太子徹立つ是を孝武皇帝と云ふ(紀元前五)

第六節 武帝の雄圖及び其失政

武帝の責任

武帝は雄才の人なり功名の心は富みたる人なりされど貧弱の世は出て、も猶爲を所あるべし然るを父祖の餘業を受けて殷富の時、際すいかて爲すをなくしてやむべき故に其文勳と武功とを觀るべき者あるに怪むに足らず

秦の書を焚き儒を坑ししたる後は學術久く興らざりしが武帝の時、に至りて大學を設け博士を置き儒教を以て政府の表準となし公孫弘の如き董仲舒の如きを皆經學を以て用ひられたり是より支那歴代の政治道德は儒教の支配をる所となれり獨儒學を尊ひしのみな

儒教の隆び文

匈奴を征す

らず文章詞賦をも重したりしかと司馬遷司馬相如東方朔枚臯の徒輩出せりかく文學の盛ると共し武功を輝かし版圖を擴めたるも前古より超出す中に匈奴征伐の如きは其最なる者なりき

初め文景の時より匈奴屢邊に寇し、かは武帝謀を以て之を誘撃せむとして成らず匈奴依て屢入寇したり武帝車騎將軍衛青を遣はして其兵を破り河南の地(内蒙古郡屬多斯地方)を取りて朔方郡を置きたり後匈奴また朔方を侵し、かゝ武帝又衛青を遣はして驅逐せしむ衛青大將軍となり其甥霍去病驃騎將軍となり共し屢匈奴を破れり後去病は沙漠を渡り狼居胥山(外蒙古喀爾喀地方にあり)に至りて還れり是より匈奴遠く遁れて漠南より王庭なかりき

是より先き唐蒙の南夷より通し司馬相如の西夷より通し僻遠の地を郡縣となし、が匈奴を漠北より追ひしよ及び路博德等南越(廣東地方なり)を平けて九郡(南海蒼梧鬱林合浦交九郡)を置き郭昌等西南夷(四川貴州地方なり)を平けて五郡(牂牁越巂益州永昌)を置き楊僕等東越(福建地方なり)を平けて郭昌等滇(雲南地方なり)

海外國を下す

西域の交通

を下し趙破奴樓蘭を破り車師を下し(甘肅地方)楊僕等又朝鮮を平けて四郡(玄菟高麗)となせり武帝又李廣利等を遣はして大宛(コカチン)を平けしめ更し匈奴を攻伐せしめしが後廣利軍破れて匈奴より降り是よりまた兵を出して攻めざりき

武帝又西域との交通を開きたり初め張騫月氏より使して共し匈奴を謀らむとし途より匈奴より留められしが後逃れて大宛康居(イシクタル)大月氏(アカフ)の諸國を経て還り具し其風俗を述べ大宛大夏(アフガニスタン)安息(ペルシヤ)等皆大國にして奇物多く又大夏の東南より身毒國ありて蜀を去ると遠からすと云ふ武帝依て騫を遣はし蜀より身毒に至らしめむとしたりしが遂に至る能はず後匈奴の勢大し衰へて西域の路通せるに及び騫烏孫(ウイグル)より使して匈奴の右臂を斷むとし更に武帝に請ひて西域諸國に使し先づ烏孫に至りて其旨を諭し副使をして大宛康居大月氏大夏等に使せしめて還れり是より西域の交通盛にして汗血の馬葡萄の酒の如きも皆漢に輸入し蕃客の長安に留

居する者甚多かりきと云ふ

神仙を信す

武帝の文勳武功此の如し然るも又神仙を信したるは怪むべき者あり蓋情強く欲大なる者長生不死を欲するより遂にかゝる事を信するに至れるありされば方士を信じて爵位を授け海上に游ひて神仙を求め又神仙の樓居を好むときて建昌宮通天臺并幹樓神明臺の如き廣大壯麗なる樓臺を營み又上林苑を造り昆明池を穿ち大に奢侈を極めたりかくて曩に殷富豐盛を極めたりし漢室も遂に疲弊困厄の境に陥れりさて武帝は其疲弊困厄に際して種々の法を設けて財源となし或は武功爵を賣り或は皮幣を造り或は鹽鐵酒酤を権し或は緡錢舟車に税を課し均輸平準の法を作り利を興し財を得るを勉めたり時に東郭咸陽孔僅桑弘羊の徒皆商賈より用ひられて大官となれり然るに人民の法を犯す者多かりしかと又多く酷吏を用ひて取締をなしたりされど吏民の法を犯す者益多く東方の地盜賊並ひ起りしかは繡衣使者を發して討伐せしむ時に長安にハ巫蠱の亂

樓臺池を營

國幣の毀弊

酷吏の任用

起り

起り太子據兵を出して江充を斬り劉屈氂の兵と戦ひて敗走し遂に自殺したるか如きとあり漢室の勢亦頗危かりきと云ふべし武帝依て輪臺の詔を下し往事を追悔し諸の苛政を除きたりしかと人民も又朝廷に從ひ海内纒に事なきを得たり武帝在位五十四年にして崩し太子弗陵立つ是を孝昭皇帝と云ふ(七紀元中)

武帝崩す

第七節 霍光の攝政及び宣帝の治世

霍光の攝政

昭帝位に即きし時年纒に八歳なりしかは大司馬大將軍霍光は武帝の遺詔によりて政を輔けたり光無學なれと謹慎にして過ちあらず故に武帝其大事を托すべきを知り遂に昭帝を助けしめたるなり然るに帝れ兄燕王旦は立つを得ざるを以て怨望し中山王長齊王澤等と不軌をはかれり尋て事顯はれ澤等を收捕したりしか燕王は至親あるを以て其罪を治めざりき時に左將軍上官桀の子安ハ光の女を娶りて一女を生み宮に入れて皇后となす故に桀も亦外戚を以て政に參し霍光と並ひ立ちしが互に權を争ひて相善からず又昭帝の姉

上官桀等の謀

鄂國蓋長公主及び桑弘羊等も亦光と隙あり遂に燕王旦と計を通じて光を除かむとしたりし帝の聰明なるを以て果さず桀等依て光を長公主の酒宴に招きて之を殺し遂に帝を廢して燕王旦を立てむと謀れり然るに其謀漏れて桀安弘羊等皆誅に伏し長公主及び燕王旦も亦自殺したり是より霍光専ら帝を扶けて政をなす勉めて民力を休養したるが如し彼の人民の疾苦を問ひ貧民を賑はし賦役を軽くしたるが如きは其一斑なりかくて昭帝は在位十三年にして崩し太子たるべき者なかりしかば霍光は皇族の内より選立せむと欲し群臣と議し武帝の孫昌邑王賀を迎へたり是れ實に霍光一生の失策たるを免れず蓋賀は昌邑王たりし時より淫佚暴行の人なれりなり故に其位に即きし時にも淫戯を事とし人君の度なかりき是より於て霍光憂懼措かず遂に張安世等と謀り群臣を會して廢立を議し太后の許を得て遂に王を廢し更に武帝の太子據の孫病已を立てたり是を孝宣皇帝と云ふ(紀七十五)

霍光の廢立

霍光の經歷

宣帝生れし時巫蠱の亂ありて父祖皆死し帝も亦獄に下れり後赦されたりと父祖の故を以て其位を得ず常に民間にありて窮苦を嘗めたりされと學術を勵み俊才に交りて其名頗高かりしかば遂に迎立せられたるなりかくて霍光の執政を罷めむを乞ひしがゆるされず時に霍氏の勢甚盛にして其族黨朝に充滿す光の夫人許皇后を毒殺して己の女を納れて皇后となせる如きと實に其跋扈の甚しきを見るべし既にして霍光薨し宣帝親ら政を攬り魏相を丞相に丙吉を御史大夫に張安世を衛將軍とす是より漸く霍氏の兵權を收めて其族黨を斥けたりしかば霍氏の諸族懼れて反を謀れり宣帝依て其族黨を誅し又霍后を廢したり(紀七十五)

霍氏の盛衰

霍氏の廢立

内政の整理

於ける皆治績あり宣帝曾て曰く我と天下を治むる者は其れ唯良二千石かとかく心を民治に用ひたりしかば官吏は職に稱ひて人民堵に安し稱して漢の中興の主と云へり且其國威を外蕃に振ひたるか如きも亦頗記すべきことす

初め昭帝の時に烏桓(彌彌)を破りしかば匈奴其威に恐れて久く寇せざりしかば宣帝の時に至りて烏孫を攻む烏孫は漢と婚姻の國ありしかば兵を出して往き援けしむ匈奴之を聞きて遁れ去れり常惠烏孫の兵を發して匈奴を伐ち大に斬獲あり尋て匈奴また烏孫を攻めたりしかば大雪に逢ひて士馬凍死し且丁零(西北胡)は北より烏桓は東より烏孫は西より攻めたりしかば其勢大に衰へて復邊に寇する能はず後五單于争立の亂ありて遂に呼韓邪單于と郅支單于とに歸せしが郅支の勢甚強きを以て呼韓邪は藩臣と稱して來朝す郅支も亦使を遣はして來朝せしめたり是より先き西域諸國も亦既し服從したりしかば都護の職を置きて天山の南北を護せしめたり宣帝在位

外蕃の風俗

内憂の萌生

二十五年よして崩し太子爽立つ是を孝元皇帝と云ふ(紀三)

第八節 宦官外戚の専恣及び王莽の篡立

元帝の時よも漢の威令は猶外に及び甘延壽が康居を襲ひて郅支を斬りたるあり呼韓邪の來朝したるありかく宣帝以來の餘威猶存せしも亦内憂の漸く生せるあり是を宦官外戚の専恣となす

元帝の時史高外戚を以て尙書の事を領す元帝又宦者石顯に政を委す顯高黨を結びて朝政を恣にを時に帝の師傅に蕭望之周堪といふ者あり史高に副として尙書の事を領せしが遂に史高と善からず外戚の専恣と宦官の跋扈とを憂へて建言し宦官を用ゆべからずと論せしかば顯等大に怒り望之等を請して廷尉の獄し下を後元帝望之を宥して相となさむとしたりしかば顯等また望之を讒して再獄し下さむとし遂に自殺せしめたり既よして石顯中書令となり周堪等を斥け五鹿充宗等と黨を結びて朝政を専しす然るよ元帝優柔よして如何ともする能はず遂に漢室衰頽の原となれり帝在位十六年よして

宦官の専恣

外戚の盛衰

て崩し太子驚立つ是を孝成皇帝と云ふ(紀元九)
 成帝の時一は石顯の官を免し其黨與を斥け宦官の勢を除きしが外
 戚の力一反て強くなれり成帝母王氏を皇太后となし其弟王鳳を大
 將軍となす既一してまた王鳳の弟崇を安成侯となし尋て又其弟五
 人(同、同、同、同、同)を列侯一封す是より王氏の勢益盛なり王鳳薨して王音王
 商王根相つきて大司馬となれり王根遂一其姪王莽を薦めて大司馬
 となす王莽は王鳳の弟なる王曼の子あり曼早く卒して侯たらず莽
 依て新都侯となりしが常に身を屈して英俊一下り學術を勉め節儉
 を主とし頗同族の爲す所一異なりしかは大一人望を得て遂一大司
 馬となれり時一年三十八王莽既一大司馬となり聲名益盛一して虛
 譽甚隆なり是れ皆其天下を欺きたるなり成帝在位二十六年一し
 て崩し太子欣立つ是を孝哀皇帝と云ふ(紀元六)
 哀帝の時王莽は其外戚なる丁傅兩氏を避けて國一就きしが哀帝の
 崩する一及びて又大司馬となり太后と謀りて元帝の庶孫箕子を立

王莽の執政

王莽の基礎

王莽の基礎

王莽の基礎

つ是を孝平皇帝と云ふ(紀元一)時に帝年九歳ありしかは王莽諸政を
 總攬し遂に其女を納れて皇后となし自ら宰衡と稱して諸侯王の上
 位一上書して其徳を頌する者甚多し時一孔光張禹等三公たりし
 も亦外戚を如何ともする能はず王莽遂一帝を毒殺し宣帝の玄孫嬰
 を迎へて孺子と號し自ら諸政を行ひて或は假皇帝と稱し或は攝皇
 帝と云はしめたりかく其勢は將一漢室を篡せむとする一至りしも
 當時劉氏の諸侯は七國の反より漸く土地を削られ殆數縣の地を有
 するに過ぎず其力甚微弱なりしかは外戚を制せむとするもの少
 く中に劉信等の如き一翟義と兵を起したれど皆討滅せられたり是
 於て王莽はまた天下一憚る所なく坐ながら漢室を篡して國を新
 と號す漢凡十二世二百九年にして亡ひぬ時に我か紀元六百六十八
 年あり(紀元八)

王莽既天子となりしより諸政を改革して天下の耳目を一新せむ
 と試みたりされは新に四輔(太師太傅太保太監)三公(大司馬大司徒大司空)四將(更始將軍平南將軍)を

王莽の改革

兼併及び奴婢の制限

王田私田の制

置きて十一公となし州郡の官も亦改革せる所あり或は州縣の名目及ひ境界を變更し又漢の貨幣にて通用し來りし五銖錢を禁じて新し寶貨（五銖八品）を造り人民の銅炭を挾むを許さず又五均六筦の令を設けて州縣に諸種の税を課じたり而して其改革の最大なる者は天下の田を收めて王田となし奴婢を名けて私屬となしたるにあり抑井田の制破れてよりは兼併の弊起り貧は益貧となり富は益富となり且其奴婢の子は奴婢にして全く良民と資格を異にし一の財産たるに過ぎずされは漢の末には長安の市に於て馬牛と欄を同くして奴婢の賣買をなすに至れり是れ王莽が第一に改革して人心を收攬せむと謀りし所なるべし故に天下の田を王田となし男口八人し滿たせしめて田の一井に過ぐる者は隣里郷黨に分與するるとし奴婢を私屬となして賣買を禁じたり是れ其名は取るべしと雖も實際に於ては人の財産を抑する者なれば容易し行ゆる可きしあらず後遂に

人民の愁怨

王莽の道を失

其待遇の道

境内の兵亂

中止するに至りしは是非もなき次第と云ふべし且法令定らず朝令暮改の觀あり人民其堵に安せき田を賣り錢を積みて罰せらるる者多かりきかく内政の宜しきを得ざるのみならず其外交に於ても亦大に誤れる所あり

王莽は其尊嚴を増させむとし漢の諸侯王を降して公侯となしたるが上し又諸外國に向ひて曾て王號を授けたる者を改めて侯とし且其待遇の道を失へり是し於て匈奴句町等の諸夷皆怒りて叛す王莽大兵を發して匈奴を伐ち句町を攻めしが敗亡多くして功をなさず西域諸國も亦瓦解するし至れり當時の勢既に此の如し禍亂の起るは期して待つべきなり

第九節 王莽の敗滅及び光武の中興

王莽の諸政既し人心を失ひたりしかば各地し兵を起す者多かり苻（山東省青）州府苻（山東省青）の赤眉の兵起り荊州（湖北省）新市（湖北省安陸）は綠林平林の兵起り綠林の兵又分れて下江新市の兵となれりかゝる程し漢の宗室

劉縯兄弟兵を起す

劉縯劉秀も兵を春陵(湖北高唐縣)に起したり劉縯兄弟は南頓の令劉歆の子として長沙定王(景帝の子)の後なり縯は慷慨として大節あり秀は寛厚よして度量も富めり共し兵を起して新市平林下江の兵と勢を合はす其衆十餘萬より上りて統一する所をかりしかば或は縯を推して主となさむとす然るも諸將縯の同族劉玄の暗愚なるを利し立て、帝となし遂に進みて昆陽(河南新蔡縣)定陵(河南舞陽縣)郾(河南臨潁縣)宛(河南南陽縣)を下し宛をとりて都となしたり王莽の將王尋王邑大兵を率ゐて來りしが劉秀大に其軍を昆陽に破れり是を昆陽の戦と云ふ是より四方の豪傑競ひ起りて漢に應ずる者多く隗囂は隴西に起り公孫述は蜀に起れりかくて劉縯兄弟の威名日に盛なりしかは玄遂に縯を殺し秀を權威將軍となせり漢軍進みて長安に入り遂に王莽を殺す莽帝と稱してより十五年よして亡ひぬ(紀元五年)

昆陽の戦

王莽の滅亡

劉玄洛陽に入りて都と遂に長安に遷り劉秀は河北の地を徇へたり時に邯鄲の卜者に王郎と云ふ者あり成帝の子劉子與と稱し兵を舉

劉秀河北を徇

けて幽冀の地を下す劉秀既に薊(燕郡薊縣)に至りしが薊中王郎に應じたりしかば逃れて下博城(直隸省河間縣)に至れり時に信都(直隸省冀州)の太守任光和(定州府晉州)の太守邢彤の堅く守りて王郎に従はざるを聞き信都に至りて其兵を發し和戎の兵に會して邯鄲を破り遂に王郎を平けたりかくて劉秀の威名益盛なりしかば劉玄秀を蕭王となし兵を罷めて歸らしめむとす秀歸らば禍を受けむとを知り河北の未だ平かならざるを辭となして徵に就かず遂に銅馬の諸賊を破り南河内の地を下し又燕趙の地を徇へ還りて鄴(直隸省趙州)に至り諸將の勸によりて帝位に即き遂に洛陽に都せり是を後漢の光武皇帝と云ふ(紀元五年)

時に赤眉の賊は既に劉盆子を帝となし長安に入りて劉玄を逐ひしかば光武玄を淮陽王とす初め光武鄧禹を遣はして長安を救はしめしが禹赤眉の兵と戦ひて利あらず依て更し馮異を遣はす禹馮異と共に赤眉を撃ちて利を失へり尋て馮異大に其兵を破りしかば赤眉の將宜陽(河南宜陽縣)に至りて降りかくて赤眉は平きしも海内は

光武の即位

赤眉を平す

群雄の討伐

猶未た平かならず公孫述は蜀ありて帝と稱し隗囂は隴西ありて西州上將軍と稱し又竇融は河西(甘肅省蘭州甘州)に據りて五郡大將軍と稱し劉永は睢陽(河南省歸德府)に據りて帝と稱し張歩は臨淄(山東省青州府臨淄縣)に據りて齊王と稱し李憲は廬江(安徽省廬江縣)にあり秦豊は黎丘(湖北省黃石縣)にあり彭寵は漁陽(直隸省順義縣)に反す光武中興の難きを知るべきなりされと其材武と臣下の人を得たるとによりて平定の功を奏するに至れり吳漢は劉永を平け朱祐は秦豊を平け耿弇は張歩を平け馬成は李憲を平け彭寵も亦其奴に殺され東南東北の地と皆平きしが隴蜀の地は猶平かならず光武依て親ら隗囂を伐ちしが潁川に盜起りしを以て引き還れり尋て囂死して其子純降り隴西の地悉く平きたり光武曰く人生足を知らず既し隴を得て又蜀を望むと吳漢岑彭等を遣はし公孫述を伐ちて蜀を平けしめたり竇融も亦來朝して冀州の牧とありしかハ海内全く定り中興の業終に成れり時に光武の即位より十二年にして我が紀元六百九十六年(三國紀元)あり

光武群雄を討伐す

光武の政治

光武の政をなす悉く王莽の諸政を改めて漢の舊に復し且前漢の高祖とは大に其趣を異しせる所あり功臣には兵事と吏事とを任せ皆列侯として第1就かしめたりしかは諸將も亦功名を全くし韓彭の禍を受けたる者あり且光武は柔道を以て天下を治めむとしたりが如し北匈奴を攻めむと請ふ者あるより方りて柔能く剛に勝ち弱よく強を制する所以を告げ又西域の入附を求めたるに遂に事を生せむとを恐れて謝絶したり即位の初めに大學を起し禮樂を修め又孝廉の士を擧げ高節の士周黨嚴光を重したりしかハ其結果ハ後世に至りて大に顯はれたり光武在位三十三年にして崩ト太子陽立つ是を孝明皇帝と云ふ(紀元七二七年)

第十節 外蕃の叛服及ひ班超の偉功

明帝の時にも亦大に文學を重し學校を盛にし國內頗事なかりしが外蕃に對せる方針は大に光武に異ありしが如しされは諸將を遣はし遠征を事とし遂に外蕃との關係を多くするに至れり初め匈奴は

匈奴の分國

耿秉寶固匈奴を征す

光武の時に屢寇をなし、が連年旱蝗、逢ひて大に疲弊し、遂に内亂を生じ、南邊八部は日逐王を立て、單于となす。匈奴はより遂に南北に分れたりき。明帝位に即きて、兩匈奴相通する路を斷たむと、度遼營を五原(内蒙西北)に置きたり。既にして耿秉、寶固等將となりて、北匈奴を伐ち、固は天山より蒲類海に至り、伊吾廬の地(陝西)を取りて、屯田を兼は、沙漠を渡り、三木樓山に至りて還れり。

班固の經歷

寶固の假司馬に班超と云ふ者あり、父を班彪と稱し、兄を班固と稱し、共に文學を以て知られたり。超生れかからにして、大志あり、曾て備書たりしが、慨然筆を投じて、歎して曰く、大丈夫當に功を異域に立て、封侯を取るべしと。相者曾て超の燕頰虎頭あるを見て、萬里侯の相ありと、おを寶固北征の時に、其軍に従ひて、假司馬となり、屢戰功あり。固依て超を材能の士となし、西域に使す。西域は王莽の時に、匈奴に服屬し、光武の時に復漢に屬するを求めたりしが、許されず。遂に半は匈奴に服従したり。是より至りて、班超先づ鄯善に至りて、匈奴の使を斬り、鄯

善王を討つ

○

西域に屬す

都護の設置

善王をして、匈奴と交を絶たしめ、還りて、其由を奏す。尋て、また三十餘人を率ゐて、西域に使を時、于寘(西域)王新、沙車(西域)を破りて、南道に雄張し、匈奴に屬す。超于寘に至りて、遂に其王を降し、更に疏勒(西域)に至れり。時に龜茲王は疏勒を破りて、龜茲の人、兜題を王とし、超依て疏勒の將吏に説きて、故王の姪を立て、兜題を廢す。是より西域の諸國復漢に通せり。既にして耿秉、寶固車師を伐ちて、前後兩部の地を定め、西域の都護及び戊己校尉を置かむと、請ふ。明帝陳睦を都護に、耿恭を戊己校尉に、關龍を己校尉と、お車師の地に屯せしめたり。明帝在位十八年に、して崩し、太子烜立つ。是を孝章皇帝と云ふ。三、五、七、時に龜茲及び焉耆(西域)の兵、陳睦を攻殺し、北匈奴車師の兵は耿恭、關龍を圍みたり。しかは章帝軍を遣はして、之を救ひ、北匈奴を走らし、車師を下す。關龍は既に敗没したりしが、恭を迎へて、還り、都護及び戊己校尉の官を罷め、又班超を召し、還さむとす。然るに超は疏勒、于寘等の兵を發して、姑墨(西域)を破り、其勢を乘して、諸國を平けむと、上書して、兵を請ふ。

班超西域を服す

章帝兵千人を送り更し超を將兵長史となし超また于寘等の兵を發して莎車を降し龜茲を走らし威名西域を震蕩したり章帝在位十三年しして崩し太子肇立つ是を孝和皇帝と云ふ(四元七)和帝再西域の都護及び戊己校尉を置き班超を都護となす超前し月氏を服し後龜茲鄯善等の兵を發して大し焉耆を破りしかは五十餘國復内屬し數千里外の者も亦譯を重ねて貢獻したり和帝超を封じて定遠侯となす超時し年六十二西域し在るる二十四年なり(五元七)是より先き北匈奴も全く衰耗し南匈奴は其前を攻め丁零は其後し寇し鮮卑は其左を撃ち西域は其右を侵す後匈奴大し亂れて五十八部來り降り是れ章帝の末年しあり和帝の時し至りて竇憲罪あり功を建てし其罪を贖はむとし北匈奴を伐ち燕然山し至り遂し其種族を平けて還れりかく西北の地悉く漢の版圖し歸せしが班超歸りて任尙の都護となるし及び西域また安からる(六元七)後遂し其地を失へり

第十一節 外戚及び宦官の專恣

竇憲北匈奴を滅す

内憂の萌生

漢の威力の遠く外蕃し及びたるは前し説けるが如しされど外安ければ内憂を免かれず國內を顧みれば漸く禍患の萌生せるあり是を外戚及び宦官の專恣とあす初め光武の時しは前漢の患し懲りて痛く姻族を抑損したりしかは明帝章帝の時しも其禍を見ず然るし和帝し至り初めて其禍を生したり蓋後漢諸帝の幼冲なりしかは外戚跋扈の基となり外戚跋扈は轉じて宦官專恣の原となり互し糾纏して漢室を禍するし至れり

竇氏の專恣

宦官の立効

鄧氏の執政

初め和帝の位し即さし時年纔し十歳なりしかは母竇太后政を攬り兄竇憲を侍中となす憲の匈奴を破りて還るし及び遂し大將軍となし其族黨を要地し置く是れ外戚專恣の始めなり(四元七)和帝稍長して其專權を憤り宦官鄭衆と謀りて憲を殺し其族黨を斥け衆を大長秋とす是れ宦官專恣の始めなり(五元七)和帝在位十八年しして崩し竇帝位し即さしが生れて纔し百餘日あり母鄧太后依て其政を執れり既しして竇帝崩したりしかは太后兄鄧騭と謀りて章帝の孫祐を

宦官の用權

立つ是を孝安皇帝と云ふ(元七)年纔十三なり鄧太后尙政を攬り兄臨を大將軍とあす且鄧太后女主を以て政を攬りしより宦官を任用を故に宦官の權も亦漸く重くなれり後鄧太后崩するに及び鄧氏の反を誣告する者あり安帝怒りて鄧氏を斥く是より閹后及び兄閹顯代りて政を執り宦官江京李閏等相倚りて姦をあたし太子保を廢して濟陰王となしたり安帝在位十九年にして崩したりしかは閹后は閹顯江京等と謀りて北郷侯懿(安帝の從弟)を擁立し大に威權を專す既にして懿薨したりしかは宦官孫程等十九人夜宮中に入りて江京等を斬り濟陰王を擁立す是を孝順皇帝と云ふ(元六)程等盡く諸閹を殺し列侯に封せられたり是より宦官の勢益盛なり順帝の時梁后の父梁商及び其子梁冀相つきて權を專す順帝在位十九年にて崩し太子炳立つ是を孝冲皇帝と云ふ時二年二歳なり冲帝在位二年にして崩す梁太后梁冀と謀り章帝の立孫續を立つ是を孝質皇帝と云ふ(元六)年八歳なり時梁氏の諸族益跋扈し一門より前後七侯三

宦官の專權

宦官の勢力

梁氏の跋扈

七八六

八〇七
八一九

宦官の選拔

清節の士の輩

清節の士と宦官との衝突

皇后六貴人を出したり尋て梁冀質帝を毒殺し更し章帝の曾孫志を立つ是を孝桓皇帝と云ふ(元七)桓帝梁冀の政を專し縦暴を極めたるを以て宦官單超等と謀りて梁氏を平け超等五人列侯となす(元八)是より宦官の内外にある者益凶威を逞し暴戾を極めたりしかを遂し清節の士と衝突を惹き起すに至れり光武の後大學は益盛しして明帝順帝の時には校舍を増し質帝の時よりは三萬餘人の學生ありきと稱す又貢舉の中なる孝廉の科の如きも亦盛し行はれたりされは其結果に清節の士を生じたるは怪むに足らざるなり彼の荀淑黃憲陳蕃李膺の如き人物輩出し大學には郭泰賈彪の如きありて宰相と交り時政を論評し且宦官を惡むを仇敵の如くなりしかは其衝突は避くべからざるなり時陳蕃太尉たりしが李膺を舉げて司隸校尉となし宦官膺の嚴俊を畏れて敢て宮省を出てず會南陽の太守成瑨太原の太守劉瓚は赦後に宦官の黨を案殺したるを以て獄に下され山陽の太守翟超は宦官の家宅を破り東

黨人の獄

海の相黃浮は宦官の族人を殺したるを以て亦共罪を得たり是れ當時兩派の軋轢の一斑を見るに足るべしかく李膺も亦赦後宦官の黨を案殺したりしかは宦官相謀りて膺等は大學の學生と朋黨して朝廷を誹譏すと誣告し遂に膺等を捕へて獄に下し更し杜密陳寔范滂等二百餘人を捕ふ陳蕃も亦諫の聽かれざるを以て職を去れり既しして膺等の獄辭多く宦官の子弟を引きししかは宦官懼れて帝より白し黨人を宥して終身禁錮となせされと膺等の名聲は反て益高く當時の士更し名目を立て、三君(袁武陳蕃劉淑)八俊(李膺荀爽杜密王暢)八顧(郭泰巴吉夏馥范滂)八及(張儉羊祜劉表趙岐)八厨(度尚張邈王粲劉翊)の號ありき桓帝在位二十一年より崩し嗣かかりしかは竇后父竇武と謀りて章帝の立孫宏を立つ是を孝靈皇帝と云ふ(紀元一八)時より年十二歳あり竇后依て政をとり竇武を大將軍とせし陳蕃を太傅となし李膺杜密等を擧用を竇武陳蕃勢に乗して宦官曹節王甫等を誅せむとしたりしが謀漏れて皆殺され節等反て列侯となれり是より宦官愈強く李膺杜密范

八二八

八二九

宦官の士を殺す

滂等百餘人を殺し其他隙ある者六七百人を死徙廢禁す(紀元一八)是に至りて清節の士は地を掃ひ宦官の勢を内外に恣し漢室の事知るべきなり

第十二節 海内の争亂及び三國の分立

八三〇

黄巾の亂

靈帝の時より鉅鹿より張角と云ふ者あり常に妖術を以て教授し符水を以て病を療し弟子を四方に遣はして人民を誑誘し數十萬の徒衆を集めて亂をなさむとし竊に機のを至るを待てりかゝる程に宦官の暴威を逞くと内外の人心漸く漢室を去りしかは遂に各地より俱に起りて所在を燔劫す是を黄巾の賊と云ふ實に海内争亂の端とはかりしけり(紀元一八)かくて黄巾の勢頗盛なりしが皇甫嵩の兵を率ゐて出征するに及び張角の病死し其弟張梁の敗死せりされと是より外は盜賊益起りて各地に群集し内は宦官尙威福を恣しせり靈帝在位二十二年より崩し太子辨位し即く時より年十四なり何太后朝し臨み兄何進を大將軍となす進袁紹と謀り四方の猛將を召して宦官を誅

宦官の殺

董卓の敗退

群雄の集結

曹操の経歴

董卓の経歴

群雄の集結

八四九

せむとしたりしが反て宦官を殺されたり紹依て兵を勅して宦官二千餘人を殺し遂に其黨を滅したり時、隴西の董卓は何進の召に應じて洛陽に至り辨を廢して其弟協を立つ是を孝獻皇帝と云ふ(八紀四)卓又何太后を弑し自ら相國となりて諸政を專らし暴威を振へり是に於て關東の州郡兵を起して卓を討ち袁紹を推して盟主とす群雄各地に屯せ中、最頭角を顯したる者を曹操と云ふ曹操(武帝)は沛國の人にして父嵩の宦官曹騰の養子あり操天質機警にして權數あり或人評して治世の能臣亂世の姦雄となす曾て騎都尉となり皇甫嵩に従ひて黃巾の賊を討ち初めて其名を著し、が遂に群雄と共に兵を起して董卓を討つ長沙の太守孫堅も亦兵を起して北上す關東の兵甚盛なりしかは董卓遂に其鋒を避けて都を長安に遷せり關東の兵卓の兵と戦ひて互に勝敗ありしが敵の避け去りしを以て内自ら乖離し冀州の袁紹は荊州の劉表に結び南陽の袁術は北平の公孫瓚に結びて相圖れり長安にては董卓益暴虐を行ひた

八五二

關中の亂

劉備の経歴

曹操天子を奉

八五六

官渡の役

りしかは司徒王允卓の臣呂布と謀りて共に卓を殺す(五紀二)既にして卓の黨李傕郭汜長安に入りて王允を殺し呂布を逐ふ布走りて袁術に依り又袁紹に歸す時、曹操は兗州の刺史たりしが兵を出して徐州の牧陶謙を討つ布依て其處に乗じて兗州を亂す操兵を旋して布を破りしかは布又東に走りて劉備に依れり(五紀五)劉備(字玄徳)は涿郡の人にして自ら漢の景帝の後と稱す寛厚の中に頗權略あり曾て公孫瓚に依り後平原の相たりしが陶謙の死せるに及びて徐州の牧とされり布既に來りて備に依りしが後又備を攻めしかは備走りて曹操に歸す操時、獻帝が關中の亂を避けて洛陽に還りしを以て帝を許(河南)に奉り自ら大將軍司空となり大に其力を養へり劉備の來歸するに及び奏して豫州の牧となす(五紀六)既にして呂布又袁術に通じて備を攻めしかは操備を救ひて布を虜にす是の時、方り袁術の既にして死せしが袁紹の冀州にありて公孫瓚を滅し心益驕りて曹操を攻めむと官渡(河南)に至りて操の軍と相持す

八六二

曹魏河北を平定す

曹魏荆州を討つ

孫權の経略

會劉備董承と共一曹操を誅せむと兵を徐州一起す操承を殺し備を破りまた官渡一至りて大一紹の軍を破れり紹冀州一歸り病を發して死し其國內大一亂れたりしかは操遂一冀州を討一進みて烏桓をも平け歸りて丞相となれり是より其勢益盛なりき（紀元二〇八年）劉備は向き一冀州一走りて袁紹一依りしが後汝南一ありて戦利あらず荆州一走りて劉表一依り初めて諸葛亮を草廬の中一得たり亮備一勸むる一三分の策を以てすかくて曹操は既一北方を平けしかは又兵を荆州一出す時一劉表死し其子劉琮降りしかは備又夏口（湖北府）走りて吳の孫權一依らむとす

初め孫堅戰死し其子孫策江東を平けて吳の地一據りしが仇人一殺されたりしかは其弟孫權（字は權）代りて江東を領し丹徒（江蘇府）都す權沈重一して果斷一富み魯肅周瑜の如き名臣多かりしかは其勢頗盛なり曹操既一劉琮を降し劉備を逐ひ江流一從ひて東一下らむとす諸葛亮吳一至りて操を拒くべきことを説く會操書を權一贈りて

八六八

孫權の戦

八七四

劉備を討つ

吳魏の連合

八八〇

三國の争

曰く今水軍八十萬の衆を治めて將軍と吳一會獵せむと吳の群臣大一恐れて操を迎へむと云ふ者多かりしが只周瑜魯肅のみさかき瑜遂一權の命を奉し兵三萬を督して大一操の軍を赤壁（湖北黃州）の下一破れり是を赤壁の戦と云ふ（紀元二〇八年）備も亦荆州の四郡を下し關羽を荆州一留め自ら兵を率ゐて蜀一入り益州の牧劉璋を殺して其州を領し（紀元二〇八年）又漢中の地を取りて漢中王と稱す是一於て天下三分の形勢全く成れり然る一關羽の威甚盛一して蜀の勢は漸く他國を凌かむとする一至りしかは遂一吳魏の連合成り吳の兵關羽を攻殺す曹操向き一魏公となり又魏王一進みて薨し子丕尋て魏王となりしが遂一漢を篡す是を魏の文帝と云ふ後漢凡十二世百九十七年一して亡ひぬ（紀元一八四年）時一劉備は蜀一ありて帝位一即く是を昭烈皇帝と云ふ孫權は吳一あり魏と鼎足の勢をなせり是より後を三國とは云ふなり

第十三節 三國の和戦及び諸葛亮の経略

三國の形勢

三國の形勢を按ずるに魏は北にありて土最も廣く人最も多く又權略の士に富めり吳は南にありて土地人口魏の次に位し且長江の險あり材武の士少からず獨蜀は西方に僻在し地狭く人少きも猶能く鼎峙の勢を保ちたるは蓋諸葛亮の力に由れり今此三國が利害よりて離合せる和戰攻守の道を説くべし

蜀魏を征

吳蜀の和好

魏吳を伐つ

昭烈は關羽の仇を復するを名とし兵を出して吳を攻めむとす蓋或は其國力の猶爲すあるを吳魏に示さむとの意なるべしされは群臣の諫をも聽かず四萬餘人を率ゐて出軍し吳の將陸遜と夷陵(湖北宜昌府)に相持したりしが不幸にして蜀の軍大に破られ昭烈は逃れて白帝城(四川賓州府)に入りしかく吳は戰に勝ちしも反て使を蜀に遣はして好を求めたり蜀も亦報使を遣はして兩國相通する事となりしが吳魏の好は遂に破るゝに至れり
初め吳好を魏に通せしかは文帝孫權を吳王に封せり既にして吳の質子を召しゝに至らず依て吳を伐たむと夷陵の戰の翌年に諸將

吳蜀の和好

魏吳を伐つ

諸葛亮南夷を平く

諸葛亮南夷を征

を遣はして南征せしめ江陵を圍みしが遂に克たすして還れり時に蜀の昭烈病によりて崩じ太子禪立つ是を後皇帝と云ふ(蜀主)諸葛亮輔相となりて政をなせ吳に親みて魏に當らむと使を吳に遣はして連和の約を堅くす是より信使往來して交情頗厚くなれり魏の文帝は吳蜀の交を見て前後兩回吳を征して江上に至りしが江を渡る能はずして引き還せり尋て文帝崩じ太子觀立つ是を明帝と云ふ(魏主)孫權も亦帝位に即きて建業(江都)に都す是を吳の大帝と云ふ是より三國共帝號を有したり
諸葛亮輔相となりしより大に内政を修理し魏を攻めて中原を取らむと謀り南夷の孟獲を平けて後顧の憂を除き遂に師を北方に出さむとす魏の明帝の位に即く及びて自ら諸軍を率ゐて北征し發するに臨みて上表し後帝に望むに宮中の事は費禱董允に咨ひ營中の事は向寵に咨ふべきを以てし且昭烈と自己との關係を陳し忠懇惻怛の情を極めたり其終に曰く今南方已に定まり甲兵已に足れり當

一三軍を奨め北中原を定むべし庶くハ驚鈍を竭くハ姦凶を攘除し漢室を興復し舊都一還るを得は此れ臣が先帝一報し陛下一忠する職分なりと其志氣の誠想見するは足るべしかくして亮は漢中より進みて祁山(甘肅省岷州府西)を攻めたりしが魏の南安安定等の諸郡ハ皆亮一應す魏の明帝張郃を遣はして亮を拒かしむ魏蜀の兵街亭(甘肅省天水)一戰ひしが蜀の將馬謖亮の節度一違ひたるを以て蜀の兵大一破れて漢中一還れり既しして亮また上表して蜀と魏との兩立すべからざる由を陳し兵を出して陳倉(陝西省鳳縣)を圍みしが糧盡きて還れり(八元八)後また兵を出して祁山を圍みしが魏の將司馬懿來り拒く懿(字季也)ハ河内の人しして梟雄しして權詐一富めり亮魏の兵と戰ひて懿を破りしが後糧盡きて漢中一還り(九元八)農を勸め武を講し木牛流馬を造りて兵糧を運し三年を経て又兵十萬を率ゐて出征し且吳蜀共一大舉して魏を伐たむと欲し使を吳に遣はして出兵を促さしめ遂に進みて五丈原に至り司馬懿と相持し渭濱に屯田して持久の

蜀軍の攻守

吳蜀の出兵

策を講す吳の太帝も亦蜀の約に應じ大軍を發して魏を伐ちしが明帝の來り拒くし及びて却けられたり亮は司馬懿と相持するを百餘日一巨り屢戰を挑みたれど懿應せず亮依て巾幗婦人の服を贈りしが猶應せず既しして亮病一罹り軍中一て薨せしかは姜維等軍を整ひて還れり(九元八)嗚呼僻小の蜀を以て強大の魏一抗す成敗利鈍は固より期せざるべし然れと亮しして長生せは當時の事未だ知るべからず然るし不幸しして死す蜀の末路憐むべきなり

第十四節 司馬氏の專恣及び三國の滅亡

蜀は諸葛亮の死してより久く兵を出さざりしかは魏の明帝司馬懿をして遼東の公孫淵を伐たしむ懿遂し淵を破りて遼東を平けたり是より懿益權を得るし至れり明帝崩して太子芳立ちしが年纔一八歳なり司馬懿曹爽共一遺詔を受けて政を輔くることなれり然るし曹爽帝一白して懿を太傅となして其實權を去り自己の親族徒黨を用ひて朝政を專しせりされと曹爽固より庸物おれば司馬懿の雌伏

諸葛亮の死

蜀軍の退還

司馬懿遼東を平く

司馬懿の死

せるは驚鳥の將ヲ搏たむとするが如きを知らざるなりかくて後數年を経て懿は其子師、昭と謀りて爽の逆謀を誣ひて其黨與三族を誅し遂に自ら丞相となれり是より魏の政は司馬氏に歸し其勢益盛なりき(紀元九)既にして懿薨して長子師撫軍大將軍、錄尚書事となりしが益威權を專し遂に帝を廢して邵陵公となし更し高貴郷公髦を立てたり時、揚州の都督母丘儉及び刺史文欽兵を起して師を討ちしが師兵を出して儉、欽を破り更し諸葛誕を揚州の都督となす既にして師薨し其弟昭大將軍となり大都督の號を加ふ諸葛誕また兵を挙げたりしかは昭復兵を出して誕を斬れり是より魏の臣また司馬氏に抗する者なし昭遂に相國となり晋公となれり帝威權の日衰ふるを見て忿々の情、堪へず殿中の宿衛蒼頭官僮を率ゐて昭を討たむとし反て昭の黨、弑せられたり昭遂に帝を追廢して庶人となし常道郷公璜を立つ是を元帝と云ふ(紀元九)是より先き蜀の姜維ハ諸葛亮に代りて兵權を握り屢大舉して魏を

司馬懿の死

司馬懿の死

司馬懿の死

伐たむとしたりしが大將軍費禕の聽かざるを以て果さず禕の薨するに及びて恣に兵を出して魏の狄道(甘肅省隴州)、祁山等の地を攻めたり司馬昭蜀の寇を患となし遂に蜀を滅さむとし鄧艾、鍾會等を遣はして出征せしむ時、蜀は後帝暗庸にして政を修めず宦官黃皓權を專し姜維屢兵を用ひて民力を疲らししかは内外の情已に朽木の風を待つが如しと云ふべきありさて鄧艾は狄道より鍾會は斜谷(陝西)の西南にあり、駱谷(陝西)の西南にありより進みしかは姜維は退きて劍閣(四川)の東北にありを守り鍾會と相持す時、鄧艾は陰平(甘肅省)の北にあり、至り山を鑿ち谷、架して無人の地を踏み遂に江油(四川)に至りて蜀の守將を降す諸葛亮の子瞻艾を防きて大敗し其子と共し戰死す後帝拒く能はざるを知り使を遣はして降を乞ひ且姜維に勅して鍾會に降らしむ鄧艾の成都に入るに及びて後帝遂に面縛して降れり魏後帝を封して安樂公とあす蜀凡二世四十四年、亡に及りて亡ひぬ(後漢文は鍾會に殺され會も亦姜維に殺されたり)(紀元九)

蜀の滅亡

司馬懿の死 五十一 蜀の滅亡

蜀の滅びたるは全く司馬昭の力なりしかは其勢益強く遂に爵を進めて晋王となれり既にして昭薨じ其子炎爵を嗣さしが元帝をして位を禪らしめたり是を晋の世祖武皇帝と云ふ魏凡五世四十六年にして亡ひぬ(魏元帝)

蜀と魏とは既にして亡びたれと吳は猶江南一帯の地を據れり初め太帝崩したる後は太子亮立ちしが孫琳政を執り帝を廢して其兄瑯琊王休を立つ是を景帝と云ふ景帝琳を族殺じ在位六年にして崩す是れ蜀の亡ひたる年なり時景帝の子幼なるを以て太帝の孫烏程侯皓位に即く皓驕暴にして酒色を耽り刑罰を濫ししかは吳の政大に亂れたり晋の武帝羊祜をして襄陽(湖北)を鎮じ竊に吳の隙を伺ひしめしが吳の將陸抗境を對して相持し久しく隙を得ず既にして抗卒したりしかは祜吳を伐たむを請ふ朝議遷延して決せず會祜疾に罹り杜預を擧げて己の代らしめて死しぬ時吳の孫皓の淫虐益甚く上下心を離したりしかは杜預及び益州の刺史王濬類に吳を伐

吳の滅び

たむをを上請と武帝遂に吳を伐つを決し預は江陵より進み濬は巴陵より下り其他の諸將も道を分ちて進み遂に建業に迫りしかは孫皓面縛して降れり吳凡四世五十二年にして亡ひぬ是より於て海内を一統す時晋の武帝位に即きしより十六年にして我が紀元九百四十年なり(西紀元)

吳の滅び

たむをを上請と武帝遂に吳を伐つを決し預は江陵より進み濬は巴陵より下り其他の諸將も道を分ちて進み遂に建業に迫りしかは孫皓面縛して降れり吳凡四世五十二年にして亡ひぬ是より於て海内を一統す時晋の武帝位に即きしより十六年にして我が紀元九百四十年なり(西紀元)

第四章 兩晋南北朝の分合

第一節 晋初の形勢及び八王の亂

西晋の亂

晋の武帝は海内を一統したりと雖も幾もなくして争亂また起り海内再四分五裂するに至れり今其原因を述べし

同姓の封

封建の制度は後漢以來益名ありて實なく魏の如きは子弟の諸侯たる者も一兩縣の地を有するに過ぎず遂に司馬氏は坐から其國を奪へり故に晋の世には魏の孤立して亡ひたるに懲り大に宗族を各地に封じ以て藩屏と爲むとしたり是れ反て骨肉相鬪ふの基となれり且當時の士風は清談に耽れり願ふに清談の起原は既にして魏の世より

清談の流行

り漢末は清節を尙ひたる影響なきはあらずと雖も彼の佛教及び老莊の學の如きと最興りて力ありとなす蓋佛教は後漢の明帝の時支那に入り爾後益盛にして經典の翻譯あり士大夫其書を窺ふを得たれば其感化少しと云ふべからず又經學流行の反動として老莊の學を好みし者あり遂に竹林の七賢の如きもの出て塵を把りて玄理を高談し浮誕を喜びて實務を卑み其風一世を風靡す是れ名教を顧みず道德を輕する原因となれり加ふるに匈奴の種族は後漢の末より今の山西の北部に雜居せる者あり漸く繁殖して魏の時には五部に分たれ晉の時には其勢頗強くおれり其他氐羌の種族は今の陝西の地方に雜居したりしかは郭欽の徒其族を塞外に移さむことを論じたりしか用ひられず是れ夷狄中原を亂る原となれりかく晉初の形勢は深く憂ふべき者ありしなり然るに武帝は吳を滅してより頗る淫佚に耽り遂に州郡の武備を撤し大郡に武吏百人小郡に五十人を置きたり是れ實に自ら其備を破りし者なり且つ内にはありては

夷狄の雜居

西漢外戚の跋扈

武帝の暗殺

惠帝の暗殺

賈后の跋扈

荀勗馮紇等寵を頼みて姦を伴ひ楊駿楊瑒楊濟等外戚を以て事を用ひ當時最名望ありし齊王攸(元帝)及び張華を斥け又京師に居りたる諸王を外に出す唯汝南王亮尙京師にありしが會武帝疾あり亮と楊駿と遺命して太子衷を輔けしめむとす然るに其疾甚しき及び楊后詔を矯めて専ら駿に任す亮をして國に就かしめたり武帝在位二十五年にして崩す太子衷立つ是を孝惠皇帝と云ふ(元帝)惠帝は誠に暗愚の主なりしが賈后は權姦邪智にして諸政に參與し遂に外戚と外戚との衝突を生じたり賈后先づ楊駿の謀反を誣ひて盡く其宗族を殺しまた帝に勸めて楊太后を廢し更に汝南王亮と太保衛瓘とをして政を輔けしめしが遂に楚王瑋をして亮と瓘とを殺さしめ又瑋を殺して張華裴頠を用ふされと政權は全く賈后の手にあり遂に太子遙を廢殺し又楊太后を弑したりかゝる暴戾なる行は導火となりて遂に一大破裂を見るに至れり趙王倫京師にありしが賈后の專恣を見て其嬖臣孫秀と謀り齊王冏と共に兵を率ゐて宮に

八王の亂

入り賈后を殺し又張華、裴頠を殺す。自から相國となり、問を出して許昌(河南許昌)を鎮せしめ、遂に帝を廢して自立す(六紀元年)。問依て河間王顥(長安)、成都王穎(鄴)と共に兵を起して、倫を平け、惠帝をして位に復せしめたり。顥は國に歸り、問獨京師に留まりしが、大に政權を專にす。顥依て兵を舉げて京師に向ひ、又長沙王乂(京師)に檄して、問を討たしめしに、乂遂に問を斬れり。然るに顥は乂の内にあるを惡み、顥と共に乂を攻めしが、東海王越、乂を斬りて、外兵を納れたり。顥、鄴にかへりて、皇太弟となり、僭侈甚しかりしが、越帝を奉して、顥を討ち、戰敗れて、東海(山東青州沂州府及比)に走れり。顥依て帝を奉して、鄴に據りしが、又京師に還り、更に長安に赴きて、顥に依れり。顥を廢して、豫章王熾を皇太弟となし、大に政權を專らす。是に於て、越兵を起して、長安を攻め、惠帝を迎へて、京師に還れり。既にして、顥皆殺されたりしが、は内亂初めて平きたり。是を八王の亂と云ふ(六紀五年)。

第二節 劉淵の興起及び西晋の滅亡

晋室の危殆

劉淵の興起

八王の亂の實に晋の藩屏を破り、且清談の風は益當時の士氣を弱め、匈奴の内地に雜居せる者は愈勢力を有す。晋室の危きを朽索にて大石を引くが如しと云ふべし。是の時、方り匈奴の中、一大俊傑の顥れ出てたるあり。是を劉淵と云ふ。淵の祖、單于於扶羅と稱し、父、左賢王豹と稱せり。淵曾て任子となりて、洛陽にありしが、父豹の死せしに及びて、左賢王となり、又建威將軍、五部の大都督となれり。成都王穎淵を表して、冠軍將軍となし、五部の軍事を監し、兵を率ゐて、鄴に居らしめたり。淵向きは崔游、師事し、同門生と謂て曰く、隨陸(隨陸)武なく、高帝は違ひて、封侯の業を立つる能はず。絳灌(絳灌)文なく、文帝は遇ひて、庠序の教を興す能はず。故に博く經史を通じ、能く武藝を習へり。蓋匈奴武勇の質を以て、支那文物の教を受けたる者と云ふべし。されは五部の豪傑及び北方の名儒、頗淵に歸する者あり。淵の從祖、劉宣族人は、謂て曰く、左賢王英武人、超えたり。天の此の人を生せしは、將に匈奴を興さむとするなるべし。今司馬氏の兄弟相殘ふ、是れ方り我が

劉淵兵を起す

先業を復する時なりと相共し淵を推戴せむことを謀り其由を淵に
 通す時し類は北方より敵を受けたりしかは淵還りて五部の兵を併
 せて來り援けむと乞ふ類依て淵を北單于とあし其兵を召さしめし
 か淵左國城(山西省永寧府にあり)に至りて大單于と稱し國を建て、漢と稱す時
 一我が紀元九百六十四年なり(三〇四年)
 劉淵は既し一世の俊傑あり加ふるし其部將劉聰劉曜王彌石勒皆一
 時の英物たるを失はず聰ハ淵の子なり驍勇しして經史し通す曜は
 淵の族子しして文武の才あり王彌は東萊の人しして任俠を以て名
 あり騎射を能くす石勒は羯人しして曾て人奴となり牧羊をなし、
 が天資磊落しして勇略ありかゝる諸豪の集りしをなれば漢の勢の
 盛なるハ怪むし足らざるなり惠帝在位十七年しして崩し皇太弟熾
 立つ是を孝懷皇帝と云ふ(六世紀)劉淵も亦帝と稱して平陽(山西省)に
 都し諸將を遣はして來り寇さしむ晋の太傅越將を遣はして拒き戰
 へしめしが互し勝敗あり既しして劉淵殂し太子和位し即きて聰を

劉淵王彌石勒の輩出

漢の入寇

殺さむとす聰依て和を弑して自ら位し上り又劉曜石勒王彌等を遣
 はして來り寇さしむ漢兵洛陽し迫るし及び越疾し罹りて軍中し薨
 せしかは王衍等其喪を奉して還らむとし大し石勒し破られ晋の宗
 族皆擒となれり尋て劉曜王彌等洛陽を陥れ懷帝を執へて平陽し送
 れり懷帝の姪秦王業長安し入りて行臺を建てたりしが懷帝の殺さ
 れたるし及びて位に即く是を孝愍皇帝と云ふ(七世紀)愍帝専ら麴允
 と索綝と軍國の事を委す既にして劉曜の來りて長安を圍むし及
 び城中食盡きて守る能はず愍帝は出て降り允は自殺し綝は殺され
 たり愍帝平陽に送られて殺されたりしかは司馬懿の曾孫瑯琊王睿
 建康(江蘇省)にありて帝位に即く是を東晋の元皇帝と云ふ(七世紀)時
 に劉聰は已に河北の地を據有して土廣く人衆く其勢甚盛なり又氏
 種の李雄も向きし流民を以て蜀に入り國を建て、成と稱し又鮮卑
 の慕容廆は大棘城(遼寧省錦州府)に據りて遂し鮮卑大單于と稱し鮮卑
 の拓跋祿官は上谷(直隸省)の北し據りて可汗と稱す故し東晋は東南

漢兵洛陽を下す

漢兵長安を下す

戎狄の割據

一帯の地を有するに止れり

第三節 東晋の中興及び王敦蘇峻の亂

元帝の中興

東晋の元帝纔に江東に於て國祚を繋ぎしも最早夕陽殘日の感なき能はず祖逖の徒慷慨の志を以て中原の恢復を企てたりと雖も内には王敦の亂起りてまた北顧の遠なかりしは恨ても猶餘りある事を初め元帝王導を用ひて機政を掌らしめ其從兄王敦を用ひて征討を總へしめたりしかは王氏の勢漸く強く群從子弟皆顯要の地に列す當時王と馬と天下を共しすと云ふ者ありき後王敦鎮東大將軍となり江楊荆湘交廣六州の諸軍事を都督して武昌あり是より其勢益強く且宗族の盛かるを恃みて竊に不臣の志を抱きたり然るに豫州の刺史なる祖逖と梁州の刺史なる周訪とを憚り敢て發せざりしが二人相つきて死するに及び又忌憚する者なく反謀益切なりき元帝劉隗刁協を引ききて腹心とせし稍王氏の權を抑す敦の參軍に錢鳳沈充と云ふ者あり凶狡にして事を用ふ遂に敦を勸めて兵を擧げ劉

王氏の強盛

王敦の反

王敦を平く

隗刁協を誅せむとするを名となし進みて石頭城(江蘇省南京市)に至れり元帝王導を前鋒大都督となし諸將を率ゐて出て戰はしめたりしが皆大に敗れて還れり元帝已むを得ず百官を遣はして敦を見えしめ遂に大赦して敦を丞相都督中外諸軍事江州の牧とす敦尋て武昌に還りしが暴慢益甚しく且錢鳳沈充の徒威權を恣にしたりしかは識者其將に敗れむとするを知れり元帝憂憤の餘病を發して崩し太子紹立つ是を明皇帝と云ふ(紀元二九)時王敦帝位を篡せむを謀りて姑熟(安徽省太平府)に移り自ら揚州の牧を領す明帝王導及び庾亮温嶠の徒と謀りて王敦を討たむとす會王敦病に罹りしが其兄王含をして建康に向はしむ明帝自ら奮戰して大に含の軍を破れり敦含の敗を聞きて大に怒り病を勉めて起たむとしたりしが遂に死しぬ是に於て官軍大に其軍を破り錢鳳沈充等を誅し悉く内亂を平けたり明帝在位三年にして崩し太子衍立つ是を成皇帝と云ふ(紀元五九)成帝の時王導庾亮と共に政をあたへしが又蘇峻の亂起れり初め王導

庾亮の執政

は寛和を以て頗衆心を得たりしが庾亮の事を用ふるゝ及び其性甚偏狹なりしかは法を任せて物を裁し頗人心を失へり蘇峻曾て歴陽の内史を以て王敦の亂に頗功ありしが亂平きて歴陽(安州府)あり強兵を擁して竊に異謀を貯へたり庾亮依て峻を召して大司農となし陽に尊重の意を表し暗に其兵權を奪ひて異謀を止めむとす蘇峻も亦事を経たる者いかで其意を知らずしてあるべきされは其召に應せず遂に兵を擧げて反し姑熟を陥れ官軍を破り進みて臺城に入り關を犯し遂に成帝を石頭城に移す庾亮尋陽(江州府)に走りて温嶠に依り共し兵を起して峻を討たむとす時陶侃征西大將軍となりて武昌にありしかは嶠等侃を邀へて盟主となし峻を討つを計れり官軍遂に進みて賊兵を破り峻を殺して其亂を平けたり(元元)陶侃の卒するゝ及び庾亮代りて武昌を鎮し遙に朝權を執れりかく東晋に於ては内亂相つさしかは西北を圖る邊なかりしが蘇峻の平定するゝ及び稍回復の企をなせり依て先づ西北諸國の形勢を述べて東

蘇峻の反

蘇峻を平く

北方回復の企

晋回復の事業に及ぶべし

第四節 西北諸國の形勢及び桓温の功業

漢は劉聰の西晋を滅し、より靳準等事を用ひて政綱大に破れたり聰殂して太子粲立ちしが靳準粲を弑し又劉氏の諸族を殺し自ら大將軍漢天王と稱す時劉曜は長安にあり石勒は襄國(直隸省臨漳縣)にありしが共に兵を起して準を討つ準の黨準を殺して劉曜に降りしかは曜遂に位に即きて長安に都し國號を改めて趙と稱す(是を前趙)然れと劉曜は石勒を忌み勒も亦曜の下たる者にあらずれば二人の衝突は避くべからざるゝ至り曜が石勒の使を殺すゝ至り勒は遂に曜と絶ち別國を建て、趙と號し(是を後趙)襄國に都したりかくて兩國互に交戦ありしが勒遂に劉曜を虜にして其國を滅し其勢甚盛なり氏王蒲洪、羌酋姚弋仲等皆趙に降り勒遂に帝と稱し在位六年に石勒既に殂して太子弘立ちしが丞相石虎(後趙の)遂に弘を弑して自立

漢の亂

劉曜石勒の亂

石勒の亂

石虎の凶暴

後趙の亂

前燕の盛衰

前秦の興起

凉代の分崩

し移りて鄴(河南衛輝縣)に都す虎奢侈を好み残忍を喜び大に宮室を作り又諸子を殺し遂に世を太子とす時姚弋仲は六夷大都督となり蒲洪は雍州刺史となりて秦雍の軍事を都督す虎死して太子世立ちしが冉閔竊に石遵を説きて世を廢して自立せしめ又遵を説きて蒲洪の都督を罷めたりしかは洪使を遣はして晋に降り冉閔遂に遵を殺し又其弟鑑を殺して自立し國號を魏と稱す(紀元一〇一〇年)是の時燕の勢は頗盛なるに至れり初め慕容廆死して子皝燕王と稱し西段氏を破り南趙兵を卻け東高麗を伐ち北宇文氏を滅し其勢漸く強かりしが後趙の亡びし時は皝既死して子儁位あり遂に慕容恪等を遣はして冉閔を滅し都を鄴に移して帝と稱す(紀元一〇一二年)時蒲洪姚弋仲は各關中を據らむとして相争ひたりしが洪遂に弋仲を破り姓を苻と改む既して洪殺され其の子健長安に入りて國を大秦と稱し遂に帝と稱せり(紀元一〇一二年)弋仲も亦卒して子襄其後を嗣きたり又凉州の地には張氏の據れるあり(紀元一〇一二年)代には拓

拔祿官の孫什翼健の據れるあり是を當時北方の形勢となす

東晉北方を經營す

桓温の經歷

桓温漢を討つ

顧みて東晋の方を按するに庾亮は中原を回復せむとして果さずして死し其弟翼代りて武昌を鎮す翼常に趙を滅し成を取るを任となし燕と涼とを約して大舉せむとし類に北征の企をなししが志成らずして死しぬ時晋の成帝より康帝を経て穆帝の世に至れり(紀元一〇一五年)會稽王昱撫軍大將軍錄尚書事となり桓温を擧げて庾翼の代とす桓温は桓彝の子にして豪爽にして膽略あり最功名の心に富めり曾て曰く大丈夫芳を百世に傳ふ能はされは又當に臭を千歳に遺すべしと其人となり此の如し時成の國を漢と號し李勢位ありて政を修めさりしかは温遂に兵を率ゐて西征し漢を滅したり(紀元一〇七年)是より温の威名甚盛にして隱然朝廷を凌ぐ勢あり會稽王昱殷浩を擧げて温に抗すされと浩は庸常の士にして温の敵はあらざるなり是の時趙は冉閔の亂ありて大に亂れたりしかは温諸將を遣はして北方を經營せしむ既して殷浩も亦兵を出して進取を計りしが功

桓温を伐つ

をなさき且秦を伐ちて破られたり温依て遂に上請し浩を廢して庶人となす是より中外の大權皆温に歸するに至れり温又秦を伐ちて苻健を長安に圍みしが遂に城を抜く能はずして引き還せり尋て温また姚襄を擊破し洛陽に入りてかへり(紀元年)穆帝崩して哀帝立ちしが桓温の勢益盛にして類に重職に上り移りて姑熟を鎮す哀帝崩して其弟瑯琊王奕立つ時燕の兵屢來り侵し、かは温師を率ゐて北征し慕容垂に破られ威名頓に挫けたり是に於て廢立をかして威權を立てむと欲し遂に帝を廢し會稽王昱を立つ是を簡文皇帝と云ふ是より温の勢また盛なり簡文帝在位纔に一年にして崩し太子昌明立つ是を孝武皇帝と云ふ(紀三年)桓温稍不臣の志を抱きて不穩の行ありしも遂に疾に罹りて死しぬ時北方の形勢如何なりしか更に次節に述ぶべし

第五節 前秦の隆盛及び秦晋の交戦

初め前秦王苻健殂して太子生立ちしが姚襄既に桓温に破られ更に

桓温の廢立

桓温を伐つ

苻堅の自立

王猛の任用

苻堅前秦を滅す

關中を圖らむとし進みて黃落(陝西宜陽)に據れり生依て苻堅を遣はして襄を攻殺す襄の弟萇遂に秦に降り生狂暴なりしかは堅遂に生を弑して自立す堅は健の弟雄の子にして智勇に富み頗る學藝に通す堅の臣に王猛と云ふ者あり剛明にして謀略あり曾て華陰山に隱居したりしが桓温の秦を伐ちし時短褐を着て往謁し氣を捫て當世の時務を談す温の歸る時共に江東に伴はむとしたりしが猛從はず遂に堅に仕へたり堅の猛を召見するに方りて一見舊の如く一歳の中に五び官を遷し恩遇益厚く秦の勢も亦漸く盛なりき(紀七年)是の時燕王儁已に殂し子暉立ちしが慕容恪弟垂と共に扶翼して國威を振へり恪死して後、暉専ら慕容評に任す垂の桓温を破りて威名の盛なるに方り評竊に垂を除かむとす垂依て其子弟と共に秦に出奔す堅初め恪と垂とを憚かりて燕を攻めざりしが是に至りて遂に燕を伐ちて其國を滅せり(紀元年)堅王猛を冀州の牧とかり關東六州の軍事を都督せしめ尋て丞相となす時に年三十六なり猛農桑を

王猛の死

符堅前鋒を滅す

鮮卑代を滅す

謝安の執政

勸め軍旅を練り官は其才に當り刑は其罰に當り秦國大に治まれり
 既にして猛病に臥し終に臨みて堅に告げて曰く晋は江南に僻處す
 と雖と正朔相承けて上下安和せり故に臣の死後、晋を圖るおかれ
 唯鮮卑(慕容)西羌(氐)は私の仇敵なれば宜く速に除きて社稷を安せら
 るべしと猛既に薨たりしかば堅自ら兵を將るて涼を伐ち張天錫
 を下して其國を滅す(前凉亡ぶ紀元二〇三六年)又代を伐つ時に什翼犍の庶長子寔
 君諸弟を殺し又父を弑す堅依て進みて雲中に入りて寔君を捕殺し
 代を分ちて劉庫仁と劉衛辰とを與ふ蓋其相制せむを謀りしなり
(紀元一〇六年)堅既して諸國を平け東夷西戎の入貢せる者六十餘國あり遂に
 意滿ち志驕り王猛の遺言を用ひずして晋を伐つに至れり
 晋は桓温の死後謝安相となりて政を執れり安寛厚にして度量あり
 能く沈重を以て物情を鎮す時、秦の勢大に盛なりしかば孝武帝文
 武の才ある者を舉げて北方を鎮禦せしめむとす謝安其姪玄を薦め
 たり玄廣陵(江蘇州府)を鎮し劉牢之を得て參軍とあす將卒精銳にして

苻堅の執政

謝安の執政

肥水の戦

北府の兵と號す(紀元一)秦の兵連年晋の境上を寇し、が屢勝敗あ
 りて全く志を得る能はず苻堅依て大舉して晋を攻めむとし群臣を
 集めて議せしむ群臣多く其非を論せしむ唯慕容垂と姚萇と、南征
 を勧めたり堅遂に中外の諫を聽かず戎卒六十餘萬騎兵二十七萬を
 發す是れ皆戰を好まざるの將卒にして且各種の種族を混せる者な
 りされば勝敗の數卜せずして既にして明かなるべし晋は謝石を征討大
 都督となし謝玄を前鋒都督となして秦軍を拒かしむ其部伍精整な
 りかくて兩軍肥水に會するに及ひ秦の軍大に破れて潰散し堅は纒
 に長安に遁れ還るを得たり是を肥水の戦と云ふ(紀元三三四年)此の勝敗の
 結果は大に注意すべき所なり

第六節 北方の分裂及び東晋の衰亂

肥水の戦は實に兩國に大なる影響を與へたり今先づ秦の方を説き
 て然る後、晋に及ぶべしさて苻堅は散々の躰にて長安に遁け歸り
 しより向き、天下を動かさし、勢も今は地を墜ちて國內に雜居せる

後漢西漢後漢の東部

符堅の東漢

各種の種族をも制するに能はざるに至れりかゝる程に乞伏國仁は
 叛きて隴右(甘肅省蘭州府)に據り翟斌は兵を起して洛陽を攻めたり
 堅依て慕容垂をして斌を討せしめしに垂も亦た叛きて斌と合し遂
 一燕王と稱し後中山(遼寧省)に都せり(慕容垂)慕容冲ハ平陽に起り
 慕容泓は華陰(陝西省)に起れり尋て冲は泓の兵を併せ進みて阿房城
(陝西省西安府)に據りて帝と稱す(慕容冲)姚萇も亦兵を北地に起して秦王
 と稱す(姚萇)既して冲長安を攻めたりしかを符堅五將山に
 奔し遂に後秦の兵に執はれ憐れなる最後を遂けたり是れ實に我
 が紀元千零四十五年にして肥水の戰を距ること纔に二年なりとす
(三國志)

符堅既に死して其子苻丕晉陽にありて帝と稱し檄を四方に傳へて
 姚萇慕容垂を討たむとす時に西燕主慕容永(慕容冲の後漢統帥あり)東歸せ
 むとして路を丕にからむとを求めしに許されず遂に丕と戰ひて其
 軍を破り長子(山西)に據りて帝と稱す丕は南走して晉の將を殺さ

西漢後漢の東部

後漢の東部

西漢七下

南漢の東部

れたり是に於て丕の族子登南安(甘肅省)にありて帝と稱し屢後秦と
 戰へり時一後秦の姚萇は長安にありて帝と稱せしが萇殂して其子
 興立ち遂に登を殺したり登の子崇熒中(甘肅省)に走りて帝と稱す時
 一乞伏國仁の子乾歸隴西にありて秦王と稱せしが(慕容冲)遂に崇を
 平けたり是に於て苻氏の族全く絶えよき(五胡一)
 初め拓跋什翼健の孫一珪と云ふ者あり代の滅びし時尙幼かりしか
 は母賀氏珪を携ひて劉庫仁に依れり庫仁の子顯珪を殺さむとした
 りしかを珪賀蘭部に奔りて更一其舅に依れり既して諸部の大人
 珪を推して代王となし尋て國を魏と號す(慕容垂)是れ苻堅の死した
 る翌年一あり爾後其勢益盛なりき時一後燕主慕容垂西燕を滅し太
 子寶一命して魏を伐たしめしが大に拓跋珪を破られたり既して
 垂殂して寶位一あるに及ひ珪燕を攻めて中山を圍みしかハ寶龍城
 へ出奔し遂に蘭汗一弑されたり慕容盛依て蘭汗を殺して自立す時
 一慕容德滑臺(直隸省)に據りて燕王と稱し遂に晉の廣固(山東省)を取

後涼南涼北涼
四涼の興起

りて帝と稱したり(紀元一〇六〇年)西方ありては符堅の將呂光涼州を據りて涼天王と稱し(紀元一〇五六)禿髮烏孤西平(甘肅省)を起りて西平王と稱せしが其弟傳檀を至りて涼王と稱す(紀元一〇六二年)沮渠蒙遜張掖(甘肅省甘肅州)を據りてまた涼王と稱す(紀元一〇六〇年)かく諸種の種族各地を起り北方の土地は四分五裂するに至れり

東晉の苟安

晋は肥水の戰の後謝安其勢を乘じて中原を回復せむと計りしが孝武帝の弟會稽王道子政を專して謝安と隙あり安遂に外に出て、薨し回復の企も全く空くなれり時北方は頗紛亂を極めたりしが晋は幸に苟安を得たりしかハ武帝道子と酣飲を事とし政治を勉めず晋の政紀漸く亂れたりかくて武帝また道子と隙を生じ王恭殷仲堪を引きて助けし道子は王國寶等を用ひて相争ひしが武帝は遂に張貴人を弒せられたり(紀元一〇六一年)是れ符堅の死後十一年あり彼れは囚虜となりて武人の手死し此れは酒色に耽りて婦女子の手

孝武帝の末路

道子の專政

死す其跡異なりと雖も其終りを善くせざるは一なり
孝武帝既弒せられて太子德宗立つ是を安皇帝と云ふ道子大傅となり王國寶等政を專したりしかハ王恭を京口(江蘇省鎮江府)より殷仲堪は江陵(湖北省荊州府)より共兵を擧げて建康に向ふ道子依て國寶を斬りて和を講じたりしが後王恭はまた兵を擧げ劉牢之を殺されたり是より道子政を其子元顯に委して遂に孫恩の亂を養成し更に劉裕の興起する機會を與へたり

孫恩の亂

第七節 劉裕の興起及び後魏の統一

劉裕の經歷

劉裕は彭城の人なり家貧にして賣履を業となす然れど勇健にして大志あり會元顯政をあたて大に東方諸郡の人心を失ひしかハ妖賊孫恩海島より出て亂を作す裕時劉牢之の軍に屬して賊を討ち大に勇名を著す(紀元一〇五九年)是れ其名を知られたる始めにして是より後桓玄を平け南燕を滅し益勢力を有するに至れり
桓玄は桓溫の少子なり曾て荊州をありて殷仲堪と共に兵を起した

劉裕を平す

りしが尋て仲堪を攻殺し遂に荆州の刺史となり後江州の刺史と
かり荆江等八州の諸軍事を都督するにあたり兵を擧げて反し遂に
建康に入りて元顯及び道子を殺す立自ら丞相となり楚王に封じ遂
に安帝に迫りて位を譲らしめたり時、劉裕は京口にありしが玄の
僭逆を見て何無忌、劉毅、諸葛長民等と兵を起して玄を討つ玄大敗し
て江陵に歸り再兵を集めて來りしがまた劉毅に破られ逃れて蜀に
入らむとして殺されたり劉裕依て安帝を位に復し侍中車騎將軍都
督中外諸軍事となり其勢益盛なり(紀三〇)

劉裕を平す

時、南燕主慕容徳の養子超位にありしが屢晋の邊境に寇す劉裕依
て大兵を率ゐて南燕を征し廣固を拔きて超を執へたり然るに孫恩
の餘黨盧循、徐道覆等劉裕の虚に乗じて兵を起し番禺(廣州府)より出
て、長沙(湖南府)、南康(江州府)等を下し何無忌を殺し劉毅を破り將に
楊子江を下りて建康を襲はむとす是に於て安帝急に裕を召し還す
裕既、南燕を滅して還り盧循、徐道覆を破りて悉く其亂を平けたり

劉裕を平す

(七元一)かく劉裕の功の大なりしは遂に篡立の基とされり然れど劉
裕の猶忌み懼るゝ者は同功の諸豪と晋の宗族あり依て事、托して
劉毅を攻殺し又故なくして諸葛長民を殺し更に晋の宗族司馬氏の
徒を驅逐す其徒多く後秦に走れり

北方諸國の形

是より先き後秦主姚興は既に後凉を併せ後秦の將赫連勃勃は朔方
にありて大夏天王と稱し(紀元一〇六七年)尋て後燕の臣馮跋は後燕に代
りて自立す(紀元一〇六八年)南燕は晋に滅され南凉も亦西秦に併せられ
たり(七元一)故に北方の諸國は當時後魏、北燕、大夏、北凉、西凉、西秦、後秦
のみ而して後秦最晋に近きか故に晋の宗族は其國に走りしかり是
に於て劉裕其亡人を容れたるを名とし後秦を伐ちて威權を立てむ
と欲し王鎮惡、檀道濟等を率ゐて北征し遂に後秦を滅して還れり(紀
元一〇七〇)是より其勢益盛しして相國宋公となり遂に安帝を弑して其弟
徳文を立つ是を恭皇帝と云ふ裕遂に其位を篡す是を宋の高祖武皇
帝と云ふ東晋凡十一世百四年にして亡ひぬ(八元一)

劉裕を平す

劉裕を平す

北方諸國の滅

劉裕の後秦を滅して歸る。及び赫連勃勃は長安に入りて帝と稱し沮渠蒙遜は遂に西涼を滅すかく北方の諸國漸く減少し遂に後魏統一の基を開きたり時拓跋珪既に再傳して燕に至れり是を太武帝と云ふ太武帝勇武にして果斷に富み遂に北方を統一せむと計り會赫連勃勃を殂して太子昌位にありしかは遂に夏を攻めて昌を擒にす昌の弟定平涼に據りて帝と稱し西秦を攻めて其王乞伏暮末を滅し更に北涼を攻めたりしが吐谷渾に執へられて後魏に送られたり(紀元一〇九一年)後魏遂に北燕を滅し(紀元一〇五一年)又北涼を滅し又吐谷渾を逐へ柔然を破り遂に北方を統一す時に我が紀元千零九十九年(西紀元九百九十九年)是より後魏を北朝となし宋を南朝となし茲に南北朝を現出するに至れり

第八節 宋魏の交戦及び蕭道成の篡立

初め宋の武帝崩して太子義符立ちしが暴虐なりしかハ群臣之を廢して更に宜都王義隆を立つ是を文皇帝と云ふ(紀元四三九年)文帝後魏の晉

宋魏の關係

て滑臺虎牢を取りたるを以て回復を計り將を遣はして北征し虎牢滑臺を復し碣磔(山東省東昌府在平縣の西)を取りしが魏また來り寇して碣磔虎牢洛陽を取り後十餘年無事なりしが王玄謨と云ふ者あり文帝に勸めて後魏を伐たむとす沈慶之曰く耕事は當に奴に問ふべし織事は當に婢に問ふべし今何を以て國事を白面の書生に詢かるやと然るに文帝は其諫をさかす遂に玄謨を遣はして碣磔を取り滑臺を圍まむ時以後魏の太武帝既に北方を統一し其勢頗盛かりしが宋の河南の地を取れるを聞きて大に怒り大舉して來り寇す玄謨滑臺の圍を解きて退走せり太武帝進みて彭城を圍みしが抜けず遂に楊子江上に至りて江を渡らむと聲言す宋の建康の人民大に驚きて逃げ避く者多かりしが太武帝遂に江を渡らむして師を班したりされど江北六州の地は侵掠を受け人民は鋒鏑に膏し家屋は兵燹に罹り春燕林木に巢ふに至れりと云ふ其の荒敗の狀想見するに足るべし(紀元四三九年)かくて魏の太武帝は翌年に至りて宗愛に弒せられ宋の文帝は

宋魏の關係

宋魏の關係

魏後宋魏の國

三年を経て太子邵に弒せられたり其終を善くせざりしは相同ト後魏にては文成帝位に即きて宗愛を族誅シ宋にては武陵王駿邵を誅して自立す是を孝武皇帝と云ふ武帝崩トたる後太子子業位に即きしが淫虐暴戾甚しかりしかは阮佃夫等之を弒して湘東王暕を立つ是を明皇帝と云ふ(魏元二年)明帝の時また兵を淮北に輝かさむと魏兵と戦ひて利あらず悉く淮北の地を失へり時蕭道成と云ふ者あり漸く勢力を有するに至れり

蕭道成の廢立

蕭道成は蘭陵の人あり天資深沈にして度量あり且頗文學に通ず道成曾て南兗州の刺史となりて淮陰(淮陰郡)に在り博く賓客を養ひて豪俊を集めしが如きは其志の存する所を見るべきなり後明帝の病める時道成は袁粲褚淵沈攸之と共に命を受けて政をなし其崩するに及び太子昱を立て帝となす(魏元二年)時桂陽王休範兵を擧げて叛きしが道成兵を率ゐて出征し遂に休範を滅す是より道成の勢漸く盛にして遂に中領軍とされり帝暴戾にして殺虐を恣にしたり

蕭道成の廢立

蕭道成の廢立

しかは道成袁粲褚淵と廢立の事を謀れり袁粲は大に其非なるを論せしむ褚淵は黙して可否を言はず道成遂に帝を弒じて安成王準を立て是を順皇帝と云ふ(魏元二年)かく道成は廢立をおしたりしかは他の従はざる者は勢黙して過ぐべきにあらざる袁粲は石頭城に據り沈攸之は江陵に起れりされと皆敗滅し餘は褚淵の徒にして抗敵の意なき者のみ道成遂に相國齊王となり順帝を廢して自立したり是を南北朝に至りては社會の規律大に破れたるが如し彼の弒逆の多きと春秋の時譲らず南朝は二十四君にして終りを善くせし者は十君に過ぎず北朝も二十四君にして終りを善くせし者は十四君に過ぎず且南朝の放縱淫佚の君最多く出てたりかゝる現象は偶然に生ずる者にあらず願ふに北朝は夷狄より起りし者にして聖人の道を知る者少く南朝は東晉游惰の風を受けて心を學校教育に注きたる者稀なり且前秦に衛道安あり後秦に鳩麻羅什出てよよりは佛教

南北朝社會の因襲及び其原

益盛にして南北朝の時に至りて殊に其盛を極めたれば古來行はれたる儒教の秩序を敗りしを少なからず是れ彼の現象の生じたる所以なるべし

第九節 孝文帝の政治及び魏齊の交戦

孝文の即位

齊の宋を篡せし時後魏にては孝文帝位あり初め文成帝より一傳して獻文帝に至りしが位を太子宏に譲り是を孝文帝といふ(紀元一)帝天資聰明にして文學を好み遂に支那の先聖を追慕し政をなすに全く支那の制度によりて鮮卑固有の風を去れりされど官制を改めて南朝に則り中書尙書門下の諸省を置きたるが如き刑法を改めたるが如き或は戸籍を作り或は學校を立て或は樂章祀典を定め或は籍田養老の禮を行ひたるが如き或は同姓の婚姻を禁じたるが如きは頗る觀るべき者あり然れと晩年及びては支那の風習を學びたるに甚しきに至りし者あり彼の人心は遂て平城の都を洛陽に遷

孝文の改革

孝文大に南朝の風を慕す

したるが如きは既に策を得たる者にあらず其國服を廢して南朝の服を着け其頭飾を改めて南朝の風を模し甚しきは四十歳以下の者は其國語を用ふるを禁じ更に拓跋の姓を改めて元とせし諸の複姓を單姓とせし又諸臣をして新に中州の名族を娶りて妻とし前妻を妾とせしめたるが如きは實に支那に心酔せる者と云ふべし且孝文帝は既に支那の文學に深かりしかは其國人は共し談すべき者なく遂に支那の儒生名族を親近するに至れりかゝる行に就きては常に反對の徒あるを免かれず故に宗室勳舊皆悦はせず太子も亦意見を同くせず其國服を着けて舊都に歸らむとし兵士は舊土を戀ひて叛を謀り然るに孝文帝は確然として動かす太子を殺し兵士を平けて改革の政を實行するを勉めたり蓋其國風を去るは暗に衰頹を來すの基たるを知らざりしが如し孝文帝既に國內の政を改革し且海内を一統せむとの企を抱きたり是れ實に齊魏交戦の基なりと

孝文南征の企

晉書の基立

孝文の附征

孝文の遺體

帝の崩せる後、相つきて立ちたる二帝を弑し、又多く高帝武帝の子孫を殺して自立す。是を明皇帝と云ふ。(五元一)後魏の孝文帝は久く侵略の志を抱きて、其名なきに苦みしが、明帝の篡弑をき、其罪を鳴して齊の地を侵し、鍾離(安徽會縣)、壽陽(安徽壽州)等の城を攻めしが、克たせしめて還れり。尋てまた大舉して齊を侵し、南陽(河南南陽)、新野(河南新野)を下し、義陽(河南新野)を圍みしが、遂にまた克つ能はずして、圍を解きたり。會齊の明帝崩して、太子寶卷立ちしが、孝文帝は齊の俄に勝つべからざり、且親ら病に罹りしを以て、人の喪を伐たせと稱し、遂に引き還れ、齊の將陳顯達、崔慧景、裴叔業等魏を伐ちて、諸郡を復せむと謀りしが、成らず。魏もかくして、孝文帝も亦崩し、北朝の形勢遂に一變するに至れり。(五元一)

第十節 蕭衍の建國及び後魏の分裂

齊帝寶卷は南朝昏虐の主の一人なり。(五元一)六貴の徒、(五元一)寵を受けて權を專にしたりしが、後皆事によりて殺されたり。寶卷の

蕭衍の建國

蕭衍の建國

益賊虐を恣にする、及び陳顯達、崔慧景前後兵を起して、建康を襲ひしが、克たせして死し、裴叔業も魏へ降りしかく、宿臣名將皆絶えたり。蕭衍は齊の疎族なり、英達にして文學に通ず。曾て荊州の刺史となりて、襄陽にあり、竊に齊室の亂れむとするを知りて、備をなす。兄蕭懿が慧景を破りて、尙書令となりし時、竊に廢立を勧めたりしが、懿さらず。遂に寶卷を殺されたり。衍依て兄の死を名として、兵を起す。時に南康王寶融も兵を起して、衍と連和し、遂に帝と稱す。是を和帝と云ふ。ふくて、衍は兵を督して、東に進み、諸城を下し、遂に建康を圍む。時に城中寶卷を弑して、外兵を導きし者あり。衍依て城に入るを得たり。是より衍の勢甚盛にして、相國梁王となり、遂に和帝をして位を禪らしめたり。是を梁の高祖武皇帝と云ふ。齊凡七世二十三年にして亡びぬ。(六元一)梁の武帝の立ちし時、後魏に於ては、孝文帝既に崩して、宣武帝位にあり、宗室を疎し、佞倖を信したるが上、孝文帝改革の結果は、漸く慄悍

孝文帝の除

武士の除

の風を去りて優柔に陥り魏の勢は始めて衰ふに至れり宣武帝崩して太子詔立つ是を孝明帝と云ふ(元一)明帝幼にして胡太后政を專にし武士の跋扈甚しく尙書の省を侵し將軍の第を燒き將軍父子を火中に投せるが如きとありしも朝廷の威既にて衰へてまた如何ともする能はき纒に其凶強八人を斬りて其餘を赦せり是れ實に紀綱なきに異らずされば森雄の慧眼既に魏の亂れむとするを知りし者あり是を高歡とす(元一)

高歡の除

高歡は懷朔鎮の人なり任俠にして智略あり嘗て函使となりて洛陽に來りしが武士の暴亂を見て家に歸り悉く家資を散じて賓客に結ぶ或人其由を問へば輒ち曰く宿衛相率ゐて大臣の第を焚くも敢て禁討する者なし天下の事知るべきなりと果してその眼識の如くなり其後朝廷に於ては元父の太后を幽したるをありしが太后又又を誅して政を執り地方は六鎮の争亂ありて俄に平くる能はず魏の勢益衰へたり

地方の除

爾朱榮の除

爾朱榮の除

高歡の除

かくて爾朱榮と云ふ者六鎮の亂を平けし功を以て六州の大都督となり兵を擁して晉陽にあり高歡竊に榮に兵を舉げて君側の毒を清めむを勸めたり會太后帝を弑して元劍を立てしは榮遂に洛陽に至りて太后と劍とを弑し孝莊帝(元一)を立て太傅となりて晉陽に還れり後北海王顥亂をおし孝莊帝を河内に追ひしかは榮兵を發して顥を破り孝莊帝を洛陽に歸せり是よりその威權益盛にして遂に天柱大將軍となり異謀を蓄ふ孝莊帝依て親ら榮を殺し、ら榮の族黨大に怒り兵を舉げて洛陽に入り孝莊帝を弑し長廣王暉を立てしおまた暉を弑して節閔帝(元一)を立て是れ高歡に取りては實に風雲の機なりしなりされは高歡は賊を討するを名となし兵を信都に起して爾朱の族黨を平け節閔帝を廢して孝武帝(元一)を立てたり(元一)是より歡の勢力頗に強く大丞相となりて晉陽に居れり是れ一の爾朱榮去りてまた一の爾朱榮の來を以て異ならずされば孝武帝も心平ならず晉陽を伐たむを謀れり歡依て兵を率ゐて來りし

宇文泰の興起

かば孝武帝は長安より出奔して關西の大都督宇文泰に依れり
宇文泰は宇文部の人なり豪爽にして識量あり曾て爾朱榮の統軍たりしが後秦隴の亂を平けて關西の大都督となれり孝武帝の來り依れるに及び帝を奉して長安に都す是れ實に其志を得る始めなり
高歡は孝武帝を追ひけるが及はせ依て別に孝靜帝を擁立して鄴に都を是より魏は東西に分れ高歡宇文泰の兩雄互に雄を争へり蓋後魏の道武帝より是に至るまで十二世百四十五年にして我が紀元千百九十四年に當れり(五三三紀元)

第十一節 侯景の叛亂及び陳霸先の興起

魏武の叛亂

かく北方の衰亂せるより南方は頗事なかりしが梁の武帝は大に佛教に心酔し屢寺院を幸し身を捨て福利を求め又魏を以て宗廟の牲牢に易え或は槃若經に注し或は達摩と佛理を談し頗政務を怠り彼の兵を起し、時の意氣は自ら消耗するに至れりかゝる程に端なく一大騷亂の起れるあり是を侯景の變となす

侯景の叛亂

侯景初め爾朱榮の將たりしが高歡の興るに及びて歡に歸す人となり癖足にして權詐に富めり曾て東魏の將とありて河南の地を鎮す高歡終に臨みて其子澄に謂て曰く侯景は飛揚跋扈の志あり汝の能く御する所にあらず景に敵すべき者は唯慕容紹宗のみと景も亦常に曰く高歡死せば我れ小兒輩の下たる能はずとその後歡の死するに及び景は果して河南の地を以て西魏に降り又更に梁に降るを求めたり梁の其降を許すと否とは實に治亂の機なりしかば廷議一おらき或は今國內久く事なきに其降を容れおは是より事端を多くするに至らむと言ふ者あり或は坐して河南の地を收むる利ありと言ふ者あり武帝遂に其後説を容れて景を河南王と封じ蕭淵明を遣はして東魏を伐たしめたり東魏慕容紹宗を將となし遂に梁軍を破りて淵明を虜とし又侯景を破りしかば景南より走りて壽春に據れり武帝又景を南豫州の牧となす既にして東魏より和を梁に求めしが或は曰く是れ景をして自ら疑はしめて亂を作さしめむとする策あら

侯景に附す

梁東魏を伐つ

梁東魏と和す

侯景の反

建康の海城

侯景の叛

ひと實し東魏の意は茲よりありし者なるべし然るに武帝は或者の言を聽かずして其成を許したり是に至りて景は自ら其地位を危まさるを得ず又己を東魏に渡さむとする意あるかを疑はざるを得ず其危疑の念を遂に意を決して兵を起し江を渡りて建康を圍みたり四十餘年兵革を見ざりし都城の民も今は攻圍の中において敵を防かさるを得ざるに至りしかく四方より援軍の來り集まりし者あをし皆侯景の兵に破られて城中と連絡する能はず建康圍を受けしよを五ヶ月にして陷る武帝は景の制抑を受けて飲膳も意の如くならず遂に年八十六にして崩じぬ在位四十八年なり太子統は先きに薨せるを以て景更に其弟綱を立つ是を簡文皇帝といふされと政權皆景の手にありて帝は虚器を擁するのみなりき(明紀一三)

かく梁室傾危の際よりありて梁の宗族なる湘東王繹は江陵にあり岳陽王詵は襄陽よりあり河東王譽は長沙にあり互に攻戰を事とし宗社の覆没を顧みざりしは亦道德陵夷の一斑を見るべし繹遂に譽を攻

陳霸先の義

陳の亂

殺し又管を伐ちしかを管西魏に降り封せられて梁王とされり繹に諸王を破りしかを遂に王僧辨を遣はして侯景を討たしむ侯景敗れて簡文帝を弑し豫章王を立てまた其位を篡して漢帝と稱す時に始興の太守陳霸先も亦兵を起したり

陳霸先の吳興の人なり儼然にして謀略あり梁室の亂を見て兵を起し王僧辨と兵を合せて侯景を討ちしかは景拒く能はず遂に走りて殺されたり繹依て江陵にありて位に即く是を元皇帝と云ふ(明紀一三)

時に西魏は巴蜀の地を畧したりしが遂に來り寇し江陵を圍みて元帝を降し梁王管を江陵に移して帝とあす是を後梁と云ふ陳霸先は王僧辨と共に建康にありて晉安王方智を立てしが幾もなくして僧辨は更に蕭淵明を北朝より迎へ立つ是より三人の間相和せず霸先遂に僧辨を襲殺しまた方智を立て自ら相國陳王となり遂に其位を篡す是を陳の高祖武皇帝と云ふ梁凡四世五十六年にして亡びぬ(紀一三)

第十三節 齊周の興亡及び南北の合一

高洋武帝を弑す

宇文泰西魏を創す

陳の武帝の位に即きし前七年に東魏の高洋も亦帝位を篡す洋は高澄の弟なり是を齊の文宣帝と云ふ又西魏の宇文泰は孝武帝を弑して文帝を立て、諸政を總攬し官制を改め計帳戸籍を造り府兵の法を作り文帝崩して後泰は太子欽を廢して恭帝を立て其勢頗盛なりしも未だ位を篡するに至らずして薨し其子覺つきて周公となり遂に帝位を篡す是を北周の孝閔帝と云ふ時方、陳の武帝の位に即きたる年なり是より北朝は齊周の二國となれり

齊に於ては文宣帝崩して太子殷立ちしが其叔父常山王演篡立す是を孝昭帝と云ふ孝昭帝崩して其弟湛また太子百年に代りて自立す是を武成帝と云ふ帝位を太子緯に譲れりかく篡弑の相つさるか上

一和士開祖珽の徒權を專し斛律光を殺す是より齊の勢頗衰へたり周に於ては宇文護(護)政權を專しして孝閔帝を弑し又明帝を弑し更に武帝を立て大兵を率ゐて齊を伐ちて破られたり武帝護の

陳の武帝

高洋武帝を弑す

宇文泰西魏を創す

陳の武帝

專權を惡みて之を殺し諸政を親し釋老の教を禁し淫祀を去り妃嬪を會きて大に紀綱を整理す時、齊は陳の兵を受けて國勢益衰へたりしかば武帝遂に兵を出して齊を伐ち晉陽を取り鄴都を攻め遂に齊主を虜にす齊凡五世廿八年にして亡びぬ(註七三)かくて周遂に北方を併せたりしが翌年武帝崩し宣帝立つ及び隋公楊堅外戚を以て漸く權を專しす宣帝遂に位を太子暉に譲りしかば堅益外戚の親を以て政をとり尉遲迥等兵を擧げたりしが皆克たき堅相國隋王となり遂に帝位を篡す是を隋の高祖文皇帝と云ふ(註七四)

時、陳は武帝より五傳して叔寶及び後主亦南朝荒淫の主の一人なり故に常に政務を顧みず奢侈を事とし臨春結綺望仙の三閣を作りて其華麗を極め又張貴妃、蘇貴嬪、孔貴嬪等を寵し宮人袁大捨を女學士となし僕射江總等と共に詩を賦し樂を作し玉樹後庭花等の曲ありさかく奢侈を事とし、より國用の不足を生じ遂に軍人士火を論せし關市の税を徴し大に聚斂を行ひたりしかば士民皆嗟怨

南北朝の差異

し又將帥の待遇宜きを失ひたりしかは武臣も亦解體せりかゝる勢
 なれば陳室は猶殘燈の風を待つが如くと云ふべきなり
 さて隋の文帝は既し周し代りて大し國政を修め遂し海内を一統せ
 むとする志あり向きし後梁を滅ししが陳の内政の大し亂れたるを
 聞きて南征の計を決し其子晉王廣を元帥とし賀若弼韓擒虎を遣は
 し遂に江を渡りて建康に入り陳主叔寶を虜にす陳凡五世三十二年
 として亡び南北始めて一に合せり時に隋の文帝位し即さしより九
 年として我が紀元千二百四十八年（五八八年）より
 南北朝の間は殆百五十餘年に過ぎせど雖も其起原を尋ぬれば既に
 東晉の初めあり南方は漢人種の據りし所北方は滿洲及び蒙古人種
 の據りし所となりて南北朝の基を開きしあり故に前後を合すれば
 二百五十餘年し過ぎたりかく久しき間南北人種を異にして支配し
 たるとなれば其間し萬事の差を生ずるは自然の勢なり故に言語の
 如きは大に南北音聲を異しするし至りして疑なし風俗より見れば

清談の俗の南朝し行はれて北朝し行はれず優美の風は南朝し富み
 て北朝に乏し彼の南朝人士の牛車肩輿より北朝人士の騎馬より
 りしが如き其一斑を見るべし又學術より見れば南朝し詩賦文
 章大し行はれて陶淵明謝靈運江淹沈約の徒輩出じ北朝し經
 術訓詁の學盛し行はれて徐遵明の徒起りたるが亦其差異の點
 とす其制度の如きも多少の差異あり然るに隋の陳を合せたるに及
 び北朝の風は南朝の習を抑し清談の跡を絶し牛車肩輿の行なく經
 學も亦廢興りたるが如し然れど南北朝の時代は支那後世南北の差
 を生下たる原因ありとす

明治二十七年十二月十四日 文部省檢定

CL. NO. 11974



同同同同同同同同明
 治
 廿廿廿廿廿廿廿廿
 八八八七七七六六
 年年年年年年年年
 四三三十一九九十
 二一
 月月月月月月月月
 十二十五一五一十六
 二十五 一
 日日日日日日日日
 訂訂訂訂訂訂訂第第
 正正正正正正正
 五四四三三二二
 版版版版版版版版
 發發發發發發發發
 行行行行行行行行

發行者
 印刷者
 關西大
 販賣所

著者

市村瓊次郎
 牛込區北山伏
 十番地
 吉川半七
 一丁目南傳馬地町
 杉原辨次郎
 京橋區元數寄屋町
 四丁目二番地
 松村九兵衛
 大阪南區心齋橋筋

支那史要上卷
 定價金參拾五圓



(東京市京橋區元數寄屋町四丁目二番地 杉原辨次郎 印刷)

支那史要上卷

支那史要上卷

支那史要上卷

